

山形県川西町

K-858

道伝遺跡

発掘調査報告書

—置賜郡衙推定地—

1984

川西町教育委員会

道 伝 遺 跡

1984

川西町教育委員会

序

川西町は、置賜盆地の一角を占め、西方に南北に延びる丘陵地帯をもつ、素晴らしい自然の地形と景観に恵まれた“緑と愛と丘のあるまち”であります。

本報告書は、川西町教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した、道伝遺跡調査四年間の成果を集約し、川西町埋蔵文化財調査報告書第8集として発行するものであります。

昭和54年度に緊急発掘調査を行なったところ、集落跡と考えられていた遺跡より、多量の木製品をはじめ、墨書き器、公的な文書木簡が発見されましたので、県文化課のご指導を得、昭和55年度より、三ヵ年計画で重要遺跡確認調査として、発掘調査を実施いたしました。

調査結果、東日本最古の絵馬、井戸跡、建物跡等が発見され、奈良末期より平安期における、古代置賜郡の郡役所跡との評価を得たものであります。

本調査は、県文化課をはじめ、関係各位のご指導とご援助を賜り、多大な成果を納めることができました。衷心より感謝申しあげる次第であります。

さらに、この調査が発端となって、会員850名を擁する、川西町文化財保護協会が設立され、講演会、会報発行等々の事業を推進し文化財の保護、啓蒙にあたっておられることに意を強くし、心から敬服するものであります。

昭和58年度において実施した調査によって、天神森古墳や下小松古墳群の中に「前方後円墳」の確認がなされ、さらに、道伝遺跡周辺にも、同年代の遺跡が広く分布していることが確認されております。

この道伝遺跡発掘の成果を、山形県はもとより、広く東北古代史の究明に役立てて頂くとともに、埋蔵文化財に対する理解を、一層深められるための一助になれば幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の指導並びに執筆にご尽力賜りました、各先生方をはじめ、地権者、そして作業を担当くださいました方々に、心から厚くお礼申しあげます。

昭和59年3月

川西町教育委員会

教育長 金子兵司

発刊によせて

古代出羽国の管下にあった郡については、延喜式を見ると、最上・村山・置賜・雄勝・平鹿・山本・鮑海・河辺・田川・出羽・秋田の郡名があり、これらの郡のうち山形県に属するのは、最上・村山・置賜・鮑海・田川・出羽の6郡にあたる。

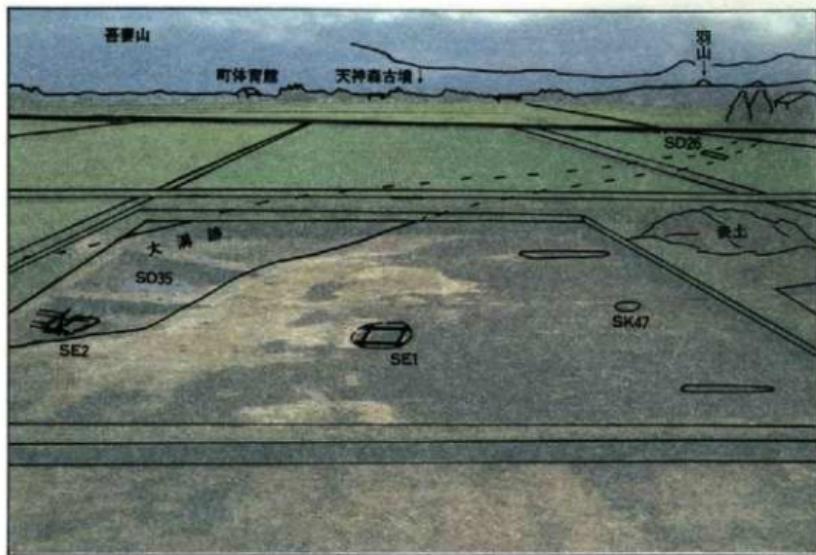
道伝遺跡のある内陸の現置賜地方は、すなわち置賜郡となる。この置賜郡の郡衙跡としては、地名より、高畠町の小郡山と南陽市の郡山が推考されてきた。その後、昭和54年、川西町下小松の道伝遺跡の緊急調査において検出した寛平八年の公的な文書木簡等より、道伝遺跡は置賜郡衙とも考えられることになり、重要遺跡確認調査として3ヵ年の調査が行なわれたものである。この調査においても、絵馬や斎串、箋子、墨書き土器、建物等より、奈良末から平安にかけて約200年間にわたる遺跡であることが判明している。当郡内における官衙的性格の遺跡の中で、遺物・遺構に於ては、群をぬくものであり、今のところ他に発見されていないことから、有力な置賜郡衙とみられるわけである。

当時の置賜郡には、置賜郷・広瀬郷・屋代郷・赤井郷・宮城郷・長井郷の6つがあったわけで、この道伝遺跡周辺には置賜山という山もあり、近年の発掘調査等を考えると、倭名類聚抄に記されている置賜の郷であると思案している。

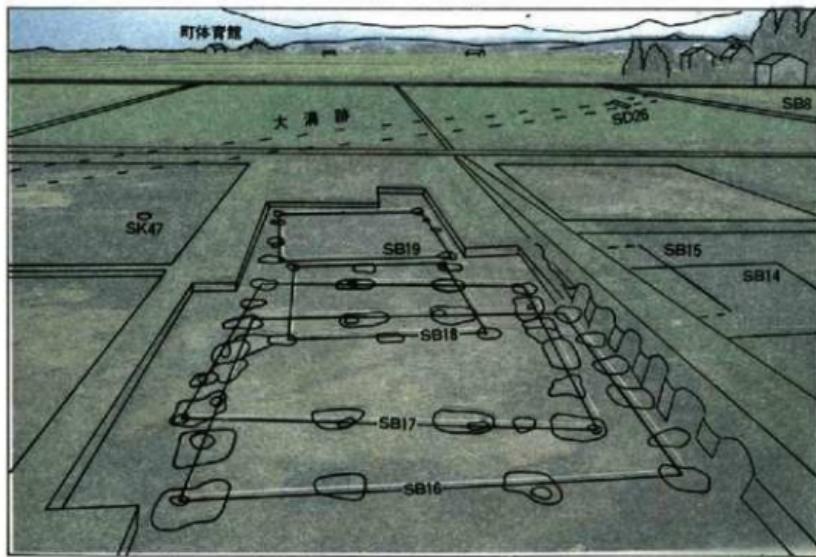
今後、調査地を広げ、完掘する必要もあるが、貴重な遺跡だけに保存には十分に努力しなければならない。また、本報告書は東北の古代官衙跡の研究に新しい一例を加えるものである。

道伝遺跡特別調査員

山形県考古学会 会長 柏倉亮吉
米沢女子短期大学 学長



G 47~55—56~60調査地



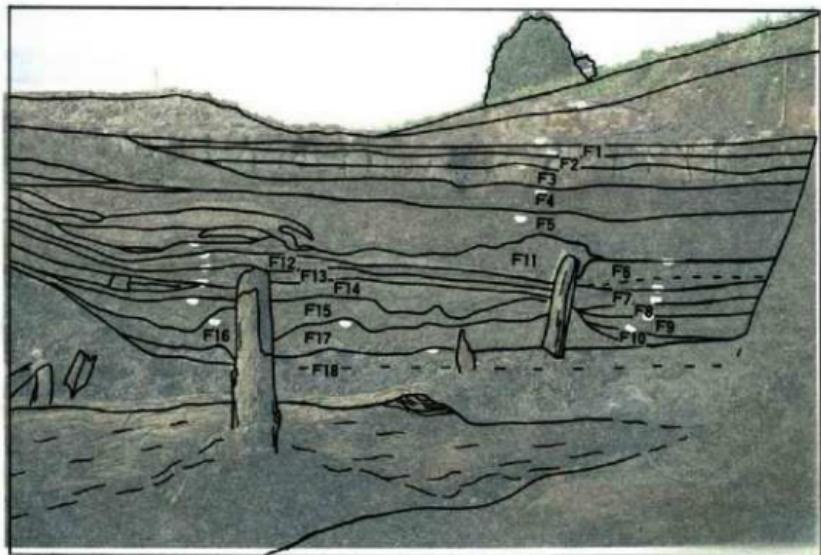
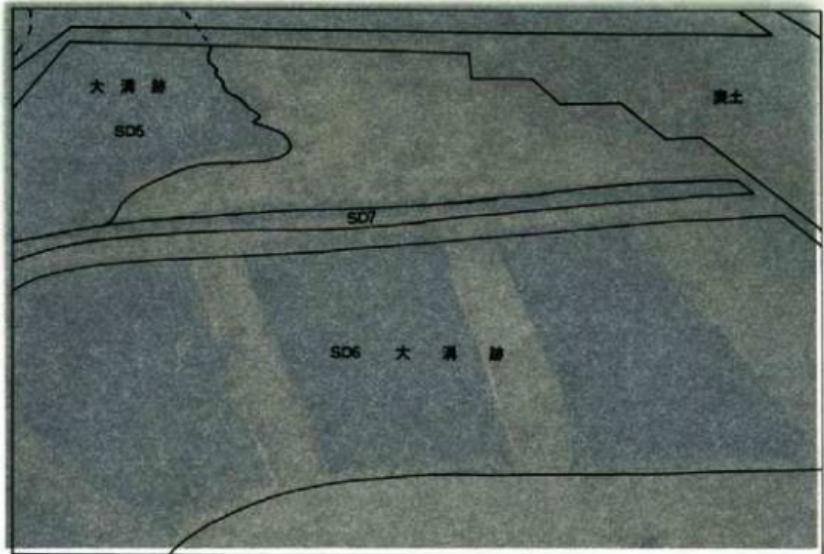
SB 16・17・18・19調査地



G 47~55—56~60調査地



S B 16・17・18・19検出状況



SD5 土層示図



SD5・6・7プラン確認



SD35土層断面

目 次

序

発刊によせて

調査要項・例言

本 文 目 次

I. 遺跡の概要	1. 遺跡の位置と地形	1
	2. 周辺の遺跡	1
	3. 遺跡に関する近世以降の変遷と研究	3
	4. 遺跡の層序	5
II. 調査の概要	1. 調査経過	6
	2. 調査の方法	7
III. 検出された遺構	1. 掘立柱建物跡	8
	2. 井戸跡	13
	3. 溝 跡	17
IV. 検出された遺物	1. 土器 (1)出土地区	18
	(2)出土土器様相 土師器	36
	須恵器	39
	赤焼き土器	41
	2. 墨書き土器	48
	3. 木 製 品	57
	4. 種 子	59
V. 考 察	1. 遺構期の設定	66
	2. 出土遺物に見る遺跡の特質	68
	a. 絵馬	68
	b. 墨書き土器	69
	c. 木筒	69
	d. 焼米と焼けた穀類	70
	3. ま と め	70
	要 約	72
○山形県道伝遺跡の木筒	国立歴史民俗博物館 平川 南	73
○道伝遺跡出土の豎杵について 勅元興寺文化財研究所 北野信彦	81	
○東北地方における遺跡出土の丸木弓について 勅元興寺文化財研究所 松田 隆嗣	86	

図 版 目 次

- 第1図版 遺跡航空写真
第2図版 明治八年字限図
第3図版 平家絵図
第4図版 遺跡速影
第5図版 挿立柱建物跡 S B 1・S B 21
第6図版 井戸跡 S E 1・S E 2
第7図版 出土遺物状況 S D 5・S D 35
第8図版 出土土器 S D 5
第9図版 出土土器 S D 5
第10図版 出土土器 S D 5・S D 24
第11図版 出土土器 S D 24・S D 35
第12図版 出土土器 S D 35
第13図版 出土土器 S D 35
第14図版 出土土器 S D 35
第15図版 出土土器 S D 35
第16図版 出土土器 S D 35・S D 26
第17図版 墨書き器銘
第18図版 墨書き器銘
第19図版 墨書き器銘
第20図版 墨書き器銘
第21図版 墨書き器銘
第22図版 第1号木簡
第23図版 第2号木簡
第24図版 第3・4号木簡
第25図版 第5号木簡
第26図版 第1・2号絵馬、第6号木簡、木簡様木製品
第27図版 出土木製品
第28図版 出土木製品
第29図版 出土木製品
第30図版 出土種子

調査要項

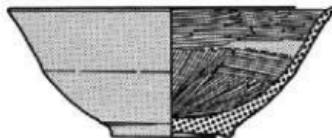
1. 遺跡名 道伝遺跡
2. 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字道伝前（他）
3. 調査期間 昭和54年6月1日～8月28日 緊急発掘調査
昭和55年6月2日～9月22日 第1次 重要遺跡確認調査
昭和56年6月1日～6月17日 第2次 重要遺跡確認調査
(同年) 8月20日～11月18日 第3次 重要遺跡確認調査
昭和57年4月7日～11月18日 第3次 重要遺跡確認調査
4. 調査主体 川西町教育委員会
5. 調査主任 手塚 孝(昭和54年度)・藤田有宣(昭和55～57年度)
6. 調査補助員 藤田有宣(昭和54年度)・月山隆弘(昭和55・57年度)
源辺源二(昭和56年度)・高橋宏平(昭和56・57年度)
7. 特別調査員 柏倉亮吉・工藤定雄・加藤 稔・平川 南・佐藤鎮雄・手塚 孝・
橋爪 健
8. 調査協力委員 五十嵐不二雄・井上昌平・石田四郎右衛門・石田東一・小原久助・
藏田順治・小関寿郎・竹田源右衛門・竹田又右衛門・故小形仁兵衛
9. 調査指導 山形県教育庁文化課・東北歴史資料館
10. 事務局 川西町教育委員会 社会教育課
教育長 近野和雄・笛木勝政・金子兵司
課長 梅津藤栄・工藤盛光
四柳清徹・佐藤 肇・高橋 誠・片倉洋子・松村利子・船山エイ
11. 調査協力 横山栄一・藤倉徳夫・高橋啓一・渡辺源二・小野庄士・佐藤嘉広・
船橋理佐子・伊藤博行・平田東助・高橋寅雄・勝見 学・石田志朗・
遠藤 孝・佐藤正博・奥村久一・奥村義昭・東海枝国蔵・本間さわ・
船山悦子・船山良子・平田美代子・遠藤とも子・奥村多美子・鈴木信子・
鈴木芳徳・手塚武雄・鈴木利一・平田孝一・船山ひろ子・小原もん・
小原ふみ子・高橋千代子・勝見花子・石田いち子・平田よし子・
大崎由紀子・藤倉久美
川西町連合婦人会・川西町401会・置賜農業高等学校・置賜考古学会・
川西町文化財保護協会

例 言

1. 本報告書は川西町教育委員会が昭和54~57年度における4カ年（緊急発掘調査、第1次~3次重要遺跡確認調査）の報告書である。
2. 報告書編集にあたり、藤田・月山・高橋が担当し、藤田が執筆した。実測及びトレイス作成は月山・高橋が担当し、写真撮影は、藤田・高橋が担当し、接写撮影においては、米沢東高教諭小野庄士氏に依頼した。
3. 墨書き器の判読・木簡の解説訳文についての執筆は、国立歴史民俗博物館助教授平川南氏に依頼し、元興寺寺文化財研究所・松田隆嗣氏・北野信彦氏には木製品（杵・弓）について特にご寄稿をいただいた。
4. 土器実断面図における図示の中で土師器■■■須恵器□□□赤焼き土器■■■と便宜的に類別し、土師器において黒色処理が施されるものにはa・bのように図示した。



a 内黒土師器



b 両黒土師器

5. 造構に堆積する覆土はFで表わし、土色は「標準土色帖」農林省水産技術会議事務局監修を活用した。
6. 本遺跡出土木簡・絵馬・墨書き器の赤外線テレビ写真撮影は、東北歴史資料館ならびに研究員の方々に協力を得たものである。

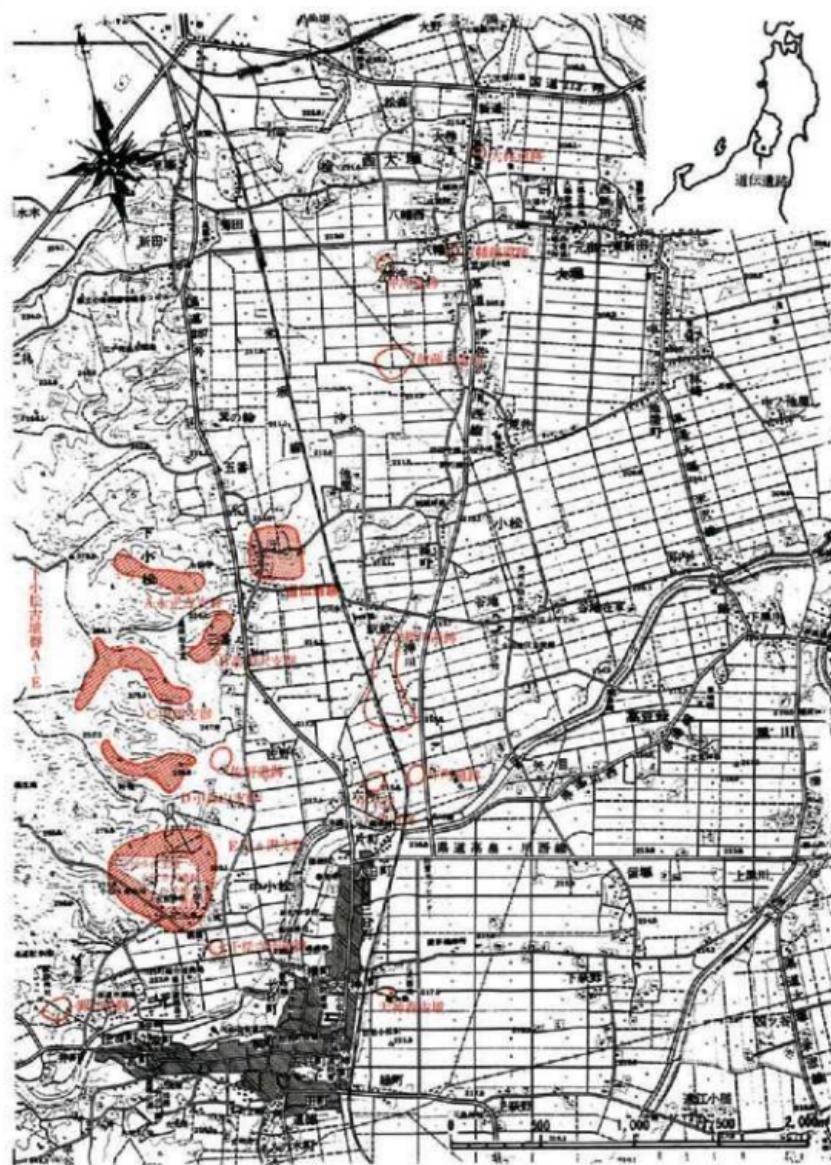
I 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地形

道伝遺跡は、山形県米沢盆地の西方、下小松丘陵を西にひかえた、山形県東置賜郡川西町大字下小松字道伝前1031番地（その他）に所在する。遺跡の所在する周辺地域一帯は第四紀沖積世の堆積層で山形県南部の有数な稻作地帯である。遺跡の西方約1kmには玉庭丘陵から連なる新第三紀中原層からなる標高約300mの眺山丘陵が南北に走り、北方になるにつれて次第に低くなっている。遺跡東方には玉庭丘陵を源とする犬川がゆるやかに流れ、黒川と合流し最上川にそいでいる。この犬川の浸食作用によって形成された沖積底位河岸段丘上に遺跡は位置し、標高210mの水田地帯にある。また、西の丘陵が米沢盆地と長井盆地を境とするもので山形県南側平野部の中央に遺跡は位置することになる。遺跡東方50mには国鉄米坂線が走り、国鉄犬川駅北西150m地点に、遺跡が位置する。この地域はゆるやかな丘陵を西にもち、東には米沢盆地が広がり遠く奥羽山脈の峰々が南北に連っている。

2. 周辺の遺跡

川西町の埋蔵文化財の調査は本遺跡が最初であり、まだ全域にわたる分布調査は行なわれていないことから、昭和58年度より道伝遺跡を中心にして分布確認調査が進められている。現在まで確認された遺跡は、西方にある丘陵の裾の部分に広がる绳文時代中期を中心として遺跡が確認されているが、弥生時代以降の遺跡はいまだに発見されない。しかし、ここ2~3年の調査において本遺跡を中心として、平安時代の遺跡が数多く発見され、また、西方の下小松丘陵には200基にのぼる墳丘が確認された。中には前方後円形を示す墳丘が15基確認され、全長20~35mを測る。円墳は8~24m、方墳は8~27mのものが発見された。これらの墳丘は発掘調査が行なわれていないことから正確な築造年代は不明ではあるが、古墳時代末期から中世にかける墳丘群と考えている。また、本遺跡南方2.3kmには4世紀末、5世紀初頭の築造とされた天神森古墳があり、この古墳は、昭和58年度の調査において、全長76m・後方長43m・後方幅56m・後方高4.3m・前方長32.5m・前方幅32m・前方高3mの規模であることが確認された。また、左右対称の形で、古墳の年代を示唆する底部穿孔の土師器が検出され、最上川流域において最古の古墳であることが確認されている。平安期の遺跡として、昭和58年の分布確認調査において道伝遺跡の東方に広範囲に認められ、中には墨書き土器、須恵器坏、甕・蓋等が多量に確認された。また、本遺跡北方800mには古墳時代末期から奈良時代初頭の龍藏北遺跡があり、眺山丘陵にある下小松山古墳群と本遺跡とのつながりが思考されるものである。



第1図 道伝遺跡周辺の遺跡分布

3. 遺跡に関する近世以降の変遷と研究

本遺跡は昔から土器片が散乱し、東側を真近に通る国鉄米坂線建設工事の折、遺跡内の字古館より土が軌道敷に運ばれ、当時、水田面より高い古館の畠地が水田になったということである。大正13年頃、多量の土器片が出土したという話である。また、近くの字道伝の水田では、春の農作業が始まると馬耕の鋤に丸太らしいものが等間隔にさわることが前々から云われ、この地点を結ぶと一直線にならんでいることが確認された。昭和10年10月に郷土展覧会の折、時の犬川村村長石田文次郎、地区住民、竹田源右衛門氏、石田隆二氏らが中心となり、山形郷土研究会（会長三浦新七博士）に調査を依頼した。同研究会より、同年11月15日に山形高等学校（現山形大学）安斎徹教授が現地におもむき調査にあたった。

た。同教授は6本の柱根を確認し、柱根列は柵木であることは疑いないとしながらも、門柱であるのか、横柵であるのかあきらかにされないでいたものである。この時掘り出され



村長の第一報

柵木の現場へ急ぐ

第2回

犬川の柵趾を探る

た柱根が川西町資料室に保管され、以来、この遺跡は「置賜の柵」「犬川の柵」といふ見方が持たれてきたものである。この調査が行なわれる4年前の昭和6年には城輪柵跡が発見されている。その後発刊した「東置賜郡史」「中郡村史」には置賜開拓の拠点か、すくなくとも役所をかねた柵か、小規模な古代の城を推定し、蝦夷に対する政治的行動の中心としての建造物ではないかという置賜の開拓を知る手がかりになるのではと結んでいる。また、郷土史家小形仁兵衛氏らも早くから着目されていたものである。

第16讲 定理卷

第3回

第2・3図は東京日夕新聞に

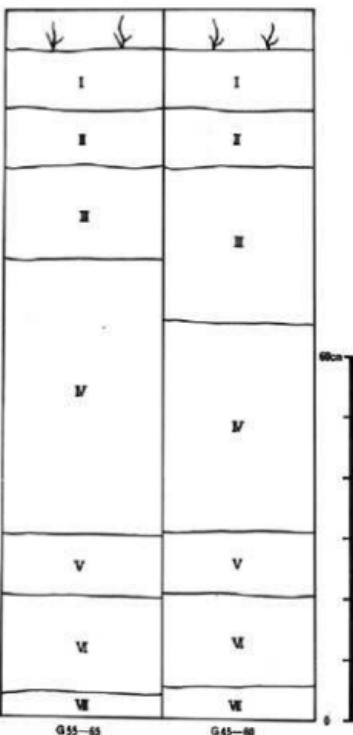
昭和10年11月20・21の両日に
掲載された記事である。

4. 遺跡の層序

本遺跡は犬川右岸の河岸段丘上にあり、遺跡西方、下小松丘陵の薬師沢より流れる沢水が西から東方に流れる微高地を中心として立地していたものと考える。

層序は昭和54年5月の試掘調査で大きく4層に大別し、報告している。遺物包含層であるⅢ層の土質は各調査地ごとに異なり、G55-66付近は黒色粘質土、G50-75は灰褐色砂質土、G45-60は明褐色粘質土となる。また、遺物包含層までの深さは18~25cmと浅いものである。

- 第Ⅰ層 暗褐色、微砂質粘質土の耕作土である。
 - 第Ⅱ層 褐色微砂質粘土であり、水田の基盤をなすものと考えられる。表土層Ⅰ・Ⅱをあわせて、約22cmの層である。
 - 第Ⅲ層 G55-65、黒色粘質土で乾燥すると非常に固くなる。約15cmの厚さで、柱根の出土の多いのは、この土を掘り込んで作られた掘立柱建物跡が多い。
G50-75、暗灰褐色砂質土、約30cmの厚さで、酸化すると明褐色となる。G45-60、明褐色粘質土、約20~30cmの厚さである。
 - 第Ⅳ層 青灰褐色粘質土、この層以下の土層は本遺跡全域に広がるもので、無遺物層となる。この層は40~60cmの厚さをもつところにより黄褐色粘質土が混入するところもある。
 - 第Ⅴ層 青灰褐色砂層10cmの厚さである。
 - 第Ⅵ層 厚さ15cmの粘質土で第Ⅶ層の極暗黒色粘質土がブロック状に入る。
 - 第Ⅷ層 極暗黒色粘質土にて自然遺物が入る。
- 昭和54年度の圃場整備事業により、第Ⅰ層は擾乱層となり、55年度の重要遺跡確認調査以降では第Ⅲ層上面に第Ⅱ層が薄く部分的に残る。本遺跡は河川の影響を受けた沖積台地であり、水成層が基底をなしている。また、この地域一帯の地表高はほぼ平坦面となっているところである。



第4図 土層セクション

II 調査の概要

1. 調査経過

本遺跡は、昭和10年に柱根列が確認されてからは、あまり着目をされないまま、また、大きな開発もなく40年の歳月を経過したのであるが、圃場基盤整備が施行されるにあたり、昭和54年度に緊急発掘調査が行なわれた。この調査で木簡等貴重な資料が検出されたことにより、県文化課、町教育委員会、県置賜北部土地改良事務所の話し合いで、すでに圃場基盤整備事業により全水田の耕作土が剥離されている田面にもう一度覆土をなし、遺跡の範囲性格を探求するため、昭和55年度より3カ年の計画で重要遺跡確認調査として実施したものである。

昭和53年4月30日

第1回予備調査、川西町教育委員会が主体となり、2本の柱根と須恵器片を確認している。

昭和53年10月27日

第2回予備調査、川西町教育委員会が県教育庁文化課の協力をえて、試掘調査を行ない、柱根、須恵器、土師器片を検出し、遺跡面積が23.625m²の平安時代集落跡と判定した。

昭和54年5月1日～同年5月30日

第3回予備調査、第1・2次予備調査をもとに、川西町教育委員会がボーリング探査と試掘を行い、遺跡は120,000m²であることが確認され、遺跡を含む160,000m²の5百分の1の地図を置賜農業高校の協力を受けて作成する。

昭和54年6月1日～同年8月28日

緊急発掘調査、昭和10年に発見された柱根は3間×7間の2面廊のもつ掘立柱建物であることが判明し、掘立柱建物跡8棟、SD1大溝跡より木簡5点、墨書き土器93点、櫛、皿、盆、碗、漆器碗、曲げもの、掛け矢、鍬、杵、弓、田下駄、瓢箪、クルミ、トチの実等が検出する。発見された第1号木簡の墨書き内容により、置賜郡衙跡の可能性が強まり、下部構造の構成と遺跡範囲を把握するため、次年度より3ヶ年の計画で重要遺跡確認調査を行うことになる。調査面積は3,285m²である。

昭和55年6月2日～同年10月3日

第1次重要遺跡確認調査、掘立柱建物跡2棟、大溝2条（SD1コーナー部の検出）、木楕、皿類6点（裏に彫刻による主々、田、二万、由、平、水の文字あり）、墨書き土器、曲げもの、須恵器大甕、横榙等を検出し、精査面積は1,140m²である。ベンチマーク（BM1, G25-75、標高21,385m）を御影石で設置する。

昭和56年6月1日～同年11月18日

第2次重要遺跡確認調査、SD1の溝跡の確認のためトレントを組み、大溝の南西側を検出する。掘立柱建物跡2棟、池状の溝跡（SD24）より墨書き土器20点、木筒1点、絵馬2点、斎串2点、曲げもの等を検出する。特に絵馬2点は東日本最古のもので、斎串と完形の須恵器壺、蓋との検出より、一種の祭事形態を確認できる。精査面積は638m²である。

昭和57年4月7日～同年11月18日

第3次重要遺跡確認調査、道伝遺跡西側分布確認調査及びSD1、SD6のボーリング及び試掘による確認調査により、SD1大溝は直角に曲り150m北側まで確認する。SD6は75mの方形に廻る溝であることを確認する。掘立柱建物跡9棟、井戸2基、溝跡、墨書き土器、横瓶、二面硯、炭化米、炭化小豆、横槌、盆、横櫛、曲げもの、漆器、木桶、定規、弓等を検出している。

2. 調査の方法

発掘調査をすることは、遺構を破壊することに結びつく。遺跡の保護を考えるには、できる限り当時の状況を保存することが最も望ましいことであり、今回の調査においては、遺構の構造や性格を明らかにし、遺跡総体を理解することが必要なことではあるが、できる限り確認するだけにとどめ、遺構性格を理解する上で必要最小限での掘り下げを行なった。調査区の設定は、調査目的と計画にそって調査区を設定し、遺跡内に2m×2mのグリッドを用い、主軸線を磁北にとり、南北350m、東西200mに設定した。

遺構、遺物の記録はすべて記号によって統一し、主なものは台帳に記入する。記録は調査日誌、遺構台帳、遺物台帳の3冊を原則とするが、必要に応じて別項を付け加えることにした。断面図、遺構平面図は20分の1とし、遺構配図100分の1、地形測量図は500分の1とした。

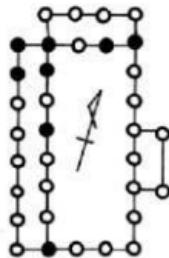
出土した遺物には年次ごとに、KWNDD(S54)、KWNDDI(S55)、KWNDDII(S56)、KWNDDIII(S57)と記入し分類している。昭和54年度より57年度の4年間の発掘調査において、出土した遺物は木器類を含めて遺物整理箱に70をこえるもので、遺物台帳とは別に、主なものについては遺物カードを作り実測図、拓影図写真等を含めて制作している。

III. 検出された遺構

過去4年次の調査によって発見された遺構には掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡を確認することができたが、遺構の重複するものについては、その掘り方の中の埋土をすべて掘り出さず、平面記録に留めて埋め戻したものが多く、遺構の切り合関係のあるものをのぞいて、その前後関係は若干の変更が生ずる可能性をもつものである。

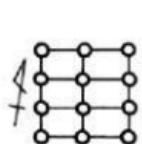
1. 掘立柱建物跡

S B 1 掘立柱建物跡 G57~64~64~74



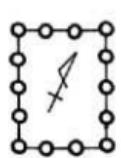
一部の柱根は耕作土層に入り込んでいたもので、S B 2・7と重複し、掘り方より S B 2・7 より新しく梁行東西3間×桁行南北7間の掘立柱建物で西・北に廂をもつ。柱間は2.5m等間で、主体部の掘り方は65~95cm、深さ30~45cmを測る。柱根は直径20~28cmで埋土には粘質土を用いている。母屋部の柱根が確認されたのは6本、廂部柱根2本であり、掘り方は梢円形状を呈し直径40~60cm、柱跡は直径15~18cmである。母屋部柱根と廂部柱根の桁行の柱筋は磁北より西に20度の傾きである。主体部柱根(E B 2)には約10~20cmの礎板がつかわれて、埋土より土器小片が出土している。

S B 2 倉庫跡 G61~64~64~68



S B 1・7と重複し、新旧関係では S B 1 に切られている。梁行東西2間(2.9m+2.9m)×桁行南北3間(2.35m等間)の総柱の建物であり、掘り方平面形は約55~65cmの隅丸方形を呈し、柱痕は直径約20cmである。埋土は黒色粘質土に暗黄色粘質土がブロック状に入っている土である。柱掘り方の掘り下げは行なっていない。西桁行の柱筋は磁北より西に15度の傾きである。

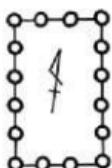
S B 3 掘立柱建物跡 G47~51~63~67



梁行3間(2m等間)×桁行南北4間(1.75~1.98m)の掘立柱建物跡で掘り方の平面形は、直径45~70cmの梢円形である。柱掘り方の掘り下げは行なっていないことから、遺構にともなう遺物は検出されない。柱根跡の確認できる E B 56で直径25cmの丸柱根跡が確認されるが、他の掘り方では確認されない。西側の柱筋の方位は北で西に30度振れ、S B 7と同じ傾きを示す。

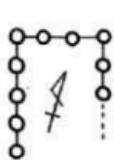
※建物跡の略図において●は柱根、○は柱痕を示す。

S B 4 掘立柱建物跡 G40~44~66~71



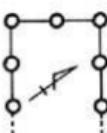
梁行東西3間（南梁東より $2.1+1.9+2\text{m}$ ）×桁行南北5間（西桁南から $1.9+2.35+2.35+2.25+2.4\text{m}$ ）で掘り方は円形で直径 $50\sim65\text{cm}$ を測り、柱痕跡は直径 $18\sim25\text{cm}$ である。柱掘り方の掘り下げは行なっていないことより遺物は検出していない。西側の桁行の柱筋は磁北より15度西に振れるもので、S B 2、倉庫跡と同じ傾きを示す。本建物の北西部付近は焼土及び炭化物が検出した。

S B 5 掘立柱建物跡 G45~48~73~77



梁行東西3間（西より $1.85+1.65+1.85\text{m}$ ）×桁行南北4間以上西桁北より（ $1.7+1.4+1.5+1.7\text{m}$ ……）の掘立建物で南側は昭和54年度まで用いられていた用排水路（幅約 2m ）に切られている。柱痕跡は確認されないが、桁行掘り方筋の方位は磁北より20度西に振れる。S B 1と同じ傾きをもつ建物で、掘り方は隅丸方形状の約 $50\text{cm} \times 50\text{cm}$ の大きさで埋土は暗灰色をなすが、掘り下げをしていないことから遺物は検出していない。

S B 6 掘立柱建物跡 G51~54~73~76



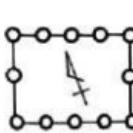
梁行東西2間（北より $3+2.4\text{m}$ ）×2間以上（北側桁北より $2+2.1\text{m}$ ……）で柱根の抜き取りを行なった後小礫を埋めこんだものと見られるが、掘り下げを行なわないため断面図はとっていない。また遺物は検出していない。小礫の埋められた大きさは $50\sim60\text{cm}$ の直径で磁北より東に30度の傾きが見られる。（第2集において1間×2間以上として報告している）

S B 7 掘立柱建物跡 G64~66~64~68



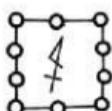
隅丸方形及び橢円状の掘り方をもち、S B 1の掘り方により切られている。掘り方は直径 $30\sim40\text{cm}$ で柱痕跡は 20cm 前後である。建物は2棟重複していると考えているが、遺構は面確認の段階であり明確にできなかった。ただ、掘り方が大小交互に 2m 等間に検出され、桁行と考えられる。柱筋は磁北より西に30度振れ、S B 3と同じ傾きである。

S B 8 掘立柱建物跡 G77~82~29~33



昭和54年の圃場整備作業により、重機で耕作土を剥離した際柱根が露出したもので、掘り方等の検出は涌き水のため検出していない。梁間1間（ 4.3m 柱根が検出していないが2間であったと考えられる）×桁行東西4間（南桁東より $1.9+2.5+2.45+1.6\text{m}$ ）南側桁柱筋は北から西に70度の傾きを示す建物で柱根は丸柱、9本検出し、 $10\sim20\text{cm}$ の太さである。

S B9 堀立柱建物跡 G20~25~45~50

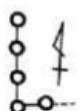


梁行東西2間(東梁南より2.35+2.5m)×桁行3間(西桁南から2.35

+2.5+2.4m)の隅丸方形の掘り方(約90×70cm, 深さ約25cm)である。

西側桁行の柱筋は北で西に12度振れる。柱痕跡は確認できるもので直径15~20cmの丸柱跡である。埋土は炭素粒が多く検出され, E B100より土師器片が出土している。東側 E B103, 104のプランの確認はあまい。

S B10 堀立柱建物跡 G18~20~45~50



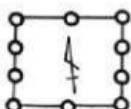
梁行1間以上(2.4m + ...) × 桁行3間(南桁2.5+2.3+2.25m)で南側は擾乱され検出していない。掘り方は、ほぼ円形で直径約50cm, 深さ35~40cmを測る。柱痕跡は20~30cmで丸柱である。掘り方より遺物は検出されない。桁行柱筋は磁北である。

S B11 堀立柱建物跡 G22~24~47~48

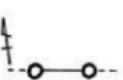


掘り方が浅く5~10cmの深さで埋土は炭素粒を多く含む黒色粘土層で柱痕は確認されない。S D11に切られ、柱間は2.6m等間であり、掘り方中央部を結ぶ線は北より西に60度の傾きを示す。

S B12 堀立柱建物跡 G82~92~72~75

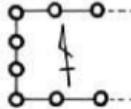


梁行東西2間(南梁行東より2.1+2.1m)×桁行南北3間(西桁行南より1.5+1.45+1.3m)の正方形の建物跡で、掘り方は円形を示し、直径70~80cmである。柱痕跡は直径25~30cmの丸柱で、南北桁行柱痕軸は北より東に6度の傾きである。掘り方を3基(E B118・119・122)掘り下げたが遺物は発見されていない。



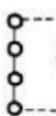
S B13 堀立柱建物跡 G90・91~72にて2基の掘り方と柱痕が確認され、柱痕跡は15~20cmの隅丸方形形状であり、掘り方は直径60~70cmの楕円形をなし、柱間は2.05mで東西に延長すると考える。しかし、調査期間や調査地外になることから遺構面を拡張していない。

S B14 堀立柱建物跡 G62~64~55~58



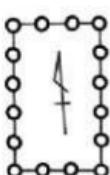
梁行東西2間以上(南梁行西より2.15+2.1m ...) × 桁行南北3間(西桁行南より2+1.9+1.9m)の建物跡で、掘り方はほぼ円形を示し、直径40~50cmである。掘り方(E B130)より内黒土師器壊片、須恵器壊片が出土しているが掘り下げは行なっていないことから出土遺物は小破片2点検出したにすぎない。柱痕跡直径10~20cmで西桁行の柱筋は北より東に4度の傾きを示す。

S B15 掘立柱建物跡 G60~62-54~57



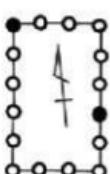
梁行東西2間で3.5m(中柱が調査地外のため2間と考えている。)×桁行南北3間(西桁行南より2+1.75+2m)の建物跡である。掘り方は円形で直径40cmを示し、柱痕跡は直径15cmの丸柱である。西桁行の柱筋方向は磁北である。掘り方より遺物は検出されない。

S B16 掘立柱建物跡 G57~61-51~61



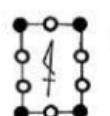
梁行東西3間(南梁行西より2.15+2.65+2.3m)×桁行南北5間(西桁行南より1.65+1.45+1.25+1.65+1.4m)の建物跡である。掘り方は南側梁行が70~100cmの隅丸方形を示し、桁行は直径55~70cmの楕円形を示す。この建物跡は東側桁行の掘り方がS B17・18の掘り方に切られている。掘り方の掘り下げは行なっていないため遺物は検出していない。しかし、柱痕跡(抜き取り跡)より「目」の墨書き土器(須恵器坏底部糸切り)が検出している。西桁行の柱筋方向は磁北より東に2度の傾きをもつ。

S B17 掘立柱建物跡 G56~60-55~60



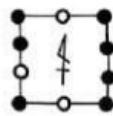
梁行東西3間(南梁行西より1.85+2.5+2.25m)×桁行5間(東桁行南より1.6+1.6+1.65+1.5+1.65m)の建物跡である。掘り方は一辺70~100cmの隅丸方形であるが、西桁行E B156が溝状に掘られており、「目」の墨書き土器、須恵器、土師器片が検出している。掘り方を1基(E B162)掘り下げ、深さは60cmで、柱根は丸柱で直径21cmである。柱筋は東桁行で磁北より東に5度の傾きである。

S B18 掘立柱建物跡 G57~59-54~58



梁行東西2間(南梁行西より2.05+2.05m)×桁行南北3間(西桁行南より1.7+1.9+2m)の四隅の柱根が現存する建物跡で遺構確認面よりつきでた形で検出された。四隅は一辺30~50cmの隅丸方形の掘り方をもち、直径15cmの丸柱である。その他の掘り方は直径20cmの楕円で、柱根は検出されない。S B17と18が重複し、切り合いではS B17のE B158をS B18のE B170が切っている。柱根の柱筋は西桁行で磁北より西に2度の傾きである。

S B19 掘立柱建物跡 G57~59-51~54



梁行東西2間(南梁行西より2.7+2.35m)×桁行南北3間(西桁行南より2.3+2.2+2.1m)の建物跡で、S B18と同様に四隅の柱根は他の柱根より太く遺構確認面よりつきでている。四隅の掘り方は一辺40~45cmの隅丸方形を示し、柱根は15~20cmの丸柱である。その他は25~35cmの

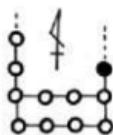
楕円形の掘り方で10~15cmの柱根である。柱根の柱筋は西桁行で磁北より西に2度の傾きをもつものである。

S B 20 掘立柱建物跡 G 47・48-51・52

1間×1間 (1.75~2.4m) S E 2のおおい屋である。掘り方は直径25~40cmの楕円形で、E B 190は柱の抜き取り痕が確認される。しかし、その他の柱痕は検出されない。また、掘り方より遺物は検出されず、この建物跡は

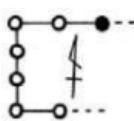
S D 35を60cm程埋めて井戸を造っており、埋土の上での遺構確認となるため溝側のプラン確認は困難であった。S D 35大溝の埋土の第4層下面にて検出した建物である。

S B 21 掘立柱建物跡 G 65~68-74~78



梁行東西3間 (南梁行西より2+2+2m) × 桁行南北4間以上 (西桁行南より2.1+2.1+2.1+2.1m……) の中柱のある掘立柱建物跡で、掘り方は75~135cmの隅丸方形と楕円形からなる。掘り方E B 193・196・201から須恵器・土師器片が出土している。掘り方の深さは70cmでE B 201から太さ25cmの丸柱が検出している。西側桁行掘り方中軸線で、磁北より西に約5度の傾きである。

S B 22 掘立柱建物跡 G 57~59-55~58



梁行東西2間 (北梁行西より2.1+2.1m) × 桁行南北3間 (西桁行南より2.1+1.6+1.95m) の建物跡で、柱根及び柱痕跡は10~15cmの丸柱である。掘り方は直径30~40cmの楕円形をなし、西側桁行の柱痕筋は磁北より1度東に傾きを示す。

表-1 掘立柱建物跡一覧

名称	棟方位	規 模		時期	名称	棟方位	規 模		時期
		大きさ	柱 間				大きさ	柱 間	
SB 1	N-3°-W	3X7間2面廊	2.5m 等間	Ⅳ期	SB 12	N-6°-E	2X3間	1.5+2.5m 1.5+1.5+1.5m	I期
SB 2	N-15°-W	2X3間	等間	Ⅳ期	SB 13	-	1間	1.5m	Ⅲ期?
SB 3	N-3°-W	3X4間	1.5+2.5m 1.5-1.5-1.5m	Ⅳ期	SB 14	N-4°-E	2X3間	1.5+2.5m 2.5+1.5m	Ⅳ期
SB 4	N-15°-W	3X5間	1.5+2.5+2.5m 1.5+1.5+1.5+1.5m	Ⅳ期	SB 15	N	2X3間	2.5+1.5m	Ⅳ期?
SB 5	N-3°-W	3X4間以上	1.5+1.5+1.5m 1.5+1.5+1.5+1.5m	Ⅳ期	SB 16	N-2°-E	3X5間	1.5+2.5+1.5m 1.5+1.5+1.5+1.5m	I期
SB 6	N-3°-E	2X2間以上	2.5+2.5m 2.5+1.5m	Ⅳ期	SB 17	N-5°-E	3X5間	1.5+2.5+1.5m 1.5+1.5+1.5+1.5m	Ⅳ期
SB 7	N-3°-W	1間以上×4間	2m 等間	Ⅳ期	SB 18	N-2°-W	2X3間	1.5+2.5m 1.5+1.5+1.5m	V期
SB 8	N-3°-W	2X4間	1.5+2.5+1.5+1.5m	Ⅳ期	SB 19	N-2°-W	2X3間	2.5+2.5m 1.5+1.5+1.5m	Ⅳ期
SB 9	N-12°-W	2X3間	2.5+2.5m 2.5+2.5+1.5m	Ⅳ期	SB 20	-	1X1間	1.5m-2.5m	Ⅳ期
SB 10	N	1間以上×3間	2.5m- 2.5+2.5+1.5m	Ⅳ期	SB 21	N-5°-W	3X4間以上	1.5+2.5m 2.5+2.5+2.5+1.5m	Ⅳ期
SB 11	N-6°-W	3間	2.5m 等間	Ⅳ期	SB 22	N-1°-E	2X3間	2.5m 2.5+1.5+1.5m	Ⅳ期

2 井戸跡

検出された井戸跡は2基である。しかし、昭和55年度に確認したSK 26が素掘井戸と考えられることから3基の井戸跡を発見したことになる。木組のある井戸跡は2基とも据付け式の方形井側で、板の四隅にコの字形の切り込みを造つて組み合わせているものである。

S E 1 井戸跡 G 51-53

隅丸に近いやや楕円ぎみの掘り方が二重に確認され、一辺1.5~1.8mの大きさで、下部になるに従い少しづつ狭まっている。井側内径は東西0.8m 南北0.9m 深さ（検出面より）1.25mである。井側材の幅15~25cm、長さ1.2~1.25mの板材を校倉に組み、西側6枚の井側材が現存し、上部は腐食が著しい。井側材の厚さで、下部（下から3枚まで）材は4cm、上部の材は1~2cmである。この下部と上部の板材の造りが異なり、上部の板材には4cm四角の孔のある板材が3枚あり、他に利用していたものを転用している。また、井戸掘り方より井戸側材として用いられていたと思われる切り込みのみられる板材が出土したことより、井戸の上部を補修したとみられ、このことは井戸の掘り方が二重になってプランが確認されることからも納得できるものである。最下部に井筒が設置され、直径48cm、深さ14cmの曲げものである。

井側内部に堆積した覆土は10層に分けられ、自然堆積である。F 3・4層より多量の炭が出土し、中に炭化米・炭化小豆等が検出している。この井戸跡より900点の土器片が出土し、その内の590点が井側内の覆土からの出土である。井側内部はF 1~10層（最下層）まで遺物が検出されるが、掘り方より出土するのはF 1~4層までで、F 5層から下層は遺物が出土していない。この井戸内から出土した土器片の中に「平」の墨書のある杯が3点出土している。

S E 2 井戸跡 G 47-51

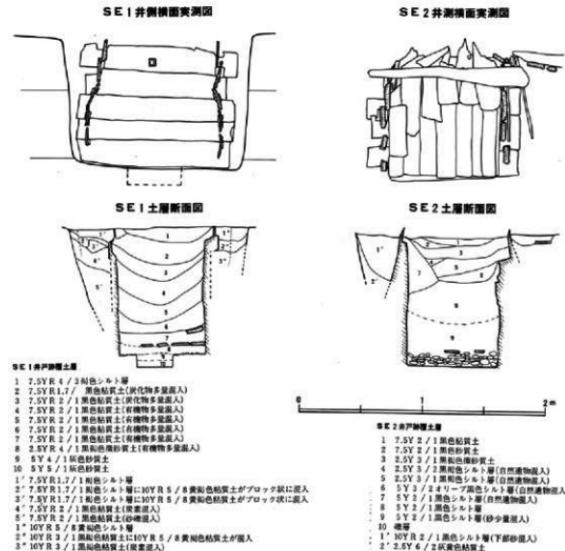
大溝のSD 35 F 1層下面にて縦板の一部及びプランの確認ができた。井側内径東西1m 南北0.8m 深さ1mの井戸跡で、掘り方は直径1.5~1.75mの隅丸方形を示し、掘り下げのプラン確認はSD 35埋土のF 4層下である。覆土は10層に分けられ、SD 35大溝の上端直下のため短期間に埋没したものと考える。井側に用いられた板材は、西側5枚が現存し、厚さ4cm幅20~25cm長さ約130cmの杉材である。井側を囲むように三重の縦板が矢板状に廻らされ、上部に横棟が三方に廻り、東南の溝側を使用口とした足場板がしっかりとした形で検出された。井戸底には、6~15cmの平たい丸い河原石が組み込まれている。井筒はない。

井戸内部より縄、木皿、こもづつろが出土し、土器類では須恵器片を主体として360点の土器片が破片状で出土している。その中に墨痕の確認できるものが25点あり、文字と判

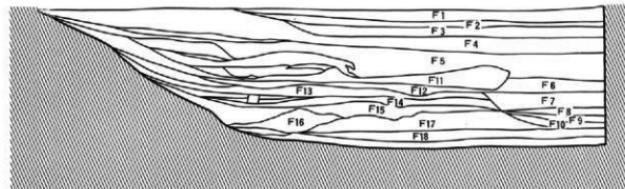
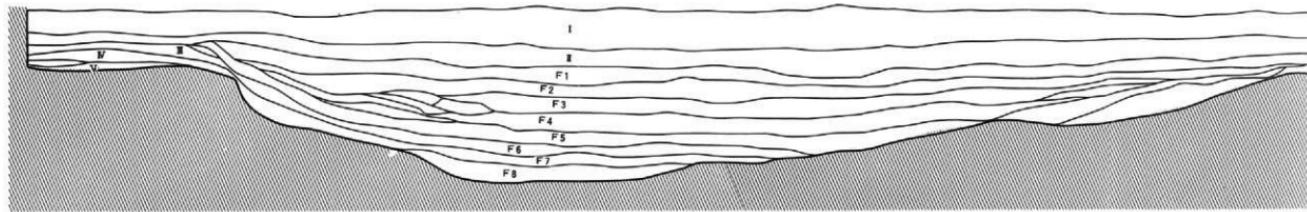
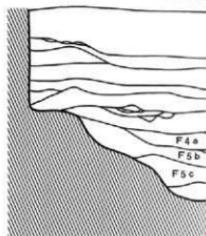
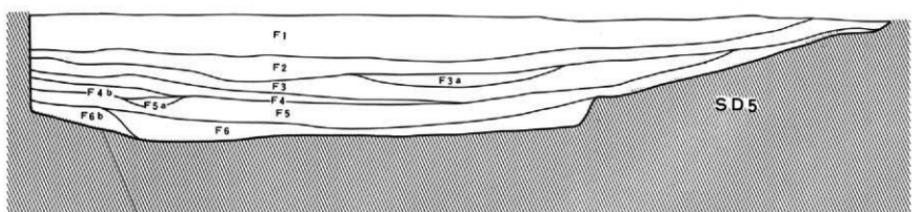
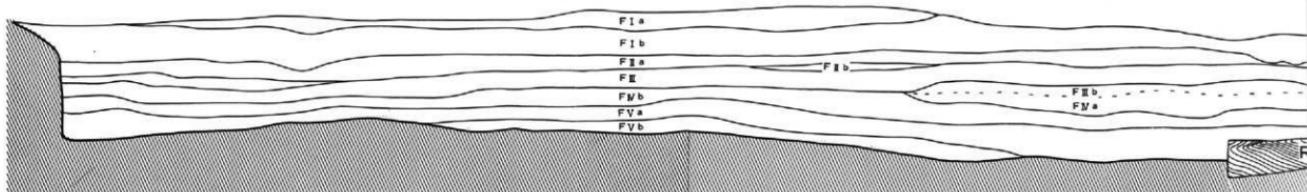
読できるものは「平」「目」「至」「太」の文字が解読できる。井戸掘り方より須恵器環(RP 390)が1点出土し、井戸作成年代をわきあえることができる。

SE 3 井戸跡 G 20~21-55~56

第2年次の調査にて確認されたもので、概報にてはSK 26として報告している。井側等は検出されないことから素掘井戸である。掘り方は横円形をなし、長径で1.7m、深さ1.2mである。透構確認面より0.8mすりばち状に掘り下げ、さらに直角に掘り下げ、底部は平らに造られている。覆土は自然堆積で7層からなる。底部面より磨滅の著しい須恵器、土師器の小破片が578点出土している。

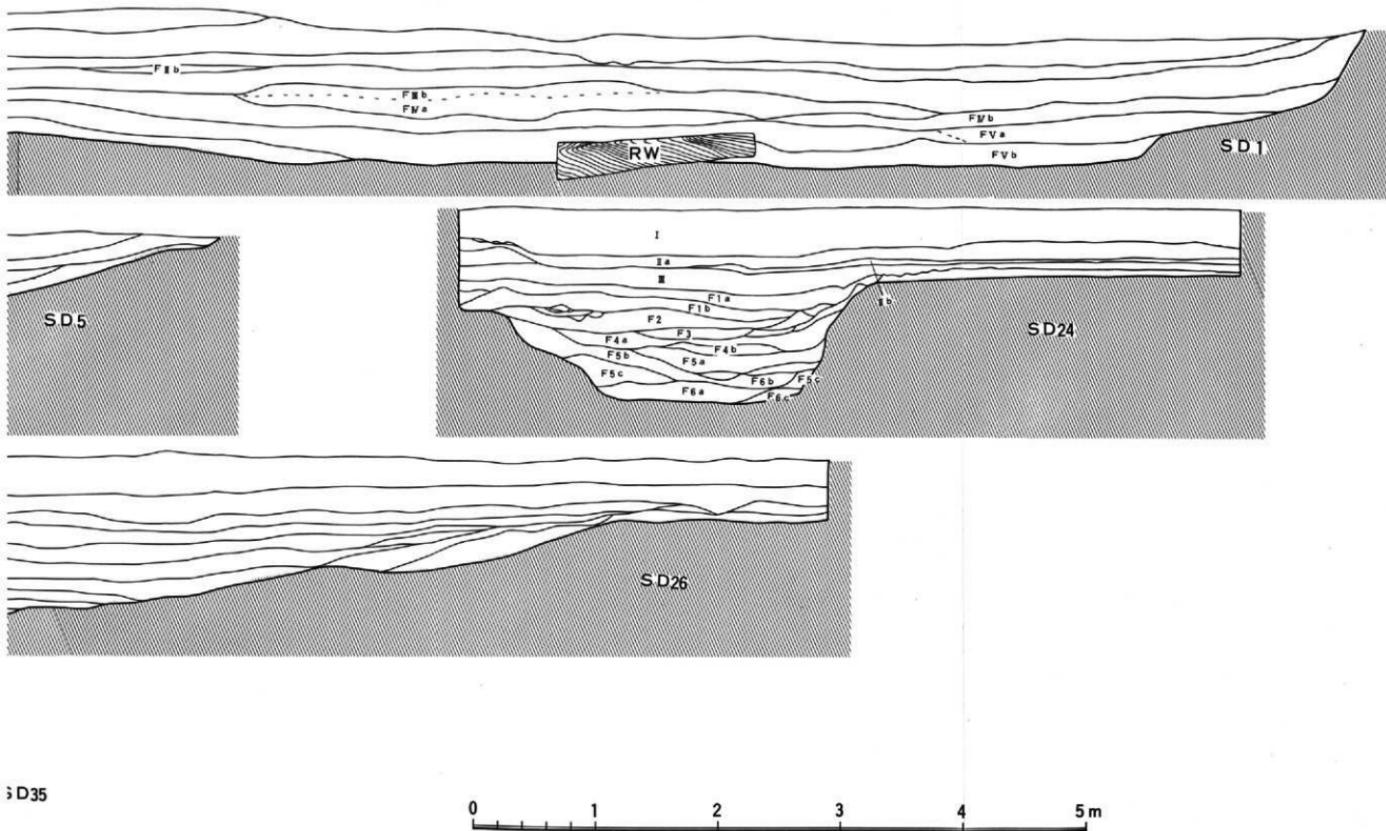


第5図 井戸実測図



SD35

0



第6図 SD1, 5, 24, 26, 35, 溝跡セクション

3 溝跡

これまでの調査において、40条あまりの溝跡が各調査地より検出できた。この中で確認地点や覆土状況、出土遺物により同一のものと考えられるものがある。中でも下記の三条の溝は本遺跡の重要な遺構である。

S D 1・S D 5・S D 26・S D 35 大型溝状遺構

調査年次ごとに各調査地で確認された大溝で、流路は、遺構の中心部と考えられる建物群の西南より南側を通り、東にて隅丸方形状に約90度に屈曲し、ボーリング探査及び試掘において北西方向に150mまで確認できるが、G 70—150付近でのボーリング探査では溝方向はつかめなくなる。この大溝の幅は約6~12m、深さ1~1.4mを測る。大溝の断面は「U」字状に掘り込まれ、覆土層は調査場所により若干異なるが、基本となる層位は6~8層となり自然堆積である。調査地においては、大溝の岸が人工的に埋め込まれ補修しているところもある。また、S D 26とS D 5の約100m間では標高差に約20cmの違いがあることや遺物の出土状況、自然の地形（西側に丘陵があり薬師沢という沢で年中水が流れている）より南西から遺跡の中心と考えている建物跡へ東側を通り北西に水が流れていたものであると私考している。この溝のプランを確認し、幅広く掘り下げを行なったS D 35では、覆土を19層に分けることができた。ここでは溝中央部に長さ5m、太さ30cmの丸太材が2本の杭におさえられて丸太材の内側に土盛をなし、土どめ作業と見られる。この土どめ作業の内側と外側（溝側）では出土遺物に変化がある。S D 1においても同様の傾向が見られ、この大溝より多量の遺物が出土し、層位により遺物の違いを見い出すことができる。また、木簡もこの大溝の出土である。

S D 22・23・24・29・38 溝状遺構

検出された主要掘立柱建物群の西側を南から北に流れる溝跡である。大型溝S D 1、5等より遺構南側で分水されたものと考えられ、G 65—46付近では溝幅0.6~1m、深さ10cmであるが、G 79~71付近では池になり、最大幅11m、深さ1.2mとなる。この溝を横断する2列の杭が確認されたことにより水が溜められていたと考えられる。水流の量は少なくないものであったことが覆土の状況から理解され、出土遺物は斎串、絵馬、曲げもの、墨書き土器20点で、出土遺物より、溝の利用期間は短く、覆土層は7層に分けることができる。

S D 6 溝跡

G 19~28—59~62で確認されたもので、溝幅7m、深さ70cmのゆるいU字状の大溝のコーナー部を検出したもので、覆土は4層に分けられる。この大溝はボーリング探査により約78mの方形に廻る溝である。

IV 検出された遺物

昭和54年から57年までの発掘調査により多量の遺物が大溝を主体として発見された。中でも大溝から出土した土器群は奈良時代末から平安時代における置賜地方の土器編年の基準となる重要な資料であり、この大溝SD35, SD5, SD26, SD1の遺物を中心に報告したい。この大溝からは、「寛平八年」の年号のある木簡がFⅣ層より出土し、この溝の覆土は自然堆積であることと、各層（覆土層堆積幅約20cm）ごとに遺物の器形に若干の異なりがみられる。また、この土器に書かれた墨書文字にも各層ごとに違いのあることが確認されている。この同一溝の各層から出土した遺物を各トレンチごとに報告し、木製遺物と墨書土器とに区分し、まとめてみた。（SD1出土の土器・木製品は川西町文化財報告書第2集に掲載し報告しているためここでは割愛するものもある）

1 土器

（1）主な出土地区

a) SD5出土土器 (第7~9図・第8~10図版)

大溝の中央部より東上端まで確認された長さ約25m、幅約5~7mの大溝を流路に沿って縦に割るような形で溝跡のプランを検出することができた。この大溝のコーナー部の一部を2×5mのトレンチを組み掘り下げを行なった。SD5は6層に分けられ、F3~6層より遺物が確認され、特にF3層は他の下層と違いしっかりと分けることができた。F4~6層の土器は若干前後するものもある。これは水の流れにより溝底部の凹凸があったものと思われる。しかし、遺物の取り上げは、溝の横断面の土層セクションがほぼ水平な線を描くため、平均に10cmずつ掘り下げて検出したものを記録し、取り上げた順に層位をつけている。

この2×5m、深さ1.1mの掘り下げから、土師器内黒環5個体、同甕10個体、須恵器環43個体、同甕8個体、同蓋1個体、同瓶1個体、赤焼き土器环3個体が出土している。これらの土器は流路部と考えられる溝底に堆積した厚さ約25cmの灰色砂層から90%が出土し、その砂層を覆う黒色粘質土からは10%弱の出土である。人工的な埋め方は認められず、また溝東側（外側）のため確認されない。环に書かれた文字として「目」「林」「茂茂」「家」「二万」がある。

b) SD26出土土器 (第21図・第16図版)

G70~30~24で確認された溝幅は推定5m、深さ1mを測る。SD35に向い北東に流路をとる溝で、覆土は8層に分けられ自然堆積層となる。F5より自然遺物が多量に出土し、

F 6層下からF 8層にかけて土器類が検出される。掘り下げを行なった調査区は地権者との話し合いの関係で、幅1m×長さ8mのトレンチである。

この掘り下げた溝跡から出土した遺物は須恵器環8個体、同甕4個体、内黒土師器6個体、赤焼き土器2個体である。墨書文字では「目」「□万」がある。

c) SD 35出土土器 (第12~20図・第11~16図版)

G 47~52~44~53で確認された溝跡で、SD 1 (木筒出土溝) の約22m上流となる。溝幅は約10m、深さ1.2mの溝跡で、約8m×4mの掘り下げを行なった。覆土は19層に分けられ、溝中央部には長さ5m、太さ30cmのあまり手を加えられていない丸太材が流路に沿い、2本の杭に固定されていることが確認できた。また、溝跡土層断面より、人為的に埋められていることが確認できる。この土留め作業の行なわれた層の上下において遺物の形の変化がみられ、検出された土器類は環片を主体として約4800個体にもなる。主なものとして、二面鏡、横瓶、壺、甕などがある。墨書土器は総数208点確認できる。

d) SD 22・23・24・29・38出土土器 (第10・11図・第10・11図版)

G 79~85~71~75の池状になるところでの遺物の出土が多い。遺物は須恵器環が主体をなし、赤焼き土器は検出されない。内黒土師器環は10個体の検出で、実測できるものは3個体であるのに対し、須恵器環は99個体の検出であり、ロクロ切り離し痕がヘラ切りを行なっているものが75個体となる。この内、陵のあるものが3個体となる。また、切り離しが糸切りとなるものは12個体であるが、F 1~F 3と溝上部からの検出で、この溝においては他に検出される溝跡の遺物の出土状況と若干異なる。

e) SD 6出土土器

溝跡の覆土断面を実測するため、1m×6mを掘り下げたもので、覆土層は4層に分かれる。F 1・2層は人為的に埋め込まれた土で、須恵器、土師器の小片が磨滅した形で50点検出している。F 4層上面より片口土器の破片が検出され、また、溝上端近く地山直上より唐津焼の小皿が出土し、高台は片薄高台で使用痕が著しい。

f) SE 出土土器 (第20図・第16図版)

SE 1井戸跡より900点の土器片が出土している。しかし、小破片のみである。この小片の内590点が井戸内の出土で、1個体として実測を行なえるものは皆無に等しい。これら小片の大部分は赤焼き土器環片で、内黒土師器環片が若干検出できる。井戸掘り方の埋土上層から300点の赤焼き土器環小片を主体として出土し、下層より検出されない。「平」「空」の墨書きの内黒土師器環片が出土している。

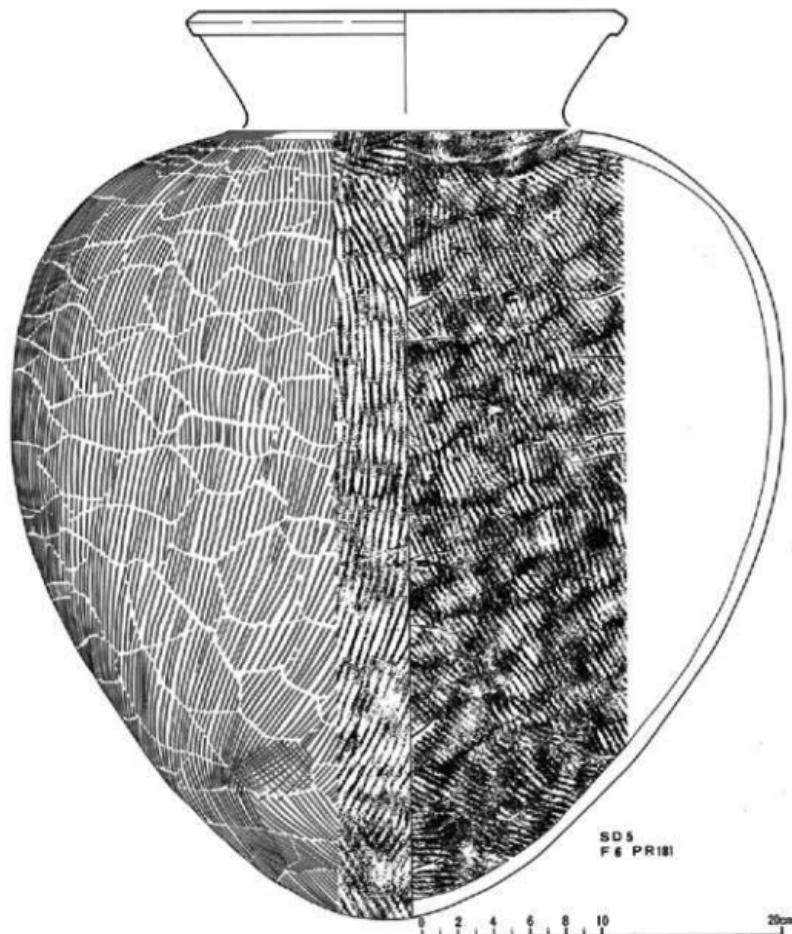
SE 2井戸跡より須恵器片を主体として360点の土器片が出土し、すべて破片状である。墨痕のある土器片は25点あり、判読できるものは「平」「目」「太」である。また、井戸

掘り方埋め土より、井戸作成年代が考慮される須恵器壺（R P 309）が検出している。

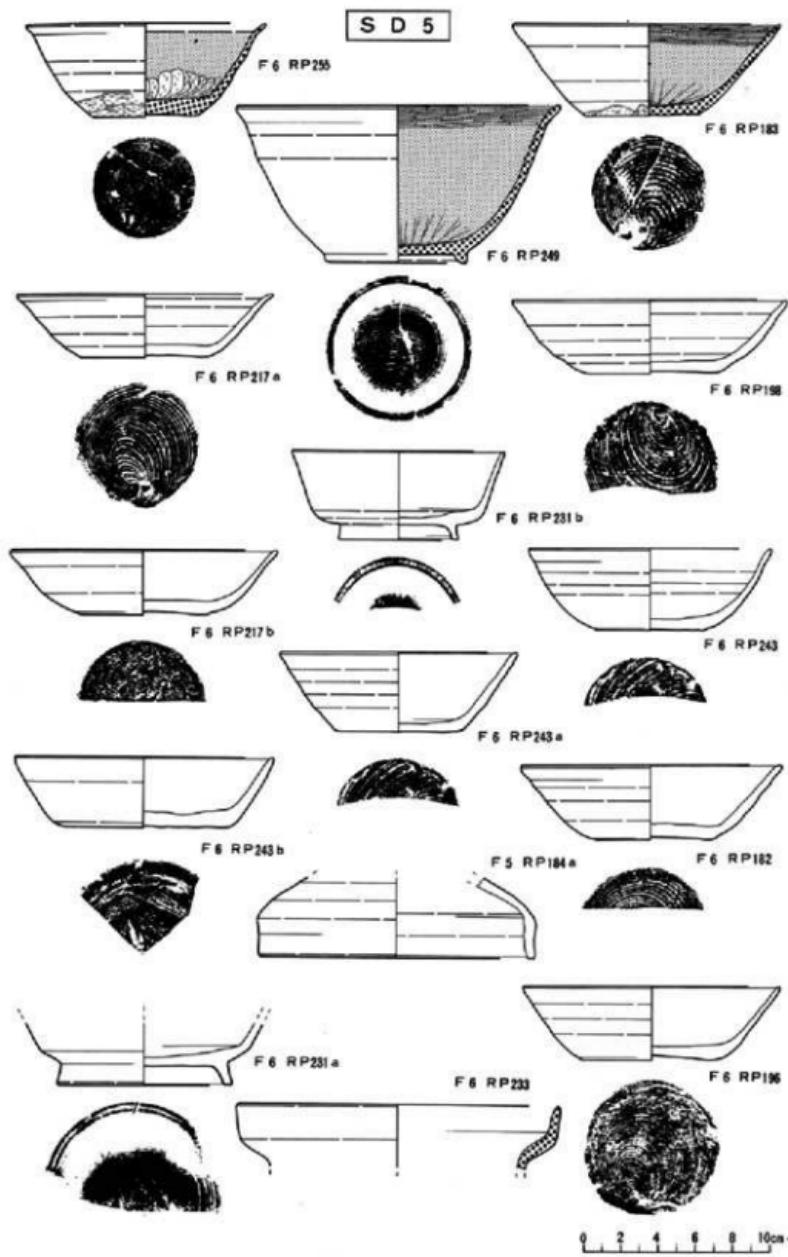
g) S B 堀立柱建物跡出土土器

S B 1 の E B 2 の掘り方より土師器裏小片が出土している。また、S B 16・E B 142の柱痕跡より須恵器壺（クロ切り離し痕が糸切り）が出土し、S B 17-E B 156の掘り方、S B 21のE B 196・201より須恵器・土師器片が出土している。E B 142・156の壺には「目」の墨書文書がある。

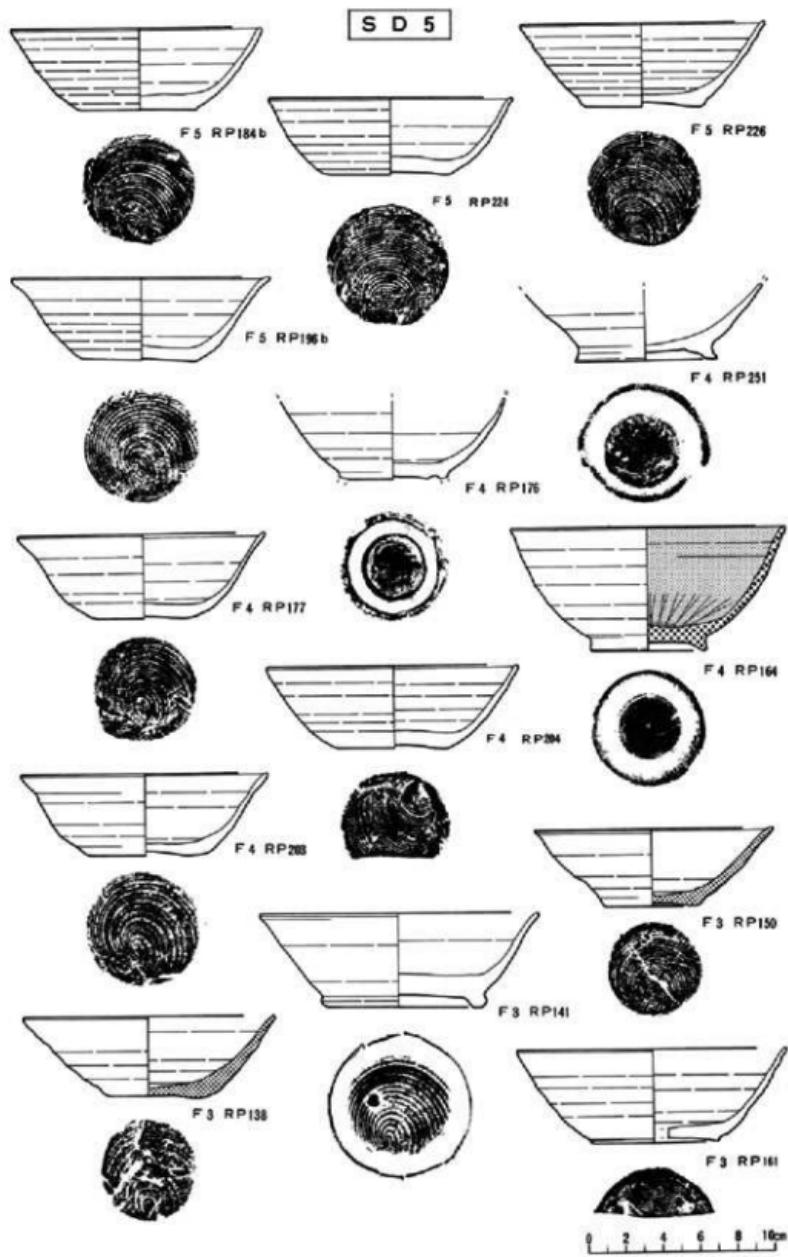
S D 5



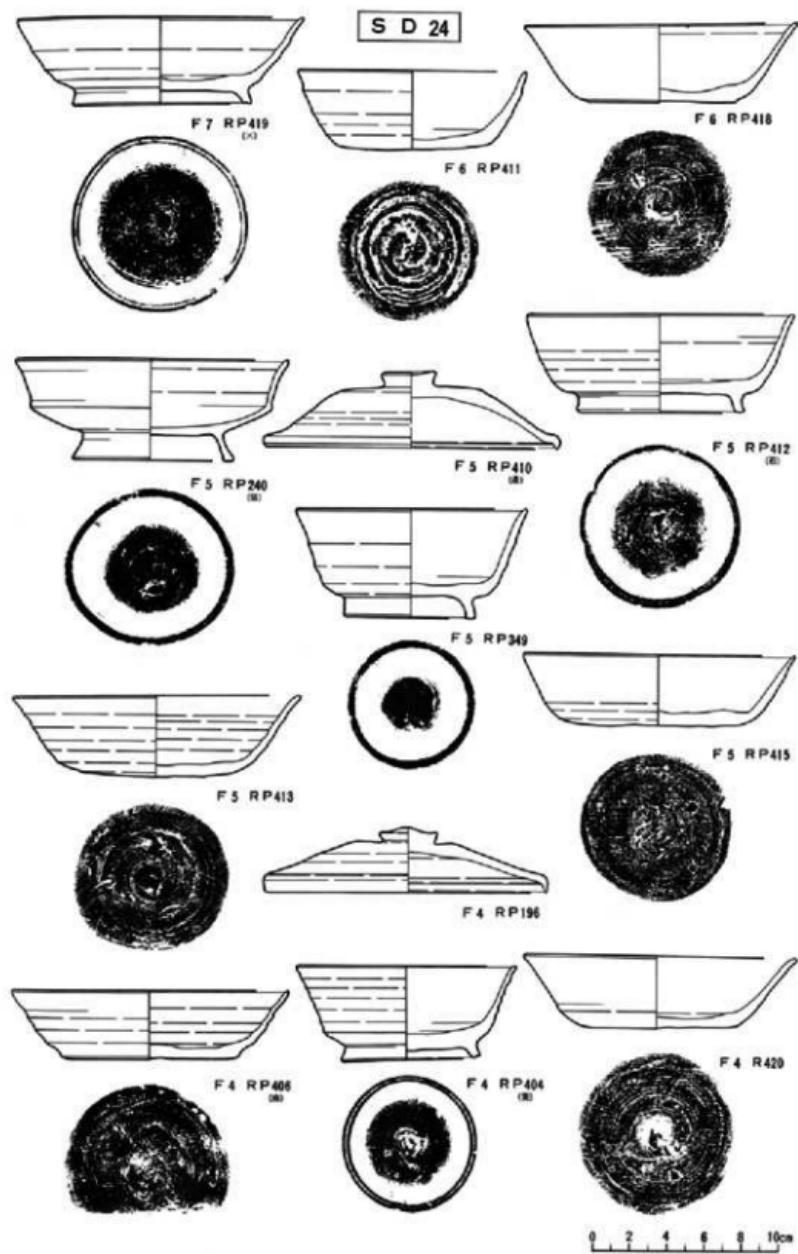
第7図 土器実測拓影図



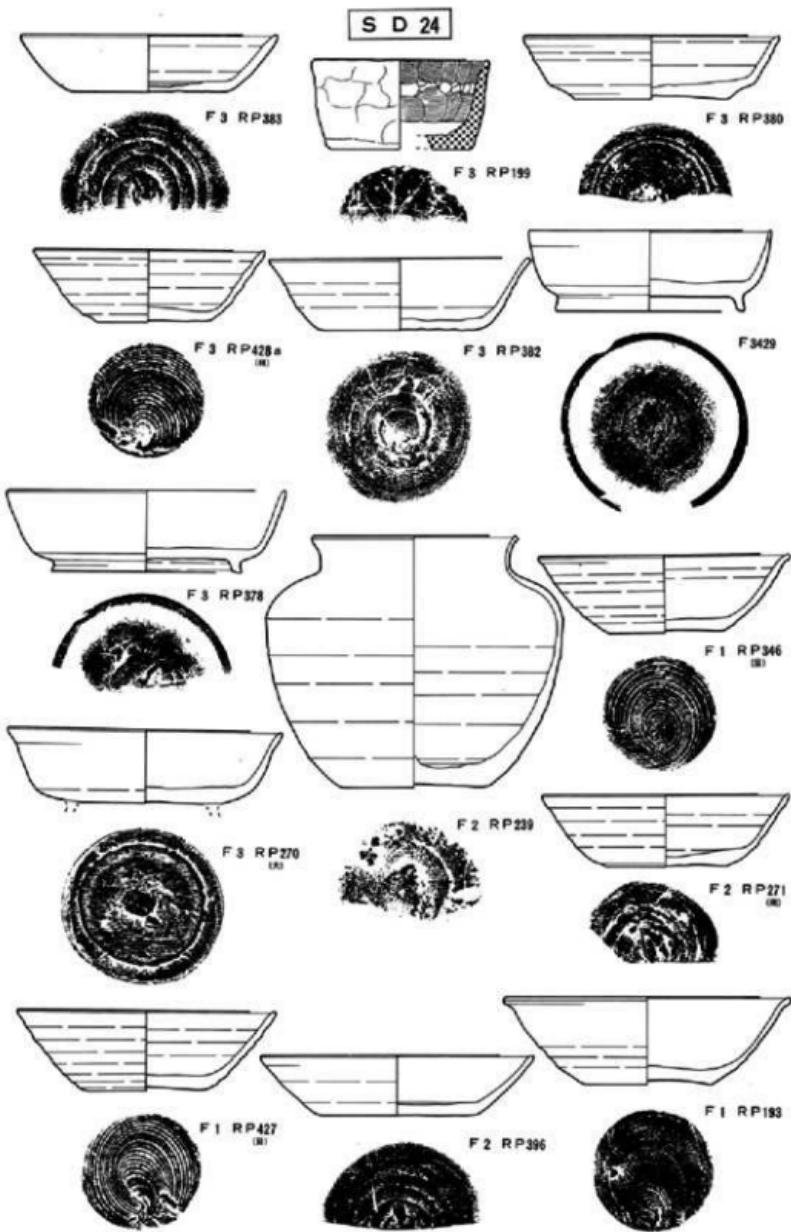
第8図 土器実測拓影図



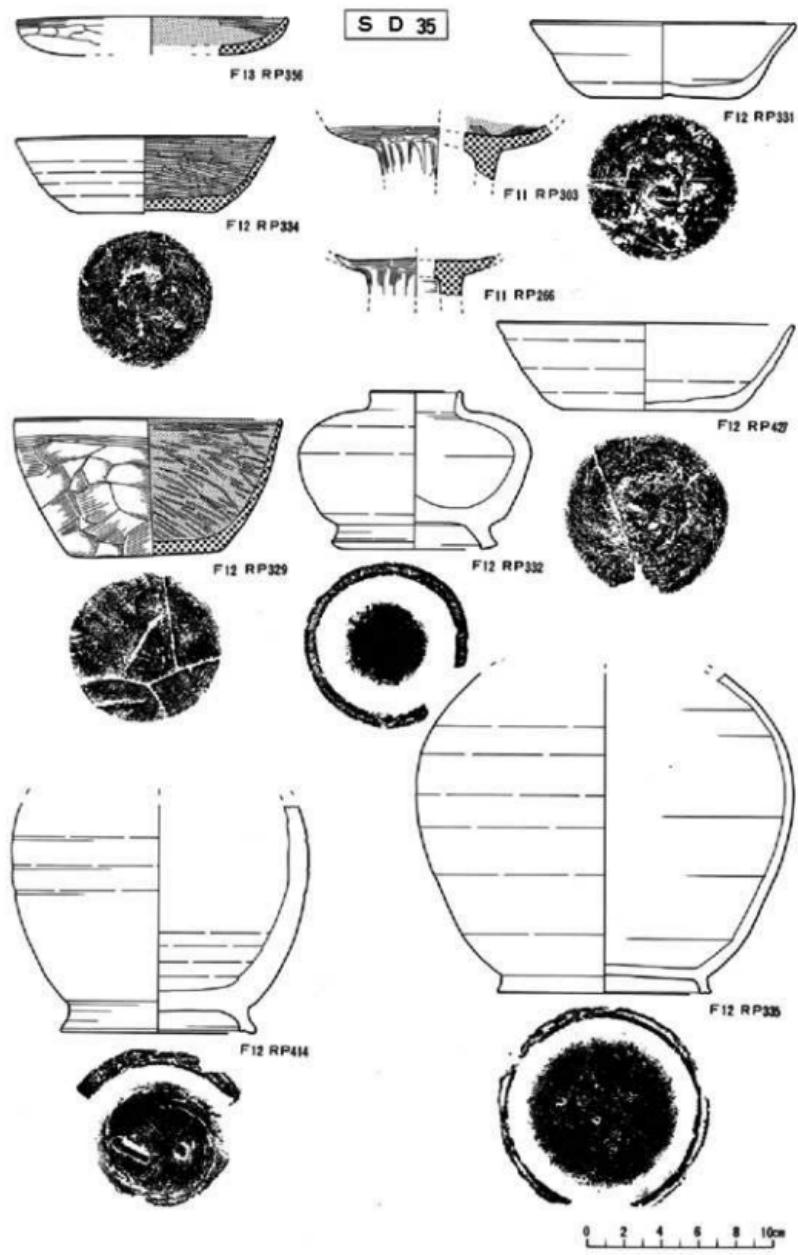
第9図 土器実測拓影図



第10図 土器実測拓影図

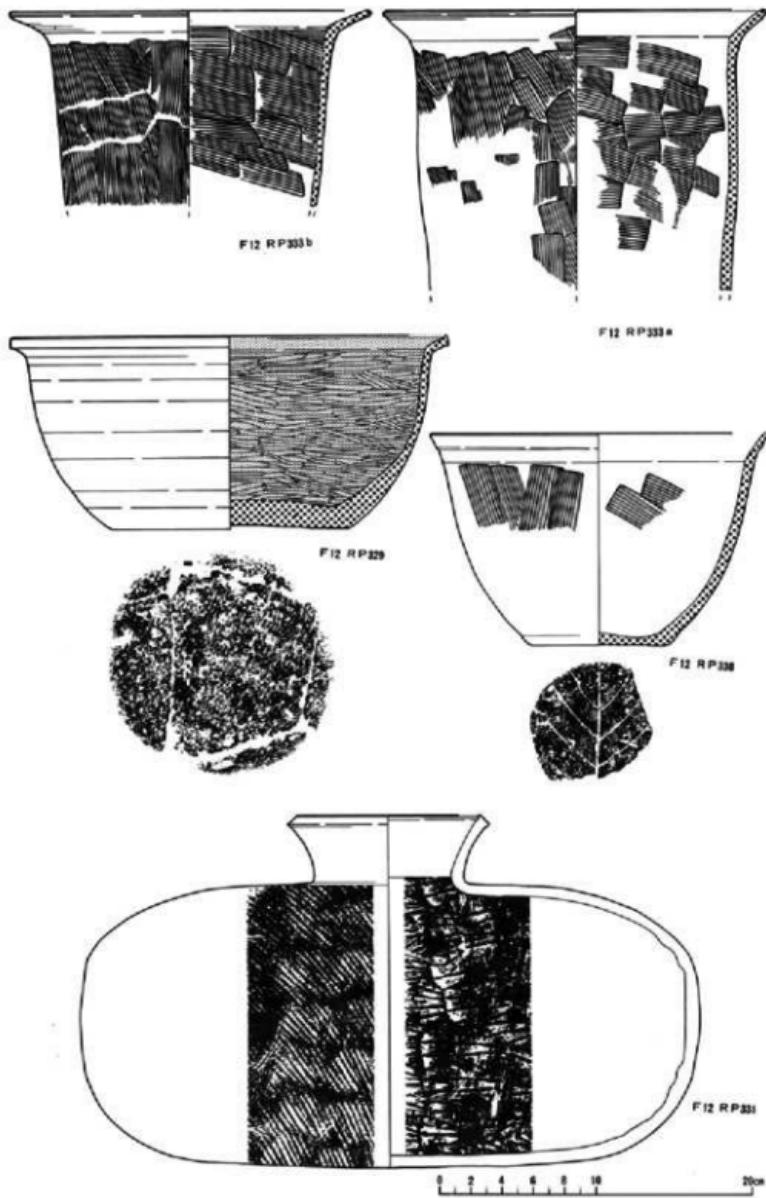


第11図 土器実測拓影図

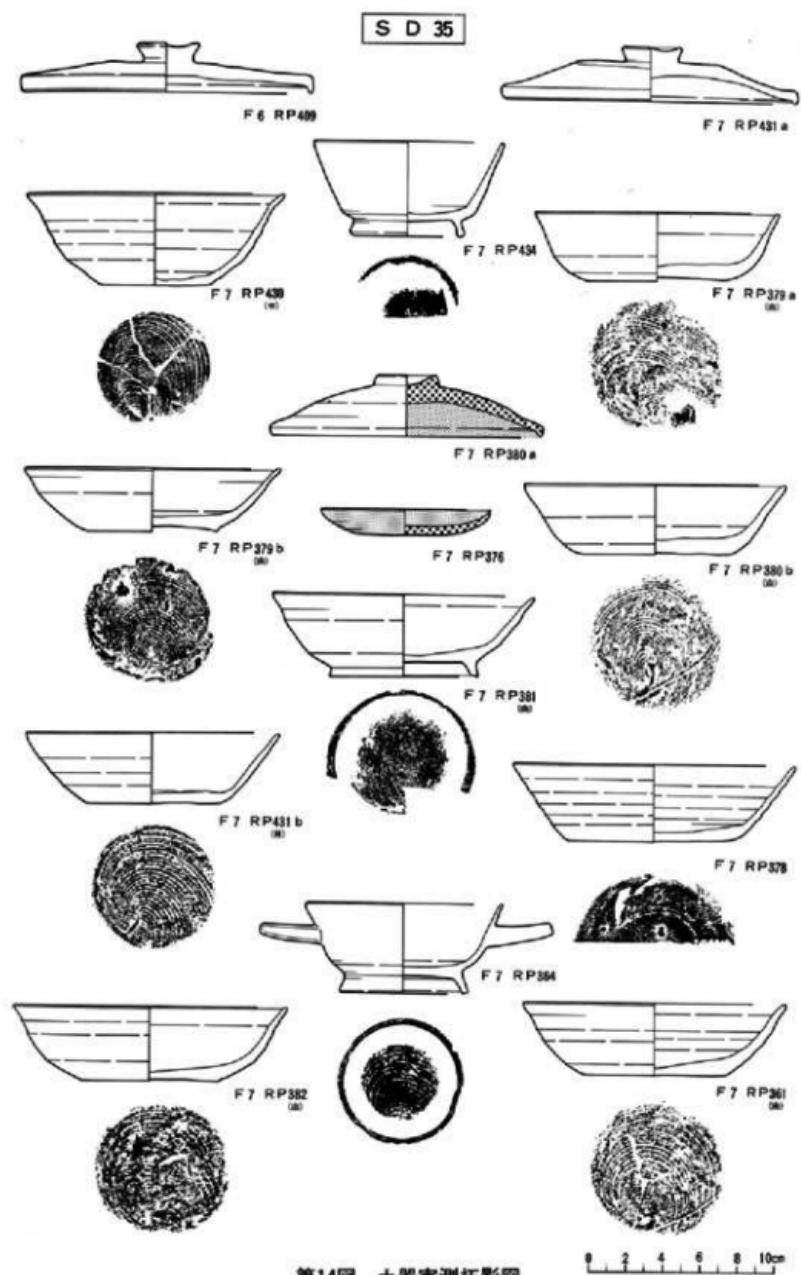


第12図 土器実測拓影図

S D 35

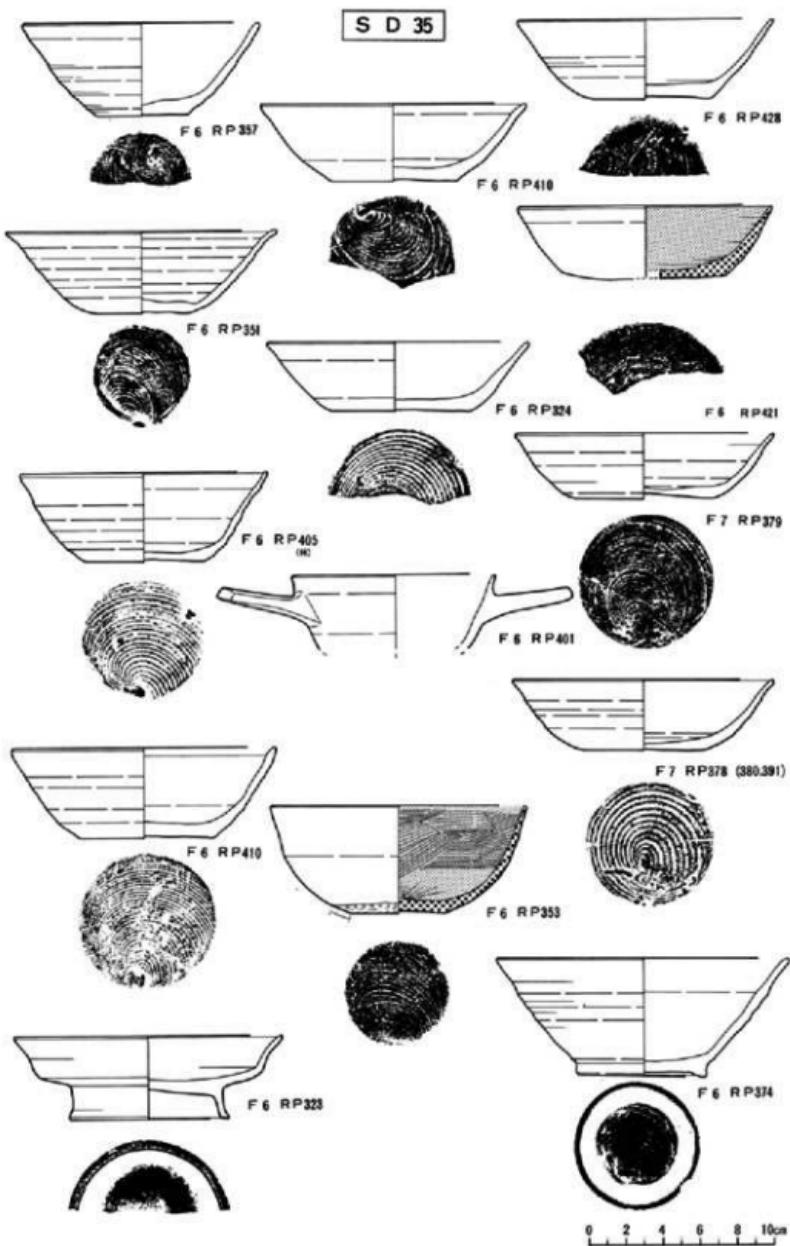


第13図 土器実測拓影図

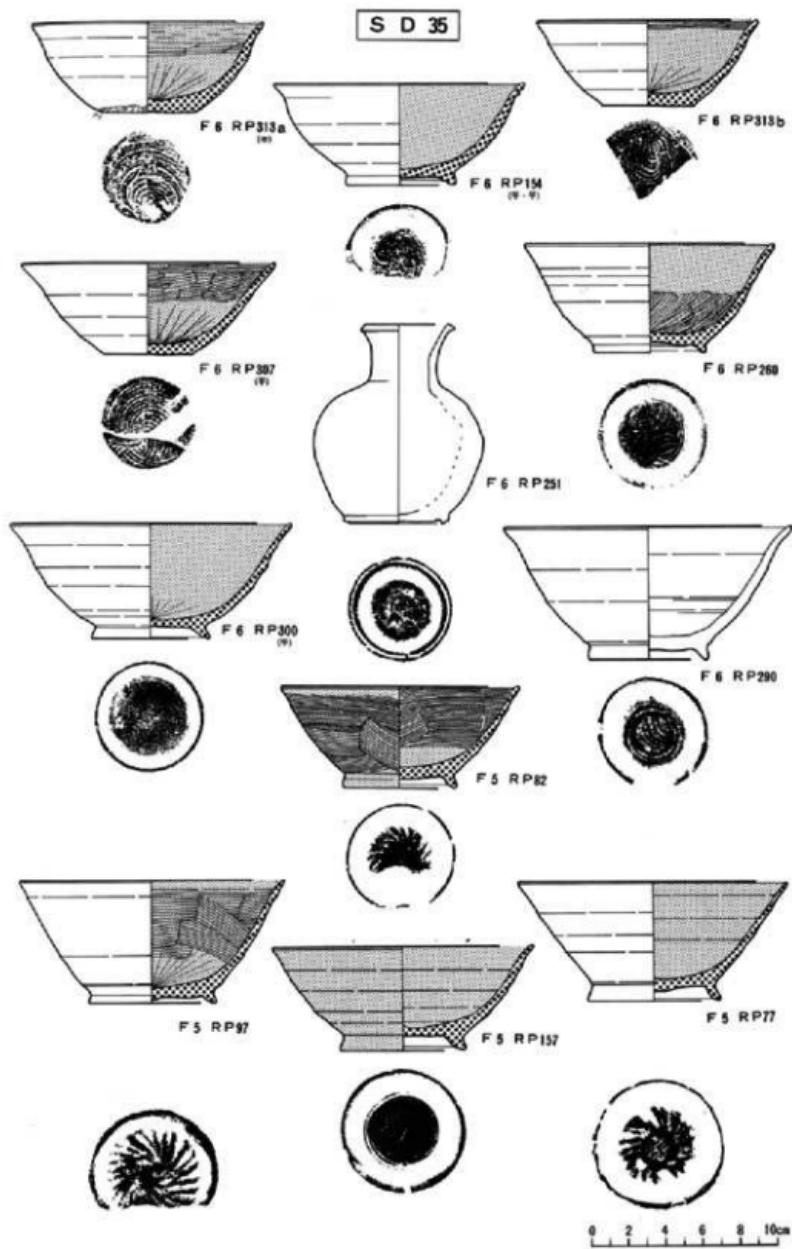


第14図 土器実測拓影図

1 2 4 6 8 10cm

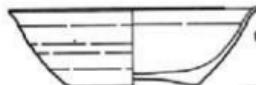


第15図 土器実測拓影



第16図 土器実測拓影図

S D 35



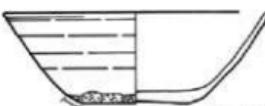
F 6 RP368
(B-1)



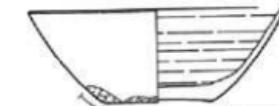
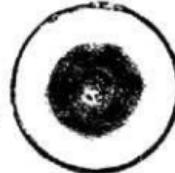
F 6 RP428



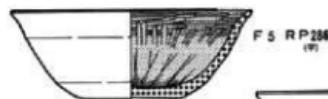
F 6 RP467
(A)



F 6 RP378
(B)



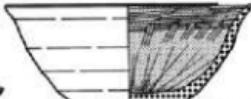
F 6 RP378
(B)



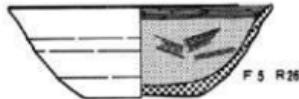
F 5 RP286
(B)



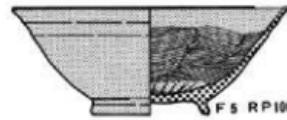
F 5 RP285 a
(B)



F 5 RP285
(B)



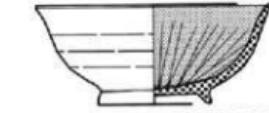
F 5 R261



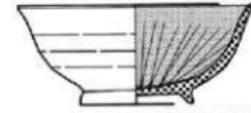
F 5 RP272
(B)



F 5 RP272

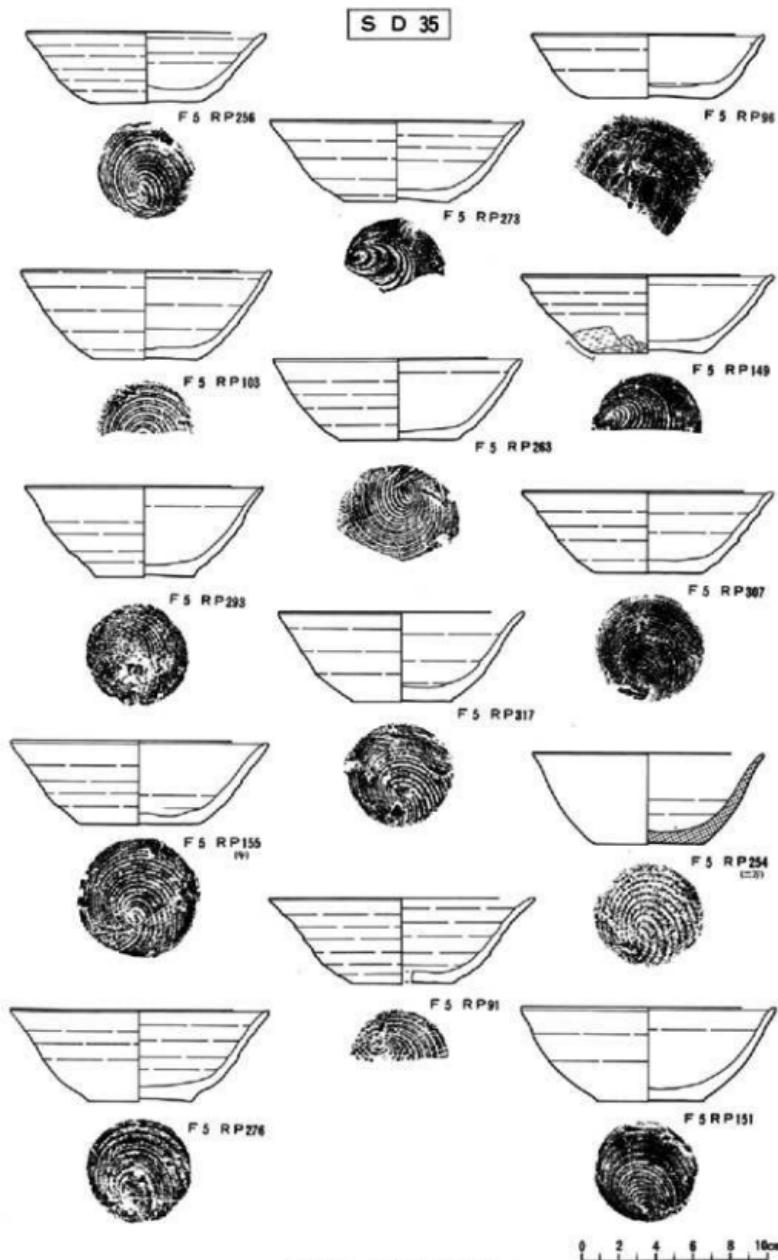


F 5 RP259
(B)

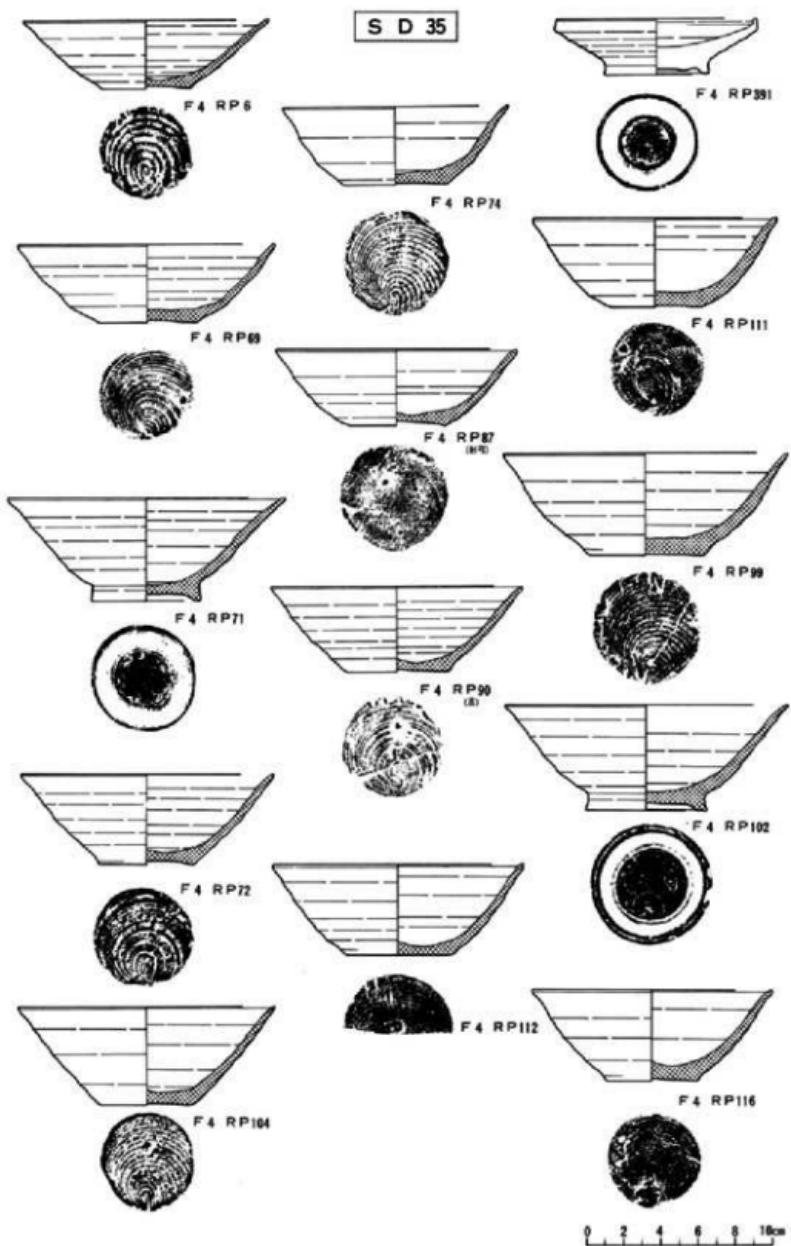


0 2 4 6 8 10cm

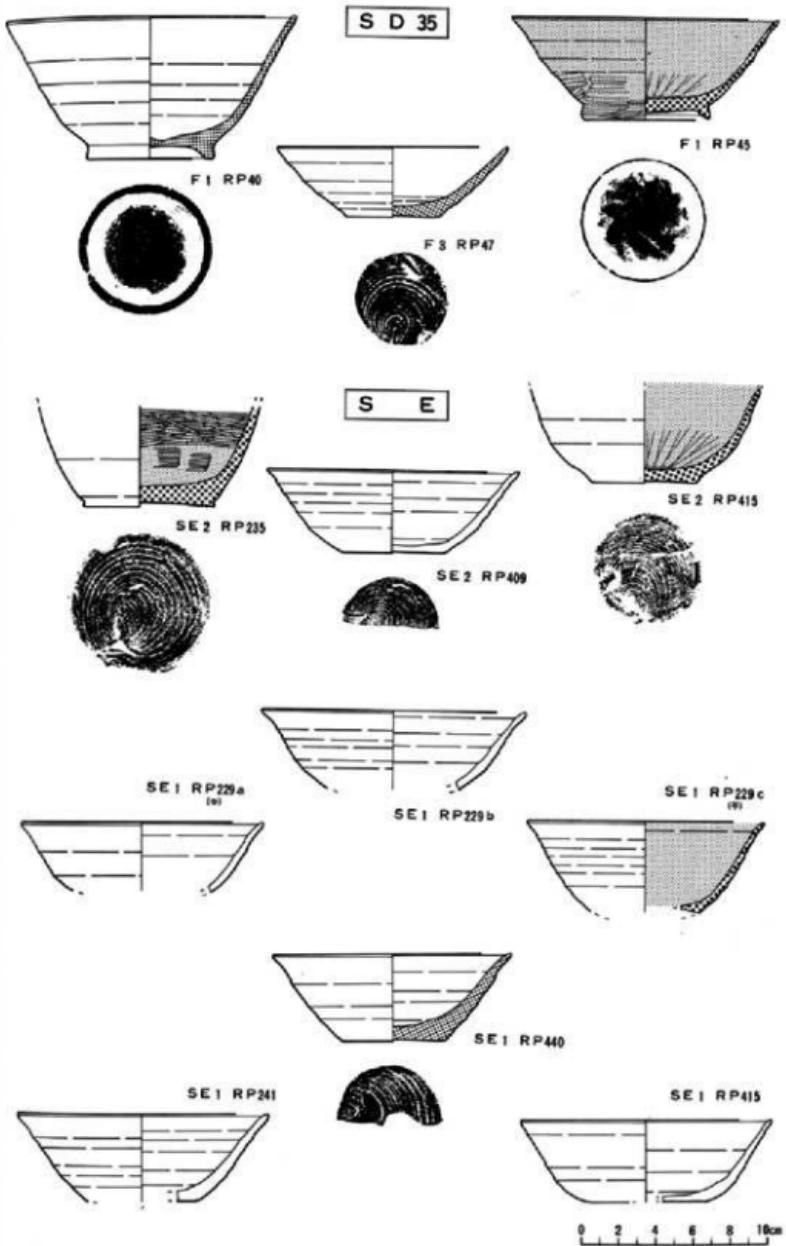
第17図 土器実測拓影図



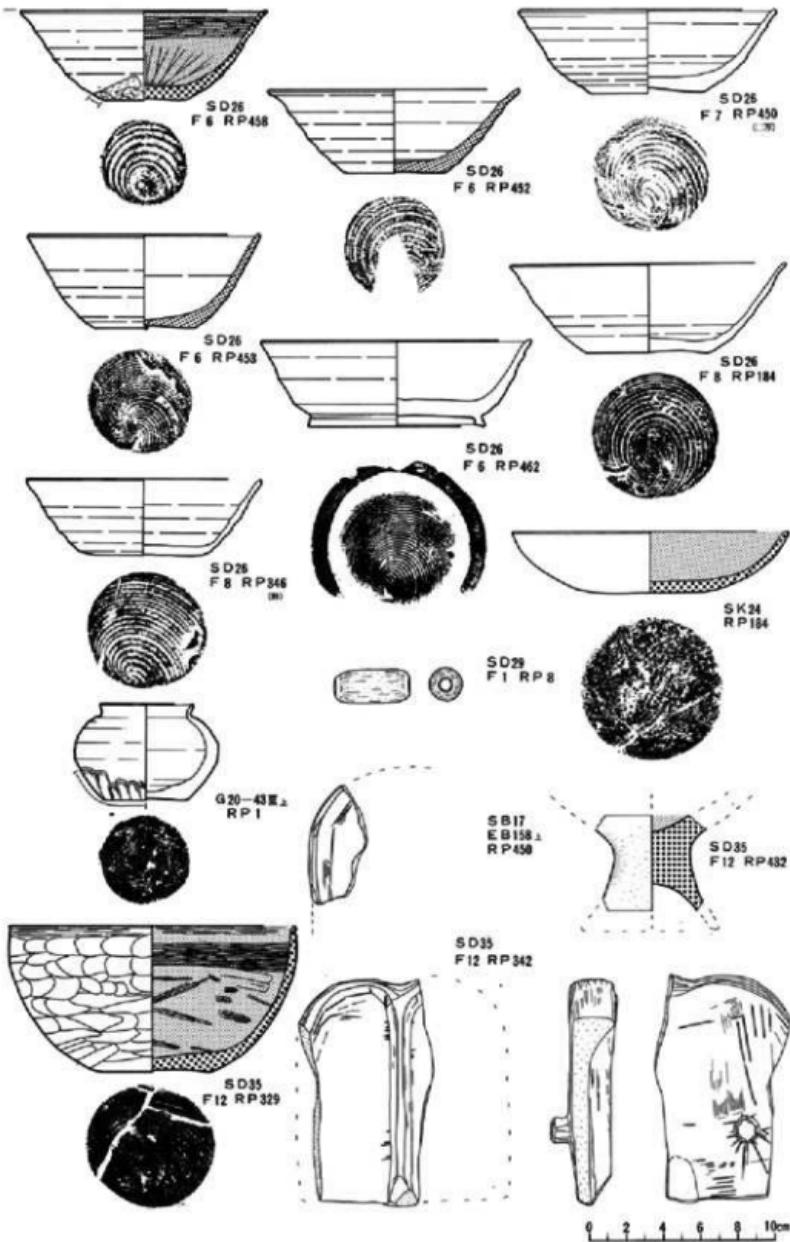
第18図 土器実測拓影図



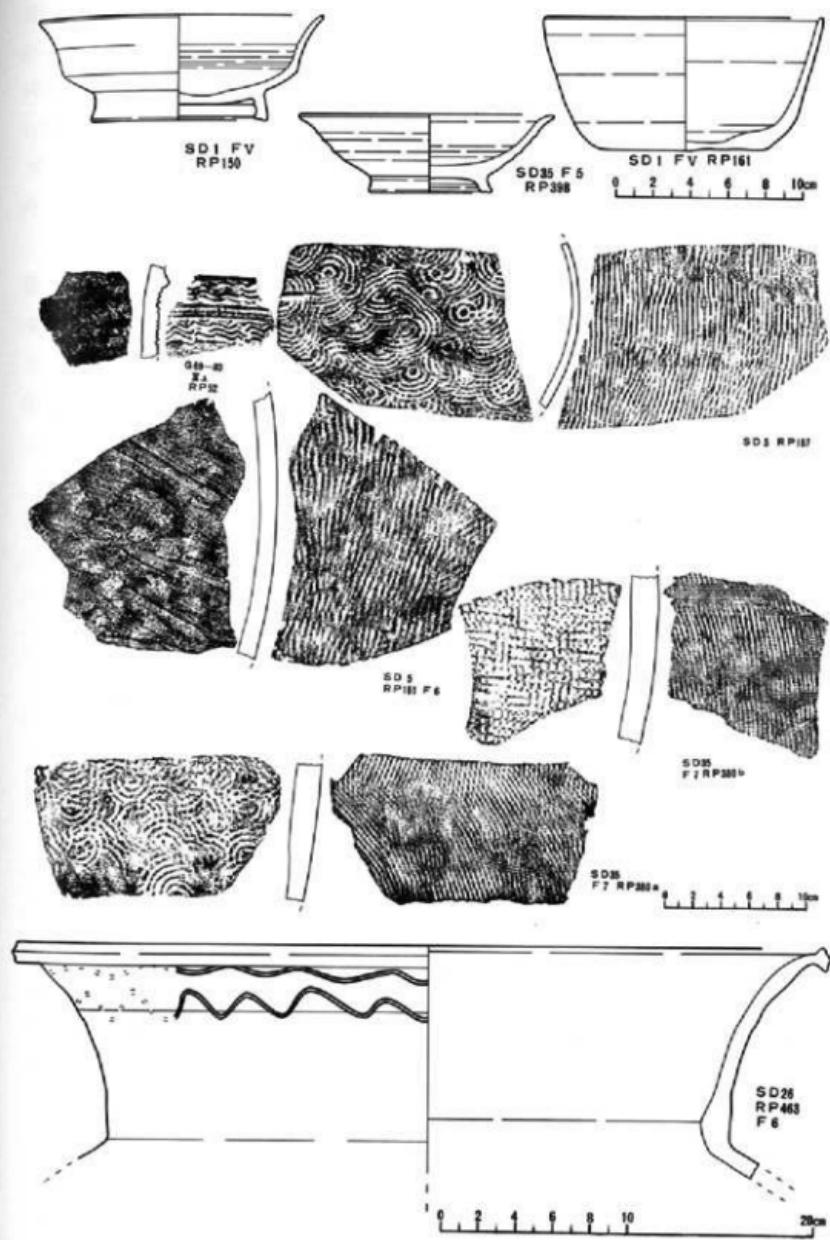
第19図 土器実測拓影図



第20図 土器実測拓影図



第21図 土器実測拓影図



第22図 土器実測拓影図

(2) 出土土器様相

a. 土器分類基準

古代土器の編年は各地の発掘調査の増加に伴い、各地域ごとの土器文化が少しづつ明らかになり、地域単位の編年が発表されている。本遺跡からも多量の土器が壺類を主体として出土している。そこでこの土器を、須恵器、土師器、赤焼き土器とに区分することにする。

壺類は還元焰焼成のものを須恵器、酸化焰焼成のものを土師器・赤焼き土器と区別し、土師器は内黒処理を行なっているものとする。また、酸化焰焼成で内面調整を施さず、須恵器の成形、調整技法を用いているものを赤焼き土器として区別した。甕類も酸化焰焼成のものを土師器と赤焼き土器とに区分できるわけである。しかし、出土する遺物が破片状であることと、出土量が少ないため容易に区別することはできないが、焼成、色調、胎土やロクロ使用痕の有無等で土器区分を行なった。

b. 土器の形態分類

出土する土器類の形態により、壺・蓋・皿に分類し、壺はロクロ使用と、ロクロを用いないものに分けられ、底部より体部が直線的なたち上がりをもつものが多いロクロ切り離し痕がヘラ切りと、体部が少し内湾する、糸切りとに分ける。また、高台がつくもの、陵のあるものに類別できる。ロクロを利用した土器底部外面は、ロクロ台からの切り離しが回転ヘラ切りと回転糸切りが主体となり、実測図下に底部外面の拓影図を付け、ロクロ切り離しを行なった後、再調整するものは側に実線を平行させた。再調整する壺は、手持ヘラケズリである。壺・甕・硯・皿類は出土数が少なく、個々に報告した。

土師器

壺A類 ロクロ未使用的土師器壺で、いずれも大溝下層より5点の検出である。底部は平底に作られ、陵はみられない。器形は、体部が直線的にたち上がり、口縁部近くで内湾し、口縁部に沈線があるものもある。内面に黒色処理が施され、内面はミガキを行ない体部外面はヘラケズリを行なっている。

壺B類 ロクロ使用の土師器壺で大溝下層から検出した。底部は平底で広くロクロ切り離し後再調整され、手持ヘラケズリである。内面は黒色処理が施され、横のヘラミガキで体部外面はロクロナデである。

壺C類 (1) ロクロ使用の土師器壺で、ロクロ切り離しは回転糸切りを示す。底部外面

外側を手持ヘラケズリを行なったものとロクロから切り離したままのものがある。内面は黒色処理を施し、ヘラミガキ、体部外面はロクロナデである。

环C類(2) C類(1)の环に高台を付けたもので、高台の付け方にロクロ切り離しを行なったのち、他の共土を底部につけたものと、环底部外面の土を环底部外側の周囲にヘラで胎土をよせて高台を作っているものもある。

环C類(3) 环C類(2)の环に内面だけでなく、内外面に黒色処理を施している。

蓋 ロクロを使用し、肉厚の作りで天井部はナデ、蓋内面は黒色処理が施され、ヘラミガキが行なわれている。つまみ中央部が凹み「由」の墨書銘がある。

皿 内外面とも黒色処理が施された口径9cm、底径5.5cm、高さ1.3cmの小皿で内外面ともミガキとナデで、底部切り離しは再調整のため判然としない。

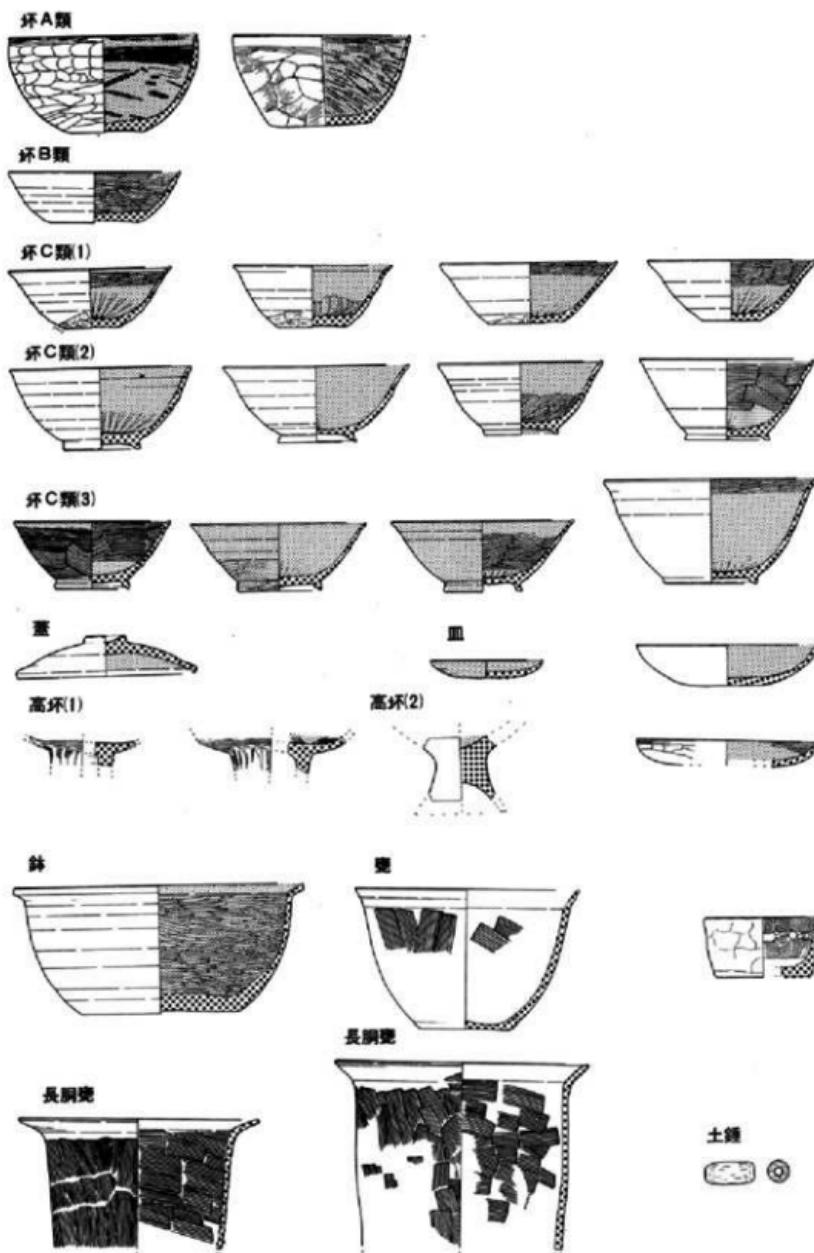
高环 大溝最下層より3点検出した。(1) 环部はゆるやかに内湾するものであるが、口縁部が検出されず不明である。内面は黒色処理が施され、ヘラミガキである。脚台部と环部の接合部で直立し下部に向かっている。(2) は脚台部と环部の接合部より下部に向かい広がりをもち、脚部はきわめてみじかいものと推定される。

鉢 大溝最下層より平底のロクロ使用ナベ形鉢一点を検出した。体部は内湾し、口縁部近くより「く字」状に外反する。口径28cm、底径15.3cm、器高12.4cmの大きさで、外面はロクロナデ、内面は黒色処理が施され、ヘラナデである。

甕 ロクロ未使用の土師器で胎土に石英砂を含む鉢形の甕で、大溝最下層の検出である。内外面ともハケメ・ナデで調整している。底部は木葉痕があり、体部が内湾し、口縁部が少し外傾する。大きさは口径21.5cm、底径8.5cm、器高13.5cmである。

長胴甕 ロクロ未使用の長胴甕で、内外面ともハケメ・ナデである。体(胴)部がいくぶんふくらみのある程度で炭が外面につく。口径は22~23cmの大きさである。

土鍤 胎土に石英砂を含むもので、長さ4cm、太さ1.8cm、中央に0.5cmの孔がある。SD 29F1層検出。(RP8)



第23図 出土土器分類 土師器

須恵器

环A類 外傾する口縁部をもつ平底の器で、ロクロ成形後回転ヘラ切りを行なっているものである。本遺跡においては、大溝最下層より発見されるほとんどがこの類である。SD 24においてはF 4～7まで検出するすべての环がこの环と高台をもつものである。この环類はB類に比べて、底部を水平に見た場合、体部のたちあがる角度が大きくなる。また、ロクロより切り離したままで底部を再調整するものは少ない。墨書銘もB類と同じ文字を書いているものではなく、すべて底部外面（内面1点有り）である。

环B類 外傾する口縁部をもつ平底の器で、ロクロ成形後回転糸切りを行なっているものである。この环類を口径が14～15cm、器高が3.5～4cmと口径が大きく器高の低いものをB類（1）、口径が14cm以下の器高が4cm以上の口径が小さく器高の高いものをB類（2）と分ける。B類（1）は比較的大溝下層より出土し、墨書銘は「田」「由」等の銘がある。B類（2）はB類（1）の上層より検出され、墨書銘では「林」「建」「目」等の銘がある。これら墨書銘は底部外面に書かれているものが多い。

环C類 A・B類の环に高台が付けられた环をC類とすることから、器種が必然と多くなる。本遺跡において、A類に高台を付けたものが多い。

环D類 高台のある环で体部外面に陵がある。大溝最下層より検出され、环部は浅く、口径が15cm前後と大きいものである。

环E類 环C類の小さな器形で、大きさは口径10.6cm、底径7cm、器高4.8cm前後である。ロクロ切り離しは、回転ヘラ切り・回転糸切りがある。体部外面中央左右に取手のあるもので、大溝（SD 35）F 6～7層より検出している。

蓋 天井部は、平坦な頂部と傾斜して周縁で下に折れる縁部からなるものと、平坦なものとがある。中央にはつまみがつき、つまみ中央部が凹むものと凸起するものがある。縁部は屈曲し、縁部内部に入るるものである。

頂部外面はロクロを用い、ヘラケズリである。内面はロクロナデを全面にのこすものである。

皿類 体部が斜めに外傾し、口縁部が外反する高台をもつ平底の器で、ロクロ成形後回転

系切りを行ない、切り離してから共土で高台をつくる。杯内面底部は磨滅し墨痕があることから、硯として用いられている。底部には「目」「林」等の墨書銘があるものもある。R P 391は口縁部が垂直にたつものが1点大溝S D 35・F 4層から検出している。

壺（1） 平底で体部は極端に内湾し、扁平な体部がある。上部に直立する短い口縁がある壺で、底・体部はロクロを用いずヘラケズリを行ない、高台のつく肉厚な胎土に石英砂を含むものである。体部最大径12.5cm、口径5cm、底径8.8cm、器高8.5cm。

壺（2） 丸い体部にわずかに外反する口縁がつく小形の器である。体部はヘラケズリ後ナデを行ない、底部もナデを行ない低い高台がつく。体部最大径9.2cm、口径5.0cm、底径5.6cm、器高10.7cm。

壺（3） 平底で体部が内湾する極小の壺で、ロクロは使われず、体部はヘラケズリ・ナデが行なわれている。口縁は体部に外反する短いものである。体部最大径7.8cm、口径5cm、底径4.5cm、器高5.1cm。

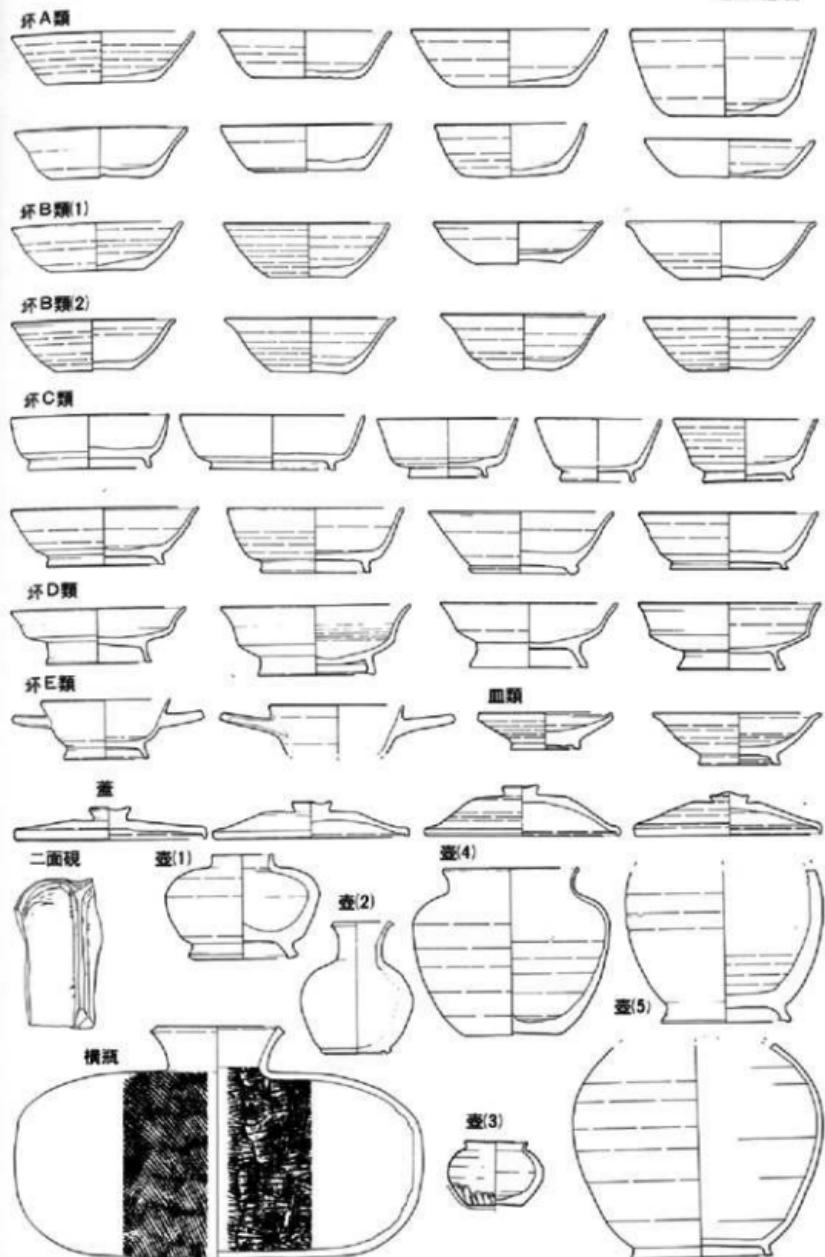
壺（4） 平底で肩のはった体部に、若干外反する短径の壺である。ロクロ成形後底部切り離しは回転ヘラ切りである。体部最大径15.8cm、口径11cm、底径7.8cm、器高13.5cm。

壺（5） 長頸瓶であると考えられるが、個々のものが部分的に検出され、一個体をなさない。R P 335は最大径18cm、底部11.5cmの高台をもつロクロ成形である。頸部も確認され、口径9~12cmをもつものである。

横瓶 2個体、大溝下層より検出し、丸い俵状の体部に外反する口縁部からなるもので、外面は平行の叩き目と端はナデ、内面は側の2枚の羽子板状の叩き目で、俵状の端は指の圧痕がみられ、口縁部はナデである。大きさ、体部最大幅39.5cm、太さ18cm、口径11.5cm。

大壺 いずれも口縁部・体部の破片であり、成形時の叩き痕より多種に分けることができる。復元できたR P 181は器高55cm以上、最大幅43cmの丸底で内外面とも平行の叩き目である。

当板の叩き目には平行のもの、同心円文、青海波文等が見られる。大壺口縁部にみられる波状痕にも沈線の深く短い波状と、浅く大きな波状沈線の入るものがある。



第24図 出土土器分類 須恵器

硯 二面硯 1 個体 (R P 342) 風字硯 (R P 450) 1 個体が検出されたが、風字硯は破片で全体をうかがえるものではない。二面円頭風字硯は、長方形の硯面に両端・硯面の中央・海部の三方に外堤をつくり海部を深くするため陸部の裏に 2 脚をつけ、ナデ；ヘラケズリによって全形を整えている。また、陸部には磨滅がみられ墨痕がある。この特徴として、硯頭部が牛蹄形であり硯面を二分する堤の先端と裏に指の圧痕がある。

赤焼き土器

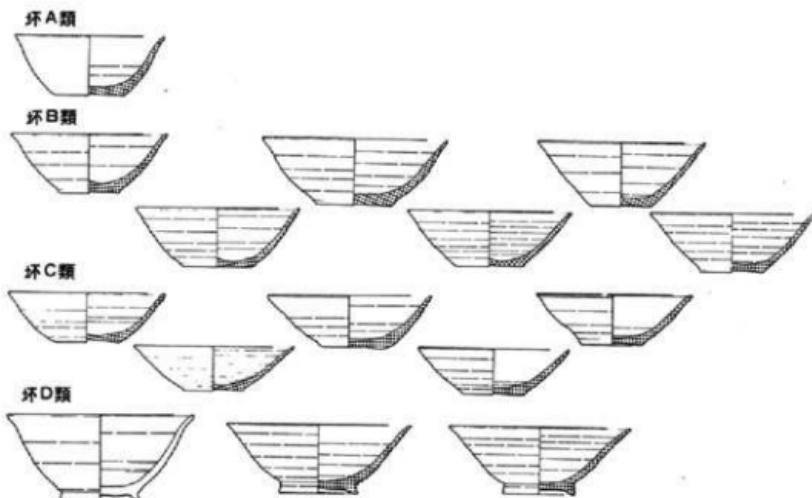
坏A類 ロクロ使用の肉厚の坏で内外面ともロクロナデである。ロクロ切り離は糸切りで体部に「二万」の黒色銘がある。口径 12.3cm、底径 5.8cm、器高 5cm である。(R P 254)

坏B類 ロクロ使用の薄での坏で胎土に石英砂の入るものもある。底径の小さな(4~5.5cm) もので体部は直線的にたちあがる。口径 13~14cm、器高 5.5~6cm である。体部に「直」の墨書銘があるものもある。色調は白橙色から赤橙色である。

坏C類 作り、胎土は坏B類とほぼ同様である。体部は直線的に広がる器高の底い坏で体部に「射弓」の墨書銘があるものもある。

坏D類 高台のつくるもので、形作りは坏B類に似る。口径 14~15cm と大きなものである。

甕類 いづれも体部の破片であり、体部内外面ともロクロナデであるが、体部外面下部はヘラケズリを行っているものがある。破片の肉厚より小型の甕もあり、また、口縁部の作りよりも細別される。



第25図 出土土器分類 赤焼き土器

表-2 土器計測一覧
SD5

遺物番号	器種	出土層	レベル	切り離し技法	計測値			墨書き部位	文字	径高比	
					口径	底径	器高				
RP141	須恵器坏	F3	199	糸切り	15.0	8.9	5.1		34.0	1.69	
RP138	赤焼き土器坏	"	195	"	13.6	5.3	4.3		31.6	2.67	
RP150	"	"	202	"	12.8	5.0	4.2		32.8	2.56	
RP161他	須恵器坏	"	200	"	14.4	6.6	4.8	底部外面	?	33.3	2.18
RP177	"	F4b	233	"	13.5	5.0	4.6		34.1	2.70	
RP204	"	F4	247.5	"	13.5	6.1	4.5	底部外面	?	33.3	2.21
RP203	"	F4b	243	"	13.3	6.5	4.4		33.1	2.05	
RP164	内黒土師器坏	F4	240	"	14.7	6.3	6.6		44.9	2.33	
RP229	須恵器坏	F5	248.5	"	15.0	7.5	4.7	底部外面	目	31.3	2.00
RP224	"	"	245	"	13.2	6.5	4.1	"	林	31.1	2.03
RP226a	"	"	249.5	"	13.2	6.4	4.1			31.1	2.06
RP202	"	"	243	"	14.2	6.7	4.6	底部外面 体部外面	茂	32.4	2.12
RP183	"	"	247.5	"	14.7	7.0	4.0			27.2	2.10
RP196b	"	"	250.5	"	14.0	6.3	4.4			31.4	2.22
RP246	"	"	234.5	"	14.9	7.9	4.7			31.5	1.89
RP226b	"	"	249.5	?	16.0	8.6	4.0	底部外面	?	25.0	1.86
RP184b	"	F5b	224.5	糸切り	13.5	5.1	4.4			32.6	2.65
RP ²¹⁷ ₂₅₆	"	F6	255	"	13.9	6.8	3.5	底部外面	家	25.2	2.04
RP198	"	"	250	"	14.8	6.8	4.0	"	林	27.0	2.18
RP197	"	"	252	"	14.8	7.6	4.3			29.1	1.95
RP196他	"	"	255	"	13.8	7.4	4.0			29.0	1.86
RP231b	"	"	248	?	11.4	6.5	4.8			42.1	1.75
RP192	"	"	250	糸切り	14.8	6.4	5.0			33.8	2.31
RP243a	"	"	241.5	"	12.8	6.7	4.3			33.6	1.91
RP182	"	"	245	"	14.1	6.2	4.0			28.4	2.27

遺物番号	器種	出土層	レベル	切り離し技法	計測値			墨書き部位	文字	径指高数	口径比
					口径	底径	壁高				
RP217	須恵器環	F6	255	?	14.4	6.7	3.5			24.3	2.15
RP243b	"	"	241.5	ヘラ切り	13.9	9.0	3.8			27.3	1.54
RP200他	内黒土師器環	"	240.5	糸切り	14.4	6.1	5.0	体部外面	二万	34.7	2.36
RP249	"	"	235	"	17.5	7.6	8.5	底部外面	二万	48.6	2.30
RP255	土師器環	"	240	"	13.0	5.4	5.0	"	二万	38.5	2.41
RP243d	須恵器環	"	241.5	"	13.0	5.8	4.4			33.8	2.24
RP232	"	F6b	244	?	12.7	6.0	3.2			25.2	2.12
RP34	"	G21-43	—	?	14.0	6.0	3.9			27.9	2.33

S D 2 4

RP412	須恵器環	F5b	255	ヘラ切り	14.3	9.0	5.3	底部外面	石	37.1	1.59
RP349	"	F5a	234	"	12.4	7.05	6.0			48.4	1.76
RP418	"	F6b	290	"	14.6	8.0	4.3			29.5	1.83
RP240	"	F5b	225	"	14.7	8.65	5.4	底部外面	依	36.7	1.70
RP419	"	F7上	303	"	15.4	9.6	4.7			30.5	1.60
RP406	"	F4	220	"	14.9	9.5	3.7	底部外面	南	24.8	1.57
RP420	"	F4b	234	"	14.6	8.4	3.8			26.0	1.74
RP422他	"	F5b	240	"	15.5	8.0	4.5			29.0	1.94
RP396	"	F3a	200	"	14.6	8.4	3.3			22.6	1.74
RP383	"	F3a下	199	"	13.9	8.3	3.1			22.3	1.67
RP380	"	F3a下	199	"	13.8	8.3	3.4			24.6	1.66
RP347 RP256	"	F3b	206	"	15.0	9.5	4.1	底部外面	南	27.3	1.58
RP346 RP243	"	F2a	202	"	14.9	8.9	3.8			25.5	1.67
RP271	"	F2b	199	"	13.2	6.5	3.9	底部外面	南	29.5	2.03
RP425	"	F5a	—	"	15.1	9.6	4.1			27.2	1.57
RP426	"	F5b	—	"	15.8	7.8	4.1			25.9	2.03
RP388他	"	F2a	188	"	14.7	8.9	4.25			28.9	1.65
RP395 RP380	"	F3a下	205	"	14.5	8.6	4.0			27.6	1.69

遺物番号	器種	出土層	レベル	切り離し 技 法	計測値	墨書き部位	文字	径高 指 數	口径比
					口径 底深 壁高				
RP328他	須恵器壺	F2a	195 202	ヘラ切り	14.7 8.2 4.0			27.2	1.79
RP346	"	F3a下	202 203	糸切り	12.4 6.1 3.8	底部外面	林	30.6	2.03
RP377他	"	F2	181 202	"	13.5 6.1 4.1	"	目	30.4	2.21
RP427 RP346	"	F2	144 202	"	13.9 6.4 4.2	"	目	30.2	2.17
RP193他	"	F1	170 179	"	15.4 6.8 4.7	"	万力?	30.5	2.26
RP447	"	F4	217	ヘラ切り	14.5 9.0 4.3			29.7	1.61
RP199他	土師器壺 (底部)	F1 ~ 3	201		9.5 7.8 4.8			—	—
RP239他	須恵器壺	F2	200	ヘラ切り	11.0 8.0 13.5			—	—

SD26

RP450	須恵器壺	F7	—	糸切り	14.0 6.3 4.5	体部外面	口万	32.1	2.22
RP458	内黒土師器壺	F6	—	"	13.3 4.8 4.4			33.1	2.77
RP452	赤焼き土器壺	"	—	"	13.6 5.4 4.5			33.1	2.52
RP453 RP455	"	"	—	"	12.6 5.5 5.0			39.7	2.29
RP50	須恵器壺	G18 - 52	—	"	13.9 5.4 4.6			33.0	2.57
RP 7	"	表 探	—	"	11.0 6.3 4.0	外部底部	万力	36.4	1.75
RP36	"	G22 - 45	—	"	14.9 7.1 4.0			26.8	2.10
RP37	"	—	—	"	14.1 7.8 4.6			32.6	1.81

SD35

RP40	赤焼き土器壺	F1	200	糸切り	15.5 7.1 8.0			51.6	2.18
RP47	"	F3	207	"	12.4 5.0 3.8			30.6	2.48
RP 6	"	F4	211	"	13.7 5.0 3.7			27.0	2.74
RP69	"	"	—	"	14.2 5.4 4.8			33.8	2.63
RP71	"	"	—	"	14.9 5.8 5.6			33.9	2.57
RP72	"	"	—	"	13.6 5.2 4.9			36.2	2.62
RP74	"	"	—	"	12.2 5.6 4.2			34.4	2.18
RP77	内黒土師器壺	"	—	"	14.5 7.2 6.2			42.8	2.02
RP80	赤焼き土器壺	"	—	"	14.0 5.0 4.6			32.9	2.80

番号	器種	出土層	レベル	切り離し 技 法	計測値			墨書き部位	文字	径 高 比 数	口径比
					口径	底径	都高				
RP 82	両黒土師器坏	F 4	?	糸切り	12.8	6.1	5.6			43.8	2.10
RP 87	赤焼き土器坏	"	?	"	13.4	5.2	4.0	体部外面	射弓	29.9	2.58
RP 90	"	"	?	"	13.5	5.0	4.7	"	直	34.8	2.70
RP 97	内黒土師器坏	"	227	"	14.3	7.0	6.6			46.2	2.04
RP 99	赤焼き土器坏	F 4 下	224	"	15.2	6.2	5.5			36.2	2.45
RP 102	"	F 4	220	"	15.2	6.6	5.7			37.5	2.30
RP 104	"	F 4 下	230	"	13.9	5.2	5.3			38.1	2.67
RP 111	"	"	224	"	13.2	5.0	4.8			36.4	2.64
RP 112	"	"	225	"	13.5	5.8	4.9			36.3	2.33
RP 116	"	"	208	"	12.9	5.0	4.9			38.0	2.58
RP 120	"	"	216	"	13.5	4.8	4.5			33.3	2.81
RP 157	内黒土師器坏	"	217	"	13.0	6.9	5.6			43.1	1.88
RP 212	須恵器坏	"	?	"	10.7	5.6	3.0	体部外面	平	28.0	1.91
RP 391	須恵器坏(皿)	"	219	"	10.8	5.6	3.0			27.8	1.93
RP 103	須恵器坏	F 5 上	230	"	13.5	5.6	4.8			35.6	2.41
RP 151	"	"	235	"	13.7	5.8	5.1			37.2	2.36
RP 155	"	F 5	242	"	13.8	4.5	6.2	体部外面	午	44.9	3.07
RP 254	赤焼き土器坏	"	230	"	12.4	6.8	4.8	"	二万	38.7	1.82
RP 256	須恵器坏	"	233	"	12.8	5.6	4.2			32.8	2.29
RP 259	内黒土師器坏	"	232	"	12.6	6.0	5.2	体部外面	平	41.3	2.10
RP 255	"	"	229	"	13.6	5.4	5.2	"	平	38.2	2.52
RP 272a	"	"	238	"	14.1	6.0	5.0	"	平	35.5	2.35
RP 272b	"	"	"	"	14.3	5.4	5.9			41.3	2.65
RP 276	須恵器坏	"	231	"	13.8	5.6	4.8	体部外面	?	34.8	2.46
RP 285a	内黒土師器坏	"	235	"	13.3	5.5	5.6	"	平	42.1	2.42
RP 285b	"	"	"	"	12.8	5.9	5.2	"	平	40.6	2.17
RP 288	須恵器坏	"	237	"	15.8	6.4	5.4			34.2	2.67

遺物番号	器種	出土層	レベル	切り離し 技	計測値			墨書き部位	文字	径高指 高数	口径比
					口径	底径	器高				
RP307	内黒土師環	F5	231	糸切り	13.4	5.0	4.9	体部外面	平	36.6	2.68
RP317	須恵器环	"	245	"	13.6	5.4	4.9			36.0	2.52
RP318	"	F6下	252	"	13.6	6.8	5.0	底部外面	目	36.8	2.00
RP373	"	F6上	254	"	13.7	6.0	5.0			36.5	2.29
RP405	"	F11	245	"	13.2	6.4	4.8	底部外面	林	36.4	2.06
RP407	"	"	245	"	14.1	9.6	5.3	"	人	37.6	1.47
RP410	"	"	259	"	14.1	7.4	5.0			35.5	1.91
RP364	"	F7上	254	"	10.4	4.7	6.8			65.4	2.21
RP379	"	F7	267	"	13.3	7.8	3.8	底部外面	由	28.6	1.71
RP380	"	"	271 277	"	14.0	7.5	3.8	底部内面	由	27.1	1.87
RP381	"	"	224	"	13.4	8.0	4.3	底部外面	由	32.1	1.68
RP431a	"	F7下	271	"	13.7	7.0	3.9	"	林	28.5	1.96
RP431b	須恵器 フタ	F7下	"	—	15.6	ツマミ 3.2	3.4			—	—
RP425	須恵器环	F12	280	?	14.2	8.9	3.5	底部外面	?	24.6	1.60
RP427	"	"	285	?	16.0	8.8	4.7			29.4	1.82
RP437	"	F8~10	?	糸切り	14.4	7.6	4.3	底部外面	由	29.9	1.89
RP329	内黒土師環	F12	229	—	14.8	8.2	8.0			54.1	1.80
RP331	須恵器横版	"	247	—	12.6	—	24.5			—	—
RP322a	" 环	"	247	ヘラ切り	13.6	7.8	3.8	底部外面	家	27.9	1.74
RP322b	" ツボ	"	248	?	4.8	8.7	8.3			—	—
RP333	" 环	"	246	糸切り	14.3	4.2	7.2	底部外面	淨	50.3	3.40
RP334	"	"	243	?	13.8	7.3	4.4			31.9	1.89
RP329	鉢形土器	"	229	?	28.0	15.3	12.3			—	—
RP338	甌	"	"	木葉痕	21.5	8.7	13.5			—	—
RP334	内黒土師環	"	"	手持 ヘラ削り	15.7	6.0	8.0			51.0	2.62

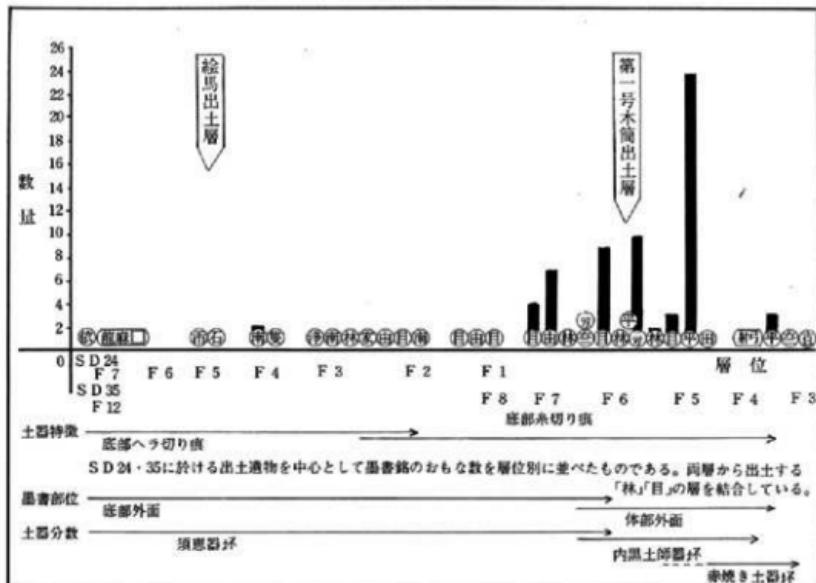
径高指數=器高／口径×100 口径比=口径／底径

2 墨書き土器 (第26~29図・第17~21図版)

本遺跡において墨痕のある土器片が505点、大溝を中心出土している。また、出土層により土器に書かれた文字が異なり、43文字の字種を数える。須恵器环・蓋、土師器环・蓋、赤焼き土器环の底部外面や体部外面に書かれているが、1点だけ (149・R P 380b) 环底部内面に書かれているものもある。書かれている文字は一字のものがほとんどであるが、中には二文字書かれているものもある。解読できた文字は「平」40点 (うち平と推定されるもの6点) 「目」42点 (11) 「目二」3点 (1) 「目三」3点 「林」16点 (2) 「二万」21点 (9) 「七万」5点 (1) 「四万」2点 「百万」1点 「□万」16点 「由」12点 (1) 「家」4点 (2) 「南」3点 「玄」5点 (1) 「建」4点 「太」2点 (1) 「生」3点 (1) 「依」2点 「筏」 「仁」 「犬」 「刀」 「弓」 「王」 「衣」 「安」 「田」 「木」 「日」 「佛」 「月」 「福」 「龍麻□」 「石」 「弔」 「隻」 「別」 「大」 「丁」 「而」 「矣」 「午」 「射弓カ」 各1点が判読される。特に多い文字は「目」「林」「二万」「平」等である。

これら出土する墨書きを層位順に序列すると、最下層から順に「依」「南」「龍麻□」「大」「隻」「石」「由」「目」「林」「二万」「平」「直」の順になる。この表が第3図である。主に、須恵器环の底部ヘラ切りは依~由、須恵器环糸切りは目~林、内黒土師器环には二万~平、赤焼き土器环には玄、射弓カ、等と歴然と区別することができる。

表-3 主な墨書きと土器の特徴



表一4 道伝遺跡出土 墨書き土器一覧

地区	番号 (遺物)	器種	出土層	切り出し	墨書き部位	文字	備考	地区	番号 (遺物)	器種	出土層	切り出し	墨書き部位	文字	備考
SD I	1 15	須恵器 环	V下	ヘラ切り	底部外側	大		SD I	45 194	須恵器 环	V下	糸切り	底部外側	(不明)	
	2 133	" "	" "	"	"	(不明)	高台有り		46 195	" "	" "	"	体部外側	"	
①	187 内底土師器	" V上	糸切り	体部外側	目	高台有り		164 内底土師器	" V上	" "	" "	"	佛		
④	144 "	" "	" "	" "	"	刀		165 "	" "	" "	" "	"	七万		
5	91 "	" "	" "	ヘラ切り	底部外側	淨		170 "	" "	" "	" "	主・	内底土師器 一部有り		
6	45 須恵器	" "	" "	糸切り	体部外側	平		147 須恵器	" "	" "	" "	"	生	字体草書	
7	130 "	" "	" "	"	底部外側	(不明)		135 " 圖	" "	" "	底部外側	建	軒用磚		
③	122 "	" "	" "	" "	"	由		131 " 环	" "	" "	"	月	目か?		
③	133 "	" "	" "	" "	"	百万		173 内底土師器	"	(不明)	"	目			
10	122 "	" "	" "	"	"	家		51b "	" "	糸切り	体部外側	七万			
⑪	48 "	" "	" "	"	"	林		55 171 "	(不明)	" "	" "	(不明)	高台有り 二万カ?		
⑫	132 "	" "	" "	"	"	林		56 169 "	环	" "	" "	"	万カ?		
13	129 "	" "	" "	"	"	林		57 195 "	" "	(不明)	" "	"			
14	42 "	" "	" "	"	"	林		58 109 "	" "	" "	" "	"	七万カ?		
15	50 "	" "	ヘラ切り	"	"	円		59 211 "	" "	" "	" "	"	口万カ?		
⑥	44 "	" "	糸切り	"	"	岳		60 182 "	"	糸切り	底部外側	建	高台有り		
⑦	138 "	" "	" "	"	"	衣衣		61 199 須恵器	"	(不明)	体部外側	四万			
16	23 "	" "	ヘラ切り	"	"	淨		62 49 "	圓	"	大上部 外側(不明)	福(その 三文字 有り)			
⑨	41 " 直	"	糸切り	竹立高台	"	目	軒用磚	26 " 环	" "	糸切り	体部外側	平			
20	164 " 环	"	糸切り	"	"	建		64 32 "	" "	" "	" "	平			
⑩	107 "	"	V下	"	体部外側	太い		65 104 "	" "	" "	" "	二万			
22	52 "	" "	" "	"	"	太		181 " "	" "	底部外側	建				
23	51a "	" "	"	(不明)	"	(不明)生れ?		67 198 "	" "	" "	体部外側	二万			
24	125 "	" "	糸切り	底部外側	二万			68 55 "	" "	" "	" "	七万			
⑪	185 "	" "	" "	"	"	安		69 68 "	" "	" "	" "	平			
26	175 "	" "	" "	"	"	目		70 127 "	" "	" "	底部外側	(不明)	高台有り		
27	168 "	" "	" "	"	底部外側	二万		71 191 "	" "	" "	" "	"			
28	197 "	" "	" "	"	"	二万		72 193 "	" "	" "	" "	"			
29	126 "	" "	" "	"	底部外側	二万		73 183 "	" "	" "	体部外側	七万			
30	177 "	圓	" "	"	"	目	軒用磚	74 196 "	" "	" "	(不明)				
⑪	25 "	环	" "	"	"	目二		75 188 須恵器	"	(不明)	"	平			
32	106 "	" "	" "	"	"	田	高台有り	76 192 "	" "	糸切り	底部外側	(不明)			
33	136 "	" "	" "	"	"	由		77 187 土師器	" "	" "	底部外側	"	口万カ?		
34	177 "	" "	" "	"	"	(不明)目カ?		78 182 内底土師器	"	" "	"	二万			
35	78 "	" "	" "	"	"	林		79 200 "	" "	" "	" "	四万			
36	19 "	" "	" "	"	"	木		80 184 "	" "	" "	"	(不明)	口万カ?		
37	121 "	" "	" "	"	"	(不明)林カ?		81 27 "	" "	(不明)	底部外側	"	高台有り 目カ?		
38	172 "	" "	" "	"	体部外側	(不明)		82 202 須恵器	"	(不明)	糸切り	"	二万		
39	174 "	" "	" "	"	底部外側	日カ?		83 201 内底土師器	"	" "	体部外側	(不明)	百万七 カ?		
40	176 "	" "	" "	"	"	日カ?		84 207 須恵器	"	" "	底部外側	二万	高台有り		
41	178 "	圓	" "	"	"	目	軒用磚	85 203 須恵器	"	" "	"	(不明)	目カ?		
42	179 "	环	" "	"	"	目		86 188 "	" "	" "	" "	目カ?			
43	186 "	" "	" "	"	"	(不明)目カ?		87 209 "	" "	" "	" "	二万カ?			
44	189 "	" "	" "	"	"	"		88 204 "	" "	" "	" "	"			

番号を○で囲んだところは、墨書きを示し、因縁にとりあげている。

地区	番号 (件)	器種	出土層	切り崩し	墨書き部位	文字	備考	地区	番号 (件)	器種	出土層	切り崩し	墨書き部位	文字	備考
SD 1	89 58	須恵器	环	C(不明)	糸 切り	底部外面	C(不明)	SD 6	135 494	須恵器	环	F 7	糸 切り	底部外面	目
	90 282	"	"	"	"	"	口万カ?		136 384	"	"	F 12	—	"	(不明)
	91 210	"	"	"	(不明)	体部外面	"		137 385	"	"	"	"	"	目カ?
	92 285	内側土師器	"	(×)	"	"	二万カ?		138 425	"	"	"	ヘラ切り	"	(不明)
	93 286	"	"	W 上	(×)	"	"		139 328	"	"	"	一	付け高台	由
	94 211	"	"	F 6	糸 切り	"	"		140 324	"	"	"	ヘラ切り	"	家
	95 233	須恵器	"	"	体部外面	"	"		141 315	"	"	"	糸 切り	"	R P 35 と 結合
SD 5	255 105	土師器	"	"	底部外面	二 万	"	SD 7	142 385b	須恵器	环	F 8	糸 切り	底部外面	目
	97 249	内側土師器	"	高 切り	付け高台	"	円錐り		143 321	内側土師器	"	"	"	"	(不明)
	98 238	須恵器	"	糸 切り	糸	(不明)	一万カ?		144 437b	須恵器	"	糸 切り	"	"	"
	99 221a	"	"	糸 切り	付け高台	"	"		145 437a	"	"	F 8~10	"	"	由
	100 254	"	"	糸 切り	底部外面	林	"		146 361	須恵器	环	F 7 上	糸 切り	底部外面	R P 32 と 結合
	101 198	"	"	"	"	林	"		147 278	"	"	F 7	ヘラ切り	"	"
	102 217	土師器	圓	"	—	体部外面	C(不明) 家カ?		148 288a	"	圓	"	—	つまみ部	由
⑩	202 202	須恵器	环	F 5	糸 切り	底部外面	青 棒		149 288b	"	环	"	糸 切り	底部内部	由 他 I 点
	104 221	"	"	"	"	体部外面	(不明) 林カ?		150 288c	"	"	ヘラ切り	付け高台	底部外面	(不明)
	105 224	"	"	"	"	糸	"		151 381	"	"	糸 切り	付け高台	"	由 R P 31 と 結合
	106 226b	須恵器	环	"	糸 切り	底部外面	C(不明)		152 431a	"	"	糸 切り	底部外面	林	
	107 229	"	"	"	"	"	目		153 431b	内側土師器	"	"	—	体部外面	(不明)
	108 243	"	"	"	"	糸	"		154 379a	須恵器	环	F 7	糸 切り	底部外面	由
	109 264	"	"	F 4	"	"	目		155 279c	"	"	"	"	"	"
表様	110 13	"	环	—	"	"	(不明)	SD 8	156 382	"	"	"	"	"	山
	111 24	"	ク	—	"	"	二万カ?		157 323a	"	F 7 上	糸 切り	底部外面	目	
	112 8	"	ク	—	"	体部外面	仁		158 323b	"	"	糸 切り	付け高台	(不明)	
	113 7	"	ク	—	"	底部外面	C(不明) 家カ?		159 346	土師器	"	F 7	—	"	目
	SD 24 114 419	"	"	F 7 上	ヘラ切り	糸	× × は津		160 371a	須恵器	"	F 7 上	ヘラ切り	底部外面	(不明)
	115 240	"	"	"	ヘラ切り	糸	依		161 372a	"	"	糸 切り	"	"	万カ?
	116 352	"	"	"	ヘラ切り	糸	龍 麻		162 42 b	"	"	"	体部外面	"	
SD 24	117 412	"	"	5下	"	糸	石		163 42 c	"	"	"	"	"	万カ?
	118 410	"	蓋	"	—	天井部	市		164 42 d	"	"	"	—	"	"
	119 406	"	环	F 4	ヘラ切り	"	南		165 42 e	"	"	"	—	"	"
	120 404	"	"	"	"	底部外面	隻		166 42 f	内側土師器	"	"	—	"	"
	121 436	"	环	F 3	ヘラ切り	"	C(不明)		167 42 g	内側土師器	"	"	—	"	"
	122 428a	"	"	F 3 下	糸 切り	糸	林		168 42 h	"	"	"	—	"	"
	123 278	"	"	F 1 下	ヘラ切り	体部外面	大		169 42 i	"	"	"	—	"	"
SD 15	124 307b	"	环	F 3 下	"	底部外面	南		170 42 j	"	"	"	—	"	"
	125 271	"	环	F 2 下	"	"	南		171 42 k	"	"	"	—	"	"
	126 329	"	"	F 2 上	"	"	C(不明)		172 42 l	"	"	"	—	"	"
	127 428b	"	"	F 2	糸 切り	"	目		173 430a	須恵器	环	F 1 下	糸 切り	底部外面	目カ?
	128 299	"	蓋	F 1	—	天井部	別		174 430b	"	"	"	体部外面	太 他 I 点	
	129 316	"	"	F 1	糸 切り	底部外面	目		175 434	"	"	F 7	ヘラ切り	"	(不明)
	130 315	"	"	F 1	"	"	C(不明) 目カ?		176 438	"	"	糸 切り	底部外面	"	
SD 16	131 427	"	"	F 1	"	"	目	SD 17	177 368	"	"	F 6	"	"	目ニカ?
	132 193	"	环	F 1	"	"	(不明) 万カ?		178 405	"	"	"	"	"	林
SD 15	133 397b	"	蓋	—	—	天井部	外 面 依	SD 18	179 407	"	"	ヘラ切り	"	人	板用規
	134 450	"	"	F 1	糸 切り	体部外面	から 墓		180 428	"	"	糸 切り	"	"	(不明)

※番号を〇で囲んだところは、墨書きを示し、図版にとりあげている。

地 区 番 号 <small>(地名)</small>	形 種	出土箇所	切り取り	墨書き部位	文字	備 考	地 区 番 号	形 種	出土箇所	切り取り	墨書き部位	文字	備 考
SDD5 181 318 須恵器 环 F 6 米 切り 瓶底外面 目							SDD5 225 332a 須恵器 环 F 5 半 切り 付け高台 底部外面 (不明) 目±?						
182 27 ハ ハ ハ 一 体部外面 (不明)							226 332b 内底土師器 ハ 半 切り 体部外面 平						
183 339a ハ ハ ハ 半 切り 付け高台 底部外面 (ハ) 目カ?							227 334a 須恵器 ハ ハ ハ 一 底部外面 (ハ) 二万カ?						
184 339b ハ ハ ハ 半 切り ハ (ハ)							228 339b ハ ハ ハ 一 底部外面 目						
185 332a 須恵器 ハ ハ 刃切り 体部外面 目							229 339c ハ ハ ハ 一 体部外面 (不明) 二万カ?						
186 332b ハ ハ ハ 半 切り ハ (不明) 挿1点 (312c) 挿2点							230 397a ハ ハ ハ 半 切り ハ " "						
⑪ 186 内底土師器 ハ 一 ハ (ハ) 挿2点							231 397b 内底土師器 ハ " " "						
188 367 須恵器 ハ ハ 半 切り 体部外面 (不明)							232 398a 須恵器 盒 ハ 刃切り 付け高台 底部外面 " 転用現						
189 368 ハ ハ ハ 体部外面 (ハ)							233 398b 内底土師器 环 ハ 一 体部外面 平						
⑫ 174 ハ ハ ハ 半 切り ハ 茶							234 408a 須恵器 ハ " 一 " (不明) 平カ?						
191 420 ハ ハ ハ ハ " (不明)							235 408b 内底土師器 ハ 半 切り ハ " "						
192 136 内底土師器 ハ 一 体部外面 (ハ)							236 154 " " " " " 体~底面 平 墓書き力 所にある						
193 258 ハ ハ ハ 半 切り ハ (ハ)							237 327 " " " " " 一部外面 平						
194 318 須恵器 环 ハ ハ 底部外面 目							238 151 " " " " " 一部外面 平						
195 314a 須恵器 ハ ハ 体部外面 目							239 259 " " " " " 他1点 平						
196 314b ハ ハ ハ " (不明)							240 266 " " " " " 体部外面 平 その他 3点有り						
197 314c 須恵器 ハ ハ ハ " 他1点							⑪ 154 赤堀土師器 ハ 半 切り " 三万						
198 320a 須恵器 环 F 6~8 一 体部外面 平							242 255a 内底土師器 " " " " " 年						
199 320b 内底土師器 F 6~8 一 体部外面 平							243 255b " " " " " (不明) 万?						
200 316a 須恵器 F 6 半 切り 底部外面 目							244 91 " " " " " " "						
201 316b ハ " " " " (不明)							245 326 " " " " " " "						
202 350 " " " " " 目							246 226a " " " " " (不明)						
203 360 " " " " " 目							247 226b " " " " " " "						
204 353a ハ " " " " (不明)							248 273a " " " " " " "						
205 353b ハ " " " " 体部外面 "							249 273b 須恵器 " " " " " (不明) 平±?						
206 353c 内底土師器 " " " " "							250 272 内底土師器 " " " " " 体部外面 平						
207 373 須恵器 ハ 半 切り 底部外面 "							251 276a 須恵器 " " " " " 自三 RP 2864 2.5倍複合						
208 401a 内底土師器 " " " " 体部外面 "							252 276b " " " " " 体部外面 (不明) 2254 1.5倍						
209 401b ハ " " " " "							253 276c " " " " " 口万カ?						
210 401c ハ " " " " "							254 416 " " " " " "						
211 401d 須恵器 " " " " "							255 214 内底土師器 环 " " " " " 平 RP2弱と複合						
212 419 " " " " ヘラ切り 底部外面 "							256 307a " " " " " " "						
213 428 " " " " "							257 307b " " " " " (不明)						
214 320 内底土師器环 F 6~8 一 体部外面 平							258 313a " F 5 下 " " " 大±?						
215 276a 須恵器 F 5 半 切り 底部外面 目三							259 313b 須恵器 环 " " " " " 底部外面 林						
216 276b " " " " (不明) 万+万カ?							260 313c 内底土師器 F 5 半 切り 付け高台 (不明)						
217 308 " " " " "							261 " " " " " " " 大						
⑫ 393 " " " " 底部外面 六							262 269a 内底土師器 F 5 " " " " (不明)						
219 338a 内底土師器 " " " " 半 切り 体部外面 口万							263 269c " " " " " " "						
220 338b 須恵器 " " " " 平							⑪ 271 須恵器 环 " " " " " 他3点						
221 355a 内底土師器 " " " " 田							264 269c " " " " " " "						
222 355b 須恵器 " " " " 午							265 272 須恵器 " " " " " " "						
223 355c " " " " 底部外面 目							266 272 内底土師器 " " " " " " "						
224 296 " " " " 体部外面 (不明)							267 287a " " " " " " " 口万カ?						

番号を○で囲んだところは、墨書きを示し、囲函にとりあげている。

地 区	番 号 (倣)	器 種	出土場 所	切り崩し	墨書き部位	文字	備 考	地 区	番 号 (倣)	器 種	出土場 所	切り崩し	墨書き部位	文字	備 考	
S005	266 286	内側土師環	F 5	条 切り	体部外面	平	他 9 点	S005	313 110a	須恵器	环	F 4 上	—	体部外面	(不明)	
278 292	〃 〃 〃	—	〃	—	(不明)			314 110b	〃 〃 〃	—	〃	〃	〃	〃		
271 295	須恵器 环	〃	条 切り	底部外面	〃			315 128	〃 〃 F 4	条 切り	底部外面	〃				
272 299	内側土師環	〃	—	体部外面	〃	平カタ	他 1 点(不明)	316 95	内側土師環	〃	—	〃	体部外面	〃		
273 305	須恵器 坏	〃	条 切り	底部外面	(不明)			317 399b	〃 〃	F 4~5	〃	〃	〃	他 12 点		
274 309a	内側土師環	〃	—	体部外面	平			318 159	〃 〃	—	—	〃	〃			
275 309b	須恵器 土器	〃	条 切り	底部外面	(不明)			319 221a	〃 〃	—	—	〃	〃			
276 311a	内側土師環	〃	—	体部外面	〃			320 221b	土師器	〃	—	—	〃	〃		
277 311b	須恵器	〃	—	〃	〃	他 1 点		321 291	内側土師環	〃	—	—	〃	〃	万カ?	
278 285	内側土師環	〃	条 切り	〃	平			322 346	須恵器	〃	条 切り	底部外面	目			
279 315	〃 〃	—	—	(不明)	他 1 点			323 34a	〃 〃	—	〃	〃	(不明)			
280 309b	〃 〃	条 切り	付け高台	底部外面	平			324 34b	〃 〃	—	〃	〃	〃			
281 326	〃 〃	—	体部外面	平				325 371b	内側土師環	〃	—	〃	体部外面	〃		
282 354	須恵器	〃	条 切り	底部外面	(不明)			326 399a	須恵器	〃	条 切り	底部外面	〃			
283 369a	内側土師環	〃	—	体部外面	〃			327 299b	須恵器 土器	〃	—	〃	〃			
284 369b	〃 〃	—	—	〃	〃			328 399c	須恵器	〃	—	〃	〃			
285 482a	須恵器	〃	—	底部外面	〃			329 299d	〃 〃	—	〃	体部外面	〃			
286 482b	〃 〃	—	体部外面	〃				330 299e	〃 〃	—	—	〃	〃			
287 235	内側土師環	〃	—	〃	〃			331 299f	〃 〃	—	—	〃	〃			
288 279	須恵器 环	〃	—	〃	〃			332 299g	内側土師環	〃	—	〃	〃			
289 263	〃 〃	条 切り	底部外面	〃				333 299h	〃 〃	—	—	〃	〃			
290 275	内側土師環	〃	—	体部外面	〃			334 299i	〃 〃	—	—	〃	〃			
291 277a	〃 〃	—	—	〃	〃			335 45	須恵器	F 1 下	—	〃	〃			
292 277b	須恵器	〃	条 切り	底部外面	棒			S01 4 336 13	〃 〃 F 5	—	底部外面	目	S01 4 柱頭丸上部 EN44 丸方上部			
293 277c	内側土師環	〃	〃	体部外面	(不明)	万カ?		S01 4 337 57	〃 〃	ED94 条 切り	〃	目				
294 277d	〃 〃 〃	—	—	〃	〃	二万カ?	SE 1 338 229a	〃 〃 F 2	—	体部外面	(不明)					
295 277e	〃 〃 〃	—	—	〃	〃		339 229b	須恵器 土器	〃	—	〃	大				
296 297	須恵器 土器	〃	条 切り	底邊外面	〃		340 229c	内側土師環	〃	—	〃	平				
297 303	内側土師環	〃	—	体部外面	〃		341 229d	須恵器	〃 〃	—	〃	(不明)				
298 327	〃 〃	条 切り	付け高台	体部外面	平		342 229e	土師器	〃 〃	—	〃	平カ?				
299 322	〃 〃	—	—	(不明)			343 229a	須恵器	〃 〃	—	〃	大				
300 392	〃 〃	条 切り	付け高台	〃	〃		344 229b	内側土師環	〃	—	〃	平	他 3 点			
301 87	須恵器 土器	F 4	条 切り	体部外面	射弓			345 227	土師器	〃	—	—	(不明)			
302 90	〃 〃 〃	〃	〃	鳥				SE 2 346 240	須恵器	F 10	—	〃	〃			
303 185	〃 〃 〃	〃	〃	(不明)	点			347 237a	〃 〃 F 9	—	〃	〃				
304 212	須恵器	〃 〃	〃	〃	平			348 237b	〃 〃	—	—	〃				
305 253a	内側土師環	F 4 下	〃	〃	(不明)	平カ?		349 237c	土師器	〃	—	〃	〃			
306 253b	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃			350 236a	内側土師環	F 6	条 切り	〃	平			
307 253c	〃 〃 〃	〃	〃	〃	平カ?			351 236b	〃 〃	—	—	〃	平			
308 399a	須恵器	F 4	〃	底部外面	〃	平カ? その他の5点		352 236c	〃 〃	—	—	〃	(不明)			
309 226	須恵器 土器	〃	〃	体部外面	〃			353 236d	〃 〃	条 切り	底部外面	〃				
310 43	〃 〃 〃	—	—	〃	〃			354 204	〃 〃	—	体部外面	平				
311 161	須恵器	F 4 下	—	〃	〃			355 409	〃 〃	条 切り	底部外面	(不明)	目カ?			
312 169	内側土師環	〃	—	〃	〃			356 415	〃 〃	F 10	〃	体部外面	平			

※番号を〇で囲んだところは、墨書きを回示し、図版にとりあげている。



第26図 道伝遺跡出土墨書銘



第27図 道伝遺跡出土墨書銘



第28図 道伝遺跡出土墨書銘



第29図 道伝遺跡出土墨書跡

3. 木製品 第30~35図 第26~29図版

木製品は井戸跡及び溝跡からの出土である。木質遺物の中から一定の目的で加工し使用したものと私寄される木質遺物を木製品とした。これらの主な遺物を日用品、農具及び用途不明品、その他として類別し説明を加える。しかし、全ての木製品の鑑定は行なっていないことから、針葉樹と広葉樹とに大別した。ただし、木筒、木筒様木製品については御寄稿いただいている。

日用品

椀及び皿状木製品 SD 5 F 5~6

本遺跡より、11点検出している。なかでもSD 5より検出したものの底部外面には「平」「二万」「由」「水」「田」「主カ」等と刻印が彫られており、SD 1より「目」の文字のある漆器椀も確認されている。全面ロクロにて挽きが行なわれていると思われる（広葉樹）

皿1 F 6層出土 直径14.7cm、器高2.8cm、高さ1.2cmの高台をもつものである。「由」

皿2 F 6層出土 直径14.4cm、器高2cm、高さ1.0cmの高台をもつものである。「水」

皿3 F 6層出土 直径15.2cm、器高1.4cm、高さ0.4cmの高台をもつものである。「主カ」

椀 F 5層出土 直径15.7cm、器高5cm、高さ1.0cmの高台をもつものである。「平」

盆SD 35・F 12層出土 直径23.5cm、器高2cmである。底部に「米カ」の刻印がある。

曲げ物

曲げ物は天井板、底板等を含め約20点検出している。大きさは天井板で直径18cmから48.5cmの大きさで、桜皮のようなもので継じている。底板には柾目板が多く用いられ、木釘が存在している。SE 1の井戸内にある曲げ物は、直径48.5cmで、厚さ0.4cmの板材内側に溝を1cm幅に入れ桜皮で継じており、外側に同じように幅5cmの材で2重に作られているものである。（針葉樹）

漆器 SD 35・F 13層出土 器高2.8cm、各一辺10.9cm、10.5cm、4.3cm、9.1cm、4.2cmの変則的な五角形の箱型状の容器で、体部の板、厚さ0.2cmを木釘でとめ、内外面に黒漆を塗布している。

題簽 SD 35・F 6層出土 全長9.3cmのもので5cmの柄がつく。幅1.6cm、厚さ0.4cmで墨痕等は確認されない。（針葉樹）

定規状木製品 SD 35・F 13層出土 長さ26cmのところで折れ欠損している棒のもので端より0.8mのところに切り込みがあり、その切り込みより2~2.8cmの間ごとに11カ所の切り込みを入れている。（針葉樹）

櫛 SD 35・F 5層上出土 長さ8cmのところで欠損している横櫛で、背は歯と平行する。歯

は67本まで数えることができ、長さは約3cmである。（広葉樹）

農 具

横槌1 S D 5・F 6層下出土 全長38.7cm、柄部長16.3cm、太さ直径7.6cm、柄部太さ直径4.2cm、全体の粗削りを行ない、著しい叩き痕が中央部にあり、変形し断面が梢円形を示す。（広葉樹）

横槌2 S D 35・F 13層下出土 全長48.3cm、柄部長14.7cm、太さ直径59.5cm、柄部太さ直径3.6cm、柄部だけ粗削りを行ない柄部端が太くなる。著しい叩き痕はみられない。（広葉樹）

横槌状木製品 S D 35・F 6層出土 全長40.2cm、柄部長18.5cm、横槌と異なり断面が半円であり、厚さ3.7cm、柄部厚さ2.8cmで柄部に粗削痕がのこるものである。（広葉樹）

柄 S D 5・F 6層出土 錐等の柄と考えられるもので全長47.0cm、握り部の太さ直径約3.2cmである。（広葉樹）

コモヅツロ1 S D 2・F 9層出土 全長16.6cm、幅最大5.7cm、中央部がくびれているものであり、全面粗削りである。（広葉樹）

コモヅツロ2 S D 35・F 13層出土 全長16.4cm、太さ約3cmの丸木の中央部を削り、太さ直径1.6cmである。（広葉樹）

鍼状木製品 S D 35・F 6層出土 風呂部長さ41cm、幅14.8cm、厚さ5～6.5cm、柄の長さ64.5cm、太さ直径約6.5cm、枝の分岐した部分（主幹と支幹）を活用したもので、直方体の身部と柄との構成が削出しによって作られて、風呂部に対する柄の角度は約60度である。全体に粗削りで、柄の太さ、風呂部の厚さ等より鍼として用いられたとは考えられない。（広葉樹）

用途不明及びその他木製品

櫛状木製品 S D 5・F 6層出土 全長62.1cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm、平たい身部に長さ26cmの太さ直径1.5cmの柄を設けた櫛状のものである。（針葉樹）

箆状木製品 S D 35・F 5層出土 全長24.5cm、幅3.1cm、厚さ1.2cmの先端を丸く削っており、元には直径0.2cmの孔をもつものである。（針葉樹）

棒状木製品 S D 5・F 5下層出土 長さ19.8cm以上のもので2cmの握り込みが見られる。（針葉樹）

箆状木製品 S D 35・F 1層出土 一辺6.5cm×7.8cm、厚さ0.7cmの方形の材に幅2.7cmの柄がつくもので柄は折れている。柄の接合部付近に2つの孔がある。

棒状木製品 S D 23・24・F 3下～4上層出土 棒状製品の横断面が正方形のもの56本、円形及び梢円形37本、長方形188本、不定形44本の長さが10～30cmのもので太さ0.5～0.8cmのものである。（針葉樹）

弓 S D 35・F 13層出土 全長101.5cm, 太さ直径1.8~2.5cmの丸木弓で、樹皮を剥離し、両端を3~5cmほど削られている。(イヌガヤ材) また、S D 22 F 1より54cmで欠損し、太さ1.7~1.9cmの丸木弓が出土し、昭和54年度にS D 1から出土したイチイ材の弓を合わせると3点の出土である。

繪馬(第1号) S D 22・F 4・5層出土 方形繪馬で、上辺12.5cm, 下辺13.0cm, 左辺8.1cm, 右辺8.1cm, 厚さ0.9cmの墨書きで材は腐蝕し、わずかに墨痕が馬の頭部と両脚が確認できる。裏面も削られているが墨痕は確認できない。(針葉樹)

繪馬(第2号) S D 24・F 5層上出土 方形繪馬で、上辺8.7cm, 下辺8.7cm, 左辺7.5cm, 右辺7.5cm, 厚さ0.7cmの墨書きで、材左辺は2回にわたり面より直角に切断され、右辺は面より鋭角に切断されている。裏面は粗面で墨痕は認められない。絵は左向きの飾り馬が描かれ、前脚を曲げ首は水平に下げられて描かれている。馬の口元より手綱がはられ、尾が後になびき、鞍も描かれているようである。

斎串 S D 24・F 4層下より2点出土している。第1号斎串は長さ18.5cm, 幅1.8cm, 厚さ0.4cm, 第2号斎串は長さ17.6cm, 幅1.9cm, 厚さ0.3cmで、2点とも上端は山形に作り、上端左右に上から下にかけ斜状に4~5本の切り目がある。また、下端は尖らせたものである。

4. 種子 (30図版)

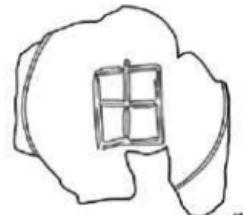
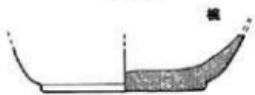
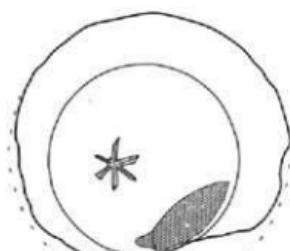
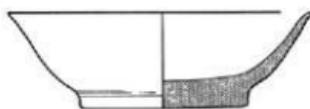
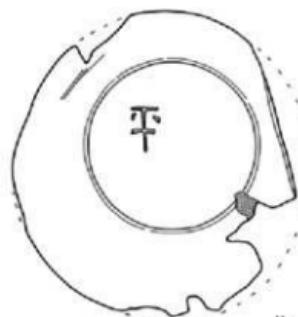
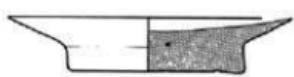
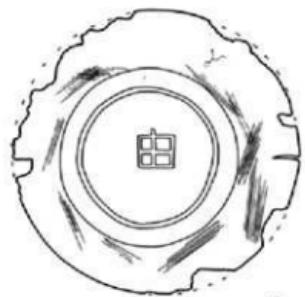
豆 S E 1, F 3・4層より検出した。種子は種皮に包まれ、子葉が2枚あり背縫線に種柄に着くあとがみられる。大きなもので長さ1.2cm×幅0.7cm, 厚さ0.4cmのものが1個体。小さなものは小豆と思われ、長さ約0.6cm×幅約0.4cmのものが4個体の検出である。

ウリ S E 1, F 3・4層より検出したヒョウタンの種子と思われる。長さ0.5~0.8cm, 幅0.25~0.35cm。

米 S E 1, F 3・4層とS D 35, F 3層上面から検出したもので溝腹土からは5粒で、焼け焦げているものである。もみのつくもので長さ0.7cm, 幅0.4cm, 厚さ0.28cmのものとみなして長さ0.55cm, 厚さ0.2cm, 幅0.3cmであるが、長類型・短粒のものがある。

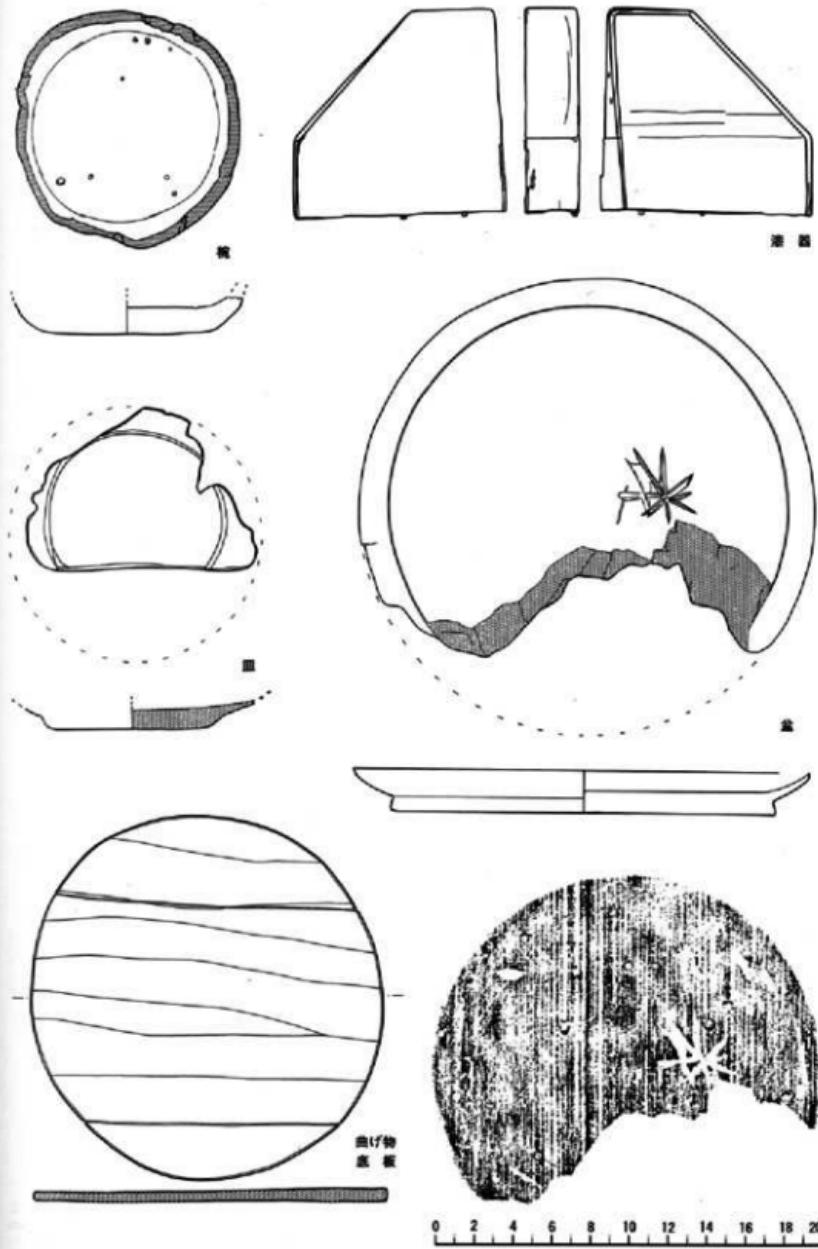
その他

クルミ、藤の実、トチの実、ウメ、モモ、不明等が大溝、井戸跡より検出している。特に梅の実と思われるものは長さ1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.8cmの肉厚の種子で発見された15個のすべてが約 $\frac{1}{4}$ の削られたような痕をのこすものである。また、虫のさなぎと思われる長さ0.7cm、幅0.4のものが6個体出土している。

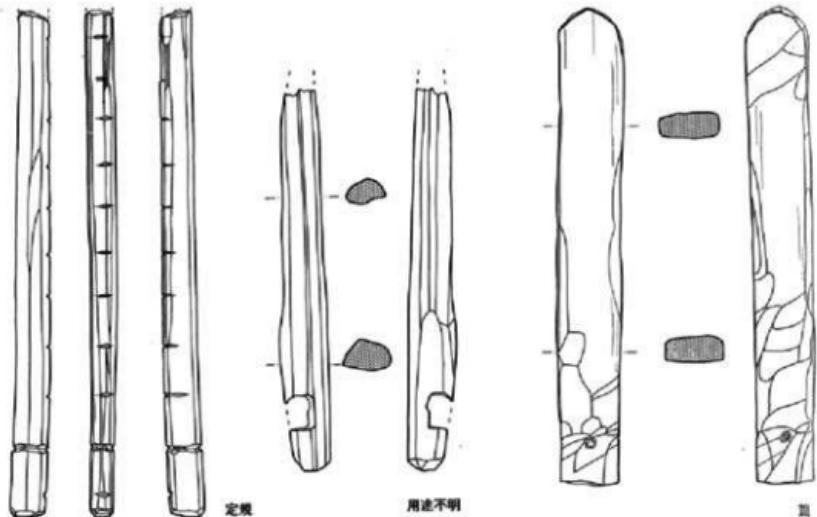


0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20cm

第30図 木製品実測図



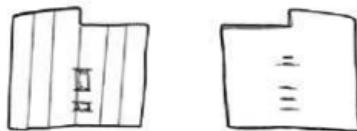
第31図 木製品実測拓影図



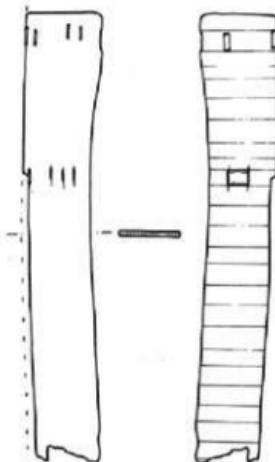
定規

用達不明

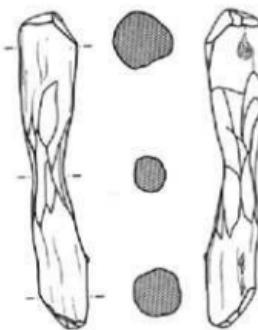
直



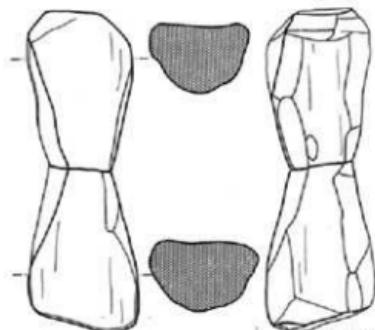
曲げ物



曲げ物



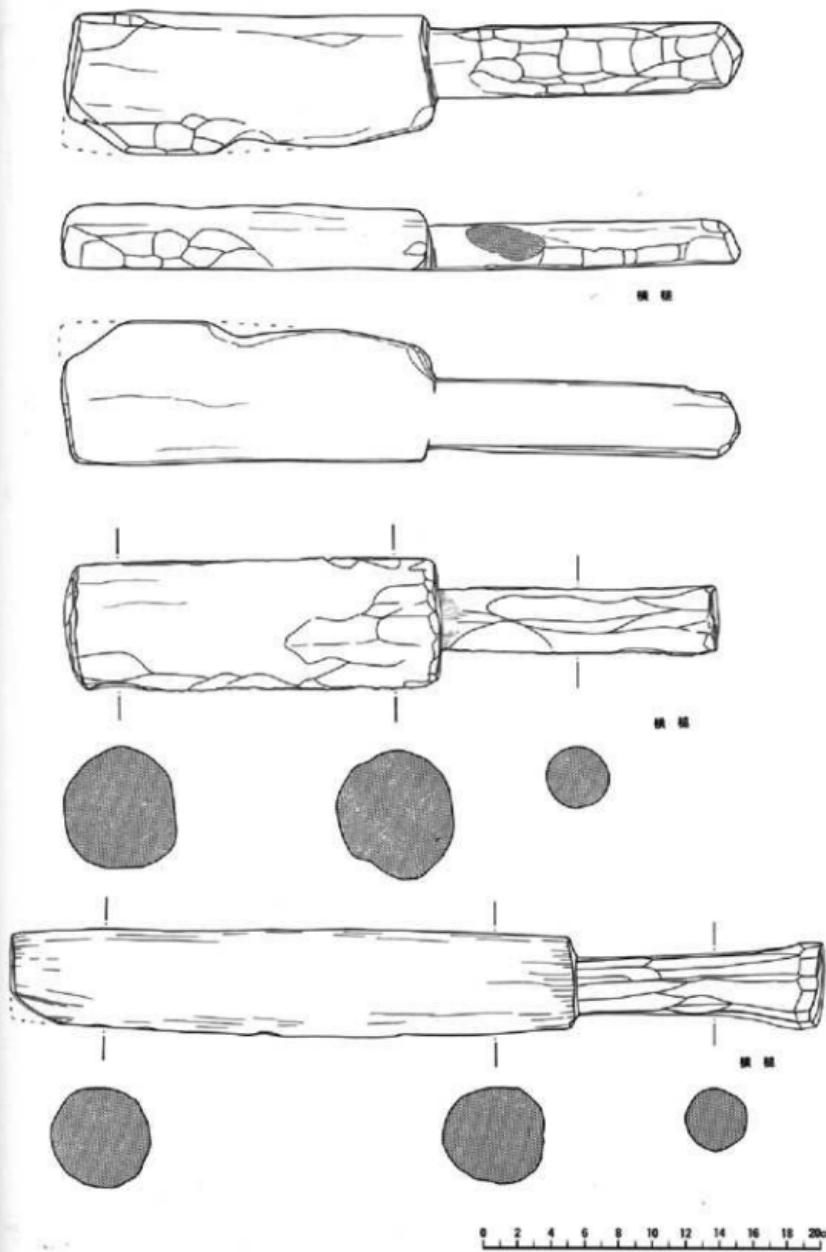
こもづつろ1



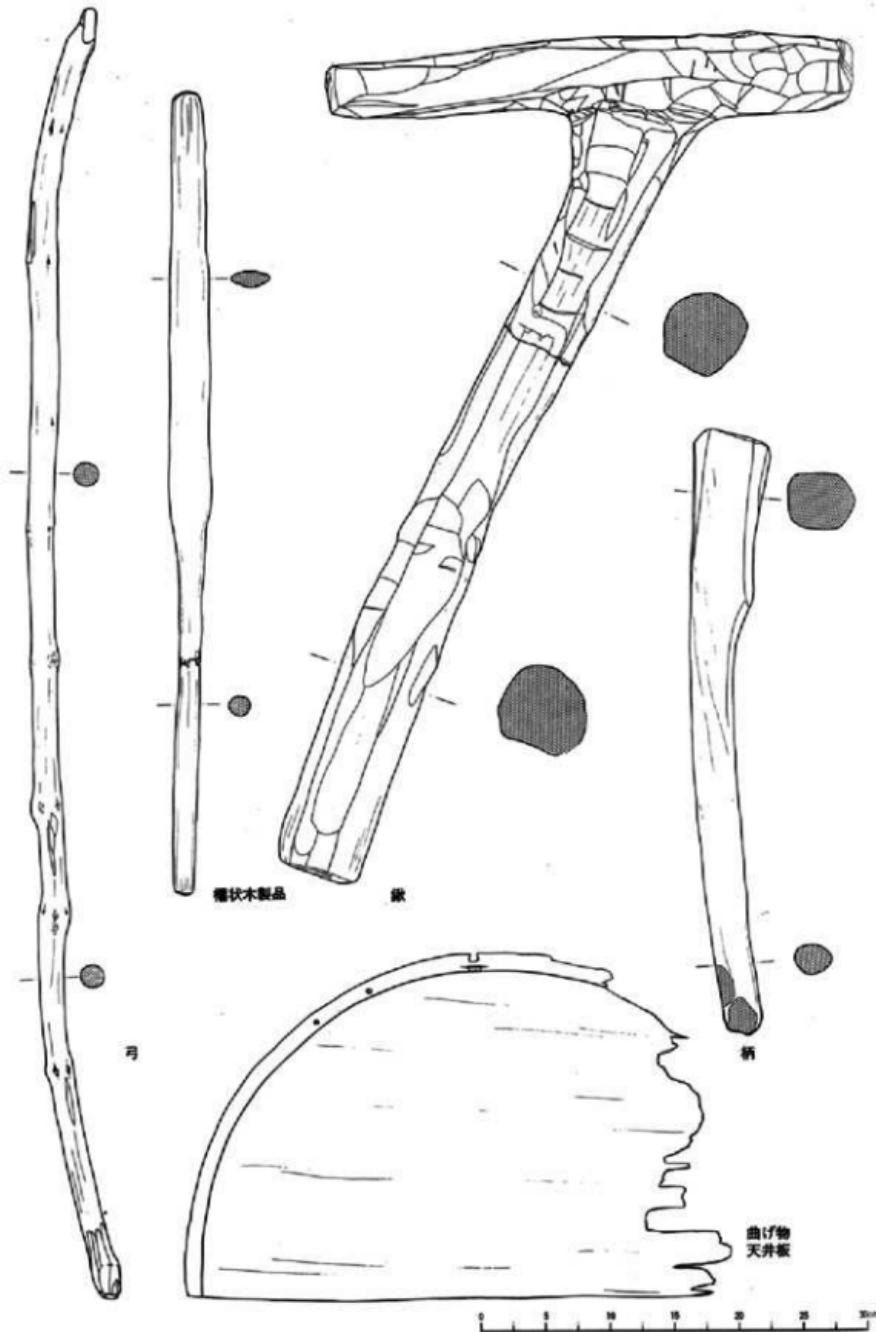
こもづつろ2

0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20cm

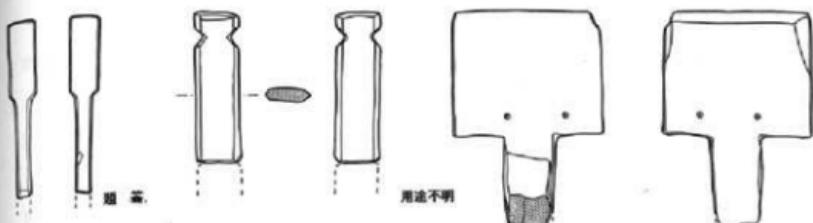
第32図 木製品実測図



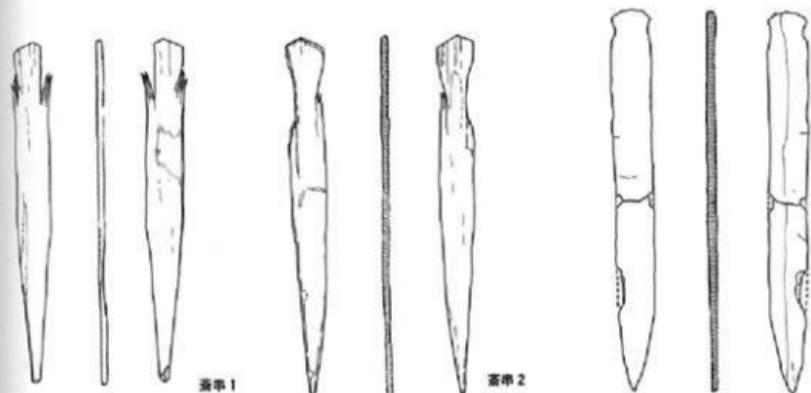
第33図 木製品実測図



第34図 木製品実測図



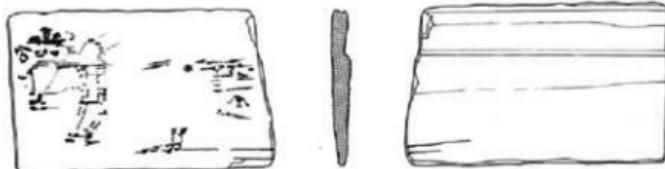
木 筒



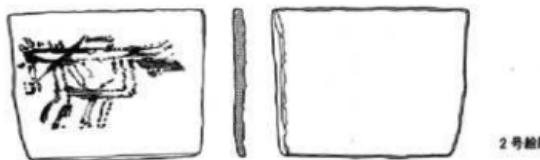
直筒 1

直筒 2

木筒様木製品



1号繪馬



2号繪馬

0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20cm

第35図 木製品実測図

考 察

発見した遺構と出土遺物の事実等を述べてきたが、ここでは、発見した個々の事実関係を4年間の調査をもとに整理して遺構期を設定し、それらの年代を考察することにする。また、出土遺物や遺構の特質より遺跡の性格等を述べてみたい。

1. 遺構期の設定

発見遺構として掘立柱建物跡22棟、素掘り大溝3条、井戸跡3基、土壙跡47基などが確認された。これら掘り方より遺物が発見されたものもあるが、完掘せずプランの確認でとどめたものが多い。そこで、今後の調査において若干の差異が生ずる可能性も考えられるが、整理すると年代的に多様である。しかし、昭和54年度の圃場整備において地山面まで削られ、遺構の確認は地山面での検出となり、遺構期の設定を層位的に見る方法がとれない。そこで、各遺構の切り合い関係を整理し、出土する遺物も鑑みながら設定する方法をとり、建物跡は棟方向を加えて類別を行ない、各遺構の特徴をつかみ遺構期を設定してみる。そこで、遺構の重複関係を整理すると9期に分けることができる。

本遺跡で検出した遺構の年代は昭和54年度に検出した「寛平八年」の木簡と同層位より出土する坏から年代を堆察することが可能である。出土遺物及び出土層よりSD1のFIV層はSD35F6・7層に当たるため、この層を基準として時期の前後関係をあてはめてみると本遺跡の第I期は8世紀末の奈良時代末といえる。SD35F12層前後の遺物がこの時期にあたる。掘立柱建物跡はSB12・16が掘り方の切り合いやプラン確認層からこの時期に当たり、建物の桁行は磁北より若干東の傾きを示し、掘り方より土器片は検出されない。また、柱痕跡に入り込んだ須恵器坏には墨書の「目」の文字があり、この墨書銘及び坏はSD24のF2層と比較的溝覆土上部から出土するもので、SD24は第I期から第II期にかけて利用されたことになる。この溝下層より絵馬、斎串等が出土している。第II期は、第I期のSB16の掘り方を切るSB17である。SB16・17は3間×5間とほぼ正方形に近い掘立柱建物跡でほぼ同じ規模である。SB17の掘り方より須恵器坏片が出土し、その中には墨書土器「目」が発見されたことより、9世紀初頭と考えたい。この時期までにSE2が作られている。第III期はSB16・17と重なるSB14・15・18・19・22となるが、柱根の検出されないSB14・(15)を考えたい。第III期より2間×3間と小さな建物となるが、調査外に同時期の建物群があるものと堆察している。第IV期は同様にSB16・17の掘り方を切るSB18・19・22が考えられる。この中で柱根の検出状況よりSB10・22がこの時期にあたる。建物とSB21の建物跡が、掘り方より出土する遺物、桁行方向より第IV期と考える。第V期にSB18、第VI期はSB19が造られたことになる。SB18・19の切り合いは認められないが、掘り方プラン確認面より3~4cm上面にて柱根が確認され、桁行の柱根もSB18よ

りSB19が残りがよいこと等よりSB18の後にSB19がたてられたと確信している。この時期にSE1が造られており、これは井側外の埋め土より出土する壺類から確認できる。この第Ⅵ期までは掘立柱建物跡が重複することより、時期を区分することができる。そこで、昭和54年に検出したSB1~8のように桁行の方向が磁北より西に傾きをもつ建物群の時期の問題があげられる。これら建物群の柱筋より大きく4時期に区分できる。これら建物群は第Ⅱ層上面で検出され、下層にも遺構があると考えられていたもので、時期的にSB16~19の建物群の後に続くものと考えている。そこで第Ⅳ期にSB2・SB4・SB9が考えられる。SB1はSB2の掘り方を切ることとSB2・4は同じ柱筋である。第Ⅴ期にSB1・SB5が考えられ、SE1の井側が修理されている。第Ⅶ期にSB3・SB7となる。また極端に柱筋の異なるSB6・8・11は便宜上第Ⅸ期以降と考えている。

時期については柱筋を主としたものである。この掘立柱建物群の特徴として柱筋が第Ⅰ期は磁北より若干東に振れ、その後、少しずつ西に傾いていくことがわかる。また柱の掘り方が第Ⅰ・Ⅱ期と古いものは大きく新しくなるにつれ掘り方が小さく、桁行の間は大きくなる。この遺跡の時期は9期に分けられ、1つの建物の耐用年数を25年と考えた場合、225年の間当地域で生活が営まれたことになり、この点について遺物の面からもうかがうことなどが可能である。しかし、これら掘立柱建物跡の時期については、今後掘り方の完掘を行ない、より正確な遺構年代をおさえなければならない。

以上の推察より遺構の重複関係より強いて整理すると以下の表のようになる。

表-5

	西歴 800年			900年			1,000年			
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	
主な遺構	SB16	→ SB17	→ SB14	→ SB22	→ SB18	→ SB19	SB2	→ SB1	SB7	SB8
	SB12	SB20		SB21			SB4	SB5	SB3	SB6
	SE2			SB10			SE1			SB11
	S D24 (F4~7)	(F3~1)								SB13
	S D1 (S D35) (F11~19)	(F8~10)	(F7)	(F6~7)	(F5)	(F4)		(井側修理)		S K20
	木築棟木製品	構造・二面鏡		第一号木闇						SE3 SD6・7
主な遺物	縄馬・畜牛									

2. 出土遺物に見る遺跡の特質

本遺跡から出土する遺物のほとんどがSD1(SD5・26・35) SD24の大溝からの出土である。第Ⅰ期の最下層からは、回転ヘラ切りによって底部を切り離した須恵器壺や縁塊、内黒土師器壺が出土し、年代は8世紀末と考えられる。溝跡覆土上層は10世紀末の赤焼き土器が検出され、SD1大溝跡には8世紀末から10世紀末までの200数年間にわたる遺物が順序よく多量に検出される。以下、なかでも、本遺跡の性格を知る主な遺物をとりあげることにする。

a. 絵馬

本遺跡から2点の墨書き方形絵馬を検出した。絵馬と同層位から出土する壺より8世紀後半と考えられ、奈良時代末期の絵馬となる。奈良・平安時代の絵馬は本遺跡を含めて全国で4ヵ所発見されている。

本遺跡と同じ出羽国の秋田県払田柵跡では、昭和57年度第49次発掘調査においてホイド井泉調査地の井戸跡排水口下層より、8世紀末から9世紀頃と考えられる絵馬が発見された。この絵馬には馬に人が乗っている絵が描かれており、現存する大きさは長さ15.1cm、幅2.3cmで、描かれている絵より材幅は大きいものであろう。奈良時代の絵馬として、静岡県伊場遺跡^{注1}から昭和47年12月に発見されている。同遺跡では平安初期の絵馬を含めて三枚検出され、中央に縫穴をもつ墨書きの方形絵馬であり、土馬、木製馬形が発見されている。^{注2}また、奈良県の稗田遺跡より奈良時代の絵馬が出土し、本遺跡を含めて現在4ヵ所の出土例となる。

伊場遺跡の墨書き絵馬は裸馬であるが、他のものは飾りや人物が描かれている。本遺跡の両絵馬には縫穴はみられず、絵馬と同層より畜串と完形の壺蓋が検出されたことから、神意を意図とするもので、現在の絵馬のように信仰的な意味を有していると思われる。絵馬とは馬を描き、神仏に奉納する信仰的裏づけがあるものである。古代において絵馬の奉納は天変地異といった自然現象や、それに伴う社会的事件に対する鎮めとして神靈に獻上するものである。古代絵馬の奉納において奥野義雄氏は、祈雨・止雨・水神信仰は「国家的祭祀の一環」国家的かつ共同体的宗教行事であったと資料を提示し説かれている。^{注3}

現在、絵馬の発見された4遺跡のうち払田柵は内郭と外郭(角材列がならぶ)に囲まれ、南北に八脚門や政庁があり政治的機能を果していたと考えられている官衙であり、伊場遺跡も郡衙、駅、等と考えられている遺跡であることから、本遺跡においても絵馬、畜串等の一括検出したことより、8世紀末、奈良時代末から官衙的役割を行なっていたと推察できるものである。山形県においては、出羽の国府とされる酒田市の城輪柵より絵馬と同様な意味を持つと考えられる土馬が発見されている。^{注4}

b. 墨書き土器

本遺跡より発見された墨痕のある土器片は約500点発見され、字種も43種を数える。环等土器に書かれた内容は、人名・役職・所属名・地名・場所・数字・吉祥句・器物などを表わしたものではないかと考えられている。これらの环は、8~10世紀の律令体制下における遺跡から墨書きのある土器が数点づつ発見され、本遺跡の東方1~2km内の遺跡からも「部」「吉」の文字が書かれた須恵器の完形の环が発見されている。置賜地域一帯を見ても、^{註5}米沢市の笛原遺跡から木筒とともに、40点の「舟三」「寺」など墨書きのある土器が発見され、郷跡との見方がある。また、南陽市においては、矢の目館遺跡・稻荷森古墳・早稲田地区等より墨書き土器が数点出土している。このように隣接する市町村の遺跡調査において、墨書きのある土器の発見例が多くなっている。この墨書き土器の発見される遺跡を官衙遺跡とはいききれないようであるが、墨書き土器は官衙遺跡を中心として出土すると考えられている。

本遺跡における一つの特徴として、墨書き土器が各層から出土し、各層ごとに墨書き土器に書かれた文字が異なるということにある。本遺跡の墨書き文字は、各層の文字と环の器形よりも大きく4期に分類できる。第1期と考える最下層においては、环のロクロ切り離し痕がヘラ切りを主体とする环底部外面に「南」「大」「依」「淨」という文字が見られる。第2期の环切り離し痕は糸切りとなり、須恵器环が主体となる底部外面に「由」「目」「林」という文字がある。第3期は内黒土師器环が主体となり、体部外面に「二万」「七万」「平」の文字が見られる。第4期は赤焼き土器环が主体となり、体部外面に「直」「射弓」の文字が見られ、墨書き土器が少なくなる。字文や土層から細分できるようであるが、この4期に分類した。のことより、本遺跡においては、確実に最下層に近い（平安初期まで）ものは环底部外面に墨書き文字を書き、上層（平安中期）になると体部外面に墨書き文字を書く特徴が見られる。また、墨書きされた文字は各層ごとに異なりをみせる。また、転用鏡（皿として報告）も多く出土している。

c. 木簡

奈良・平安期における木簡の出土は山形県において、堂の前遺跡（出羽国分寺跡）^{註6}・笛原遺跡（郷跡）^{註5}・本遺跡の三ヶ所の遺跡から木簡の出土例があり、堂の前遺跡からは「急々如律令」と書かれたものが3点、笛原遺跡からは「宝私田曾…」「…全」と題簽状に墨痕のある3点が検出され、以上の文字が解読されている。このように、木簡の出土する遺跡は全国の出土例より、古代都城跡、古代地方官衙、城柵跡からの出土が大半をしめている。

本遺跡出土木簡の解読及び駄文をなされた平川南氏は第1号木簡に書かれている文字よ

り540解物の田租を国司が郡司とともに振入計算し、振定量をわりだした行為であるとし、国司から郡司に下されたのではないかと推測されている。また、第2号木簡においても、國・郡衙の律令行政機関の中での四天王法会の実施などを想定するのが妥当と考え、郡衙級の遺跡であると判断されている。また、緊急発掘調査の時の資料を報告した川西町史上巻をもとに新野吉吉氏は、山形県史に「この官物540(束)は郷海の正倉の後身で郡の下部機構をなししていのでは」と考えられ、掘立柱建物等の下部構造がまだしっかりと検出されていないことより、郡か郡倉の下部機構であるとの判断を下されていた。

このように、木簡の出土より名類聚抄に記される置賜郡衙か、それとも郷跡か等と論じられたものである。しかし、その後の重要遺跡確認調査においては溝跡の部分的な掘り下げを行なったにすぎず、文字の判読できるものではなく、墨痕のあるもの1点と木簡様木製品が発見されたにすぎない。

d. 焼米と焼けた穀類

第一号井戸のF3～4層(SD35F3層上)より炭化した焼米と炭化した穀類が出土している。この井戸覆土のF2～7層は草の入る炭化物の多量にある黒色土で、建物の火災後自然堆積状にこの井戸の中に入り込んだものと解釈し、この火災の後に遺跡が廃絶したものと考えている。

発見される米は焼け焦げたもので、種子は穀殻から脱粒しているものもある。また、小豆、ささげの種子も焼け焦げている。この焼けた穀類より、井戸の近くに穀倉があり、この建物が焼失し井戸内に入り込むという想定がなりたつものである。これら炭化物は、井戸水を利用して入り込んだものではなく、多量の炭とともに検出されたものである。井戸のプラン確認時においても炭を多量に含む黒土がリング状になっているプランで、中央部に褐色の土がおち込んでいるものであった。

この井戸の覆土は層ごとに採集し保存しているため、焼米等の数量は多くなる。

まとめ

4次年の調査により出土した遺物から、古代8世紀末から10世紀末の主要な官衙遺跡であることが判明した。古代の官衙となると、和名類聚抄にある置賜郡の郡衙跡や、また、この郡には置賜郡、廣瀬郡、星代郡、赤井郡、宮城郡、長井郡の6郡があり、このいづれかの郷跡か、それとも置賜郡に付随する寺院跡か等との見方もなりたつことになるわけであるが、当郡内における官衙的性格の遺跡の中で遺物、遺構に於ては抜きんでているものであり、本遺跡を古代の主要な地方官衙と位置づけられ、郡衙跡かそれに付随する遺跡と見ている。本遺跡周辺には、同年代(平安期)の遺跡が数ヶ所その後の分布確認調査において発見され、本遺跡を中心として3～4km内に古代の集落が広がっていたことが判明し

^{註8} ている。また、南方にある天森古墳は、後方部と前方部の長さの比率が6:4.5型式の左右対称の4世紀末から5世紀初頭の前方後方墳であることが確められ、西方にある下小松山には20～35mの後円部と前方部の長さの比率が6:3.5型式(第98号墳)の前方後円墳状の墳丘が15基発見され、円・方形の墳丘が200基あまり確認されたことより、本遺跡周辺は早くから置賜郡の中心として水田等、農地の開発が行なわれ、畿内勢力との関わりのある、中央文化の浸透等も推察し得るものである。

本遺跡一帯は、出羽国置賜郡であり、文献上で最初に見られるのは、「日本書紀」で持統3年(689年)の記事である。記事には「務大肆陸奥國優嗜暴郡域養蝦夷脂利古の男麻呂と鐵折と鬱髮を刷り沙門と為らんことを請ふ。云々」とあり、陸奥國優嗜暴郡は當時陸奥國に属していた置賜郡といわれる。

この置賜郡の創建は大化改新後もないころといわれる。その後『続日本紀』の和銅5年(712年)に越後国は出羽郡の新設を上申し許可され、新設した出羽国に陸奥國より最上置賜の二郡が移されたことが記されている。この置賜の古代郡衙の所在地は、郡衙を意味した「郡家」から転じた「郡山」という地名になって後世に伝わっているという。そこで置賜には高島町の「小郡山」と南陽市の「郡山」があり、奥羽山脈を越えて置賜盆地に入った所である高島町の小郡山が古郡家と解され、その後、出羽国管下となり、平野部の中心部の南陽市の「郡山」がこの郡衙の遺名を伝えるものという。

そこで、本遺跡を私考するに現置賜郡は、現在の長井市・小国町等も郡内に入るわけで、地理的に置賜郡の中心は板疊町手ノ子付近となる。また、生活圈といえる平野部をみた場合には、本遺跡の東側が中心となり、川西町「中郡」の字名は、この置賜郡の郡の中ほどであることから、この地名がつけられたとも推察できるものである。交通の便をみると場合最上川を利用したものと考えられ、最上川の支流の犬川が、本遺跡の東側を流れていたとのことで、昭和42年の羽越水害の折は遺跡の東側に流路をとっている。このように、郡衙跡を置賜の中心部と見た場合、地理的に本遺跡を置賜郡衙跡としての推論がなりたつようである。^{註9}

また、加藤稔氏は置賜郡域は、古代末期から中世にかけて米沢盆地の南辺に成島庄、東辺に屋代の庄、そして北辺に北条の庄が成立し、郡から分離、独立し、郡の管轄下に残されたのは、盆地の西辺と長井盆地であり、本遺跡周辺は中世の置賜郡として再編され、公領としての生命を保つのは偶然ではなく、郡衙の存在があったものと考え、本遺跡とその周辺が平安中期以降の郡衙であると説かれている。置賜郡衙の所在地は、小郡山・郡山・本遺跡と変遷したのではないかと考えられ、一般に推察されている。しかし、これら郡衙擬定地の発掘調査を行ない、本遺跡においても調査地を広げ、周辺部の遺跡群の下部構造を把握することにより、より正確な郡衙としての意味づけができるものである。

要 約

1. 遺伝遺跡は、現置賀郡のほぼ中央に位置し、川西町大字下小松字道伝に犬川がもたらした河岸段丘上に立地している。遺跡は東西300m×南北300mの面積90,000m²と推察している。しかし、区画線は確認されていない。
2. 建物群は9期に分け、大溝を中心として、営なわれていたと推察することができる。
3. 木簡・絵馬・墨書き土器より、奈良時代末から平安中期に至る200年間に及ぶ官衙跡で、「置賀郡衙」とも推察することができる。
4. 大溝より出土する遺物は層ごとに器形、及び墨書きの異なりを示し、遺物の変遷をとらえることができる。

参 考 文 献

- 註1 秋田県埋蔵文化財振興会「払田福跡」第46~52次発掘調査概要 1982
- 註2 浜松市遺跡調査会「伊場遺跡」第8~13次発掘調査概報 1981
- 註3 奥野義雄 奈良県立民俗博物館 民俗博物館研究紀要第6号 1982
- 註4 酒田市教育委員会「史跡城輪福跡」昭和54年度発掘調査略報 1980
- 註5 米沢市教育委員会「笛原遺跡」米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集 1981
- 註6 山形県教育委員会「堂の前遺跡」山形県埋蔵文化財調査報告書第30集 1980
- 註7 山形県史「第一卷」原始・古代・中世編 1982
- 註8 川西町教育委員会「天神森古墳」川西町埋蔵文化財調査報告書第6集 1984
- 註9 山形県「国土調査土地分類基本調査図」あかゆ・かみのやま 1983
- 註10 加藤 稔 山形県立山形南高等学校「研究紀要」第23号 1982

山形県道伝遺跡の木簡

国立歴史民俗博物館 平川 南

第1号

〔事例〕
 宽平八年計取官物□
 去七年料 本倉實五百冊□
 〔斜角〕
 〔前角〕
 □□官物計取如件□□

□□

長さ45.0cm×幅(2.4~1.6cm)×厚さ0.7cm。011型式。

S D 1 第IV層出土。両側面欠くとくに下半部の朽損が著しい。表面は腐蝕のため、本来の面を失っている箇所がある。裏面は全体的に削りとられ、若干の墨痕をとどめるのみである。柾目材

第2号

〔事例〕
 四天王□□ 観世音経一 精進経一百八 十一面陀一百十
 合三百冊□
 〔部〕

多心経十六 涅槃經陀六十五 八名菩薩陀卅

□

長さ51.2cm×幅3.4cm×厚さ0.7cm。011型式。

S D 1 第IV層出土。上端から13cmと26cmの箇所に木クギが残存している。板目材。

第3号

〔事例〕
 □□□□□□□
 〔前角〕

長さ(13cm)×幅2.3cm×厚さ0.1cm。081型式。

S D 1 第IV層出土。表の右半分と裏面は完全に墨痕が削りとられている。柾目材。

第4号

栗毛□

長さ(16.2cm)×幅2.6cm×厚さ0.5cm。081型式。

S D 1 第V層出土。裏面は剥離した形跡がある。表も下端から長さ約5cmほど木筒の面が剥離されている。下端は欠損している。柾目材。

